



丹波法  
何鹿郡  
下巻  
卷九

京都府立総合資料館所蔵





持
992
31
9

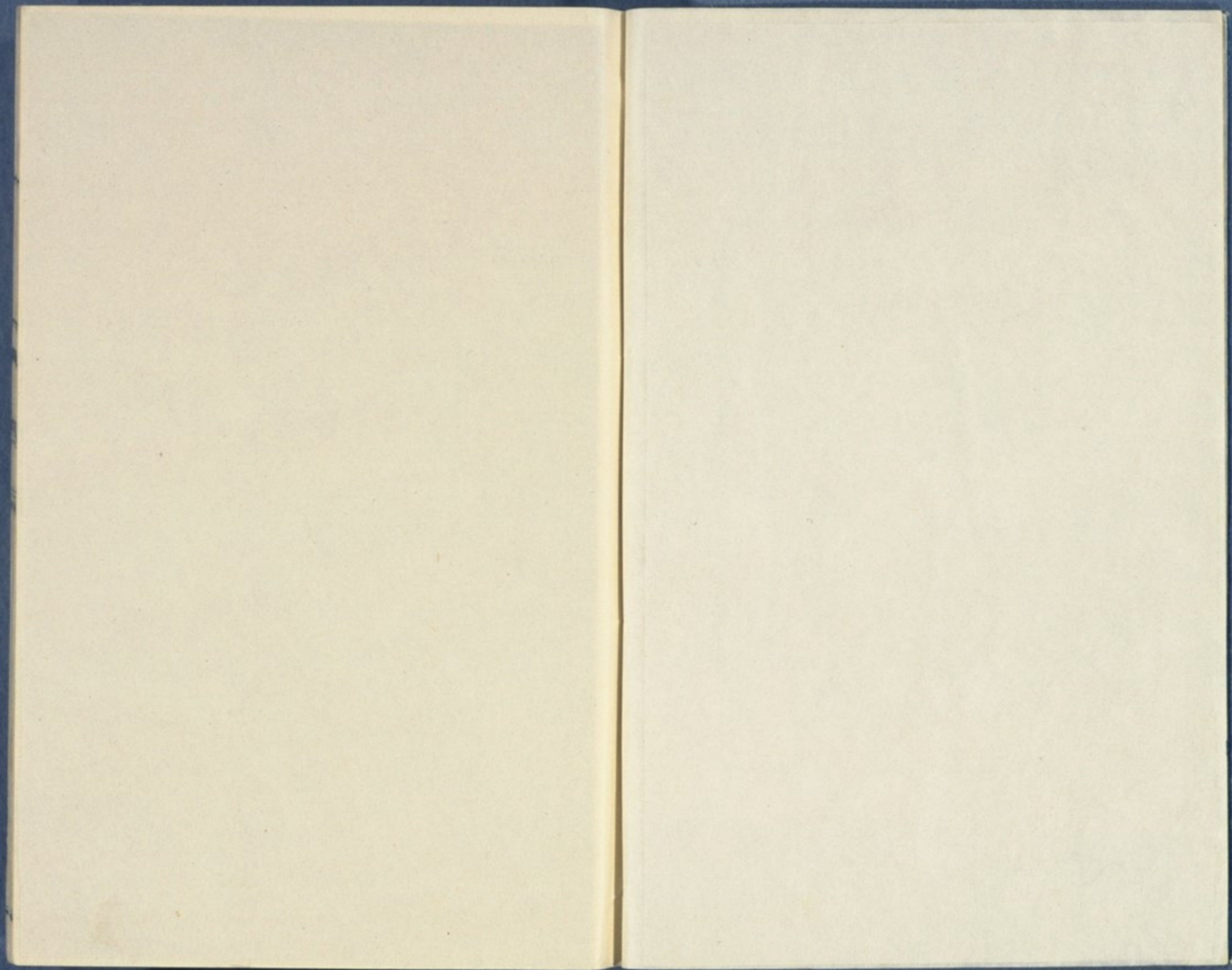
○北村先生編 丹波誌 一部拾五卷  
先生に請ひて二部を淨寫し  
京都帝國大學圖書館と京都  
府立圖書館に各一部を寄託  
す

大正拾四年七月一日

北村龍象先生喜壽會

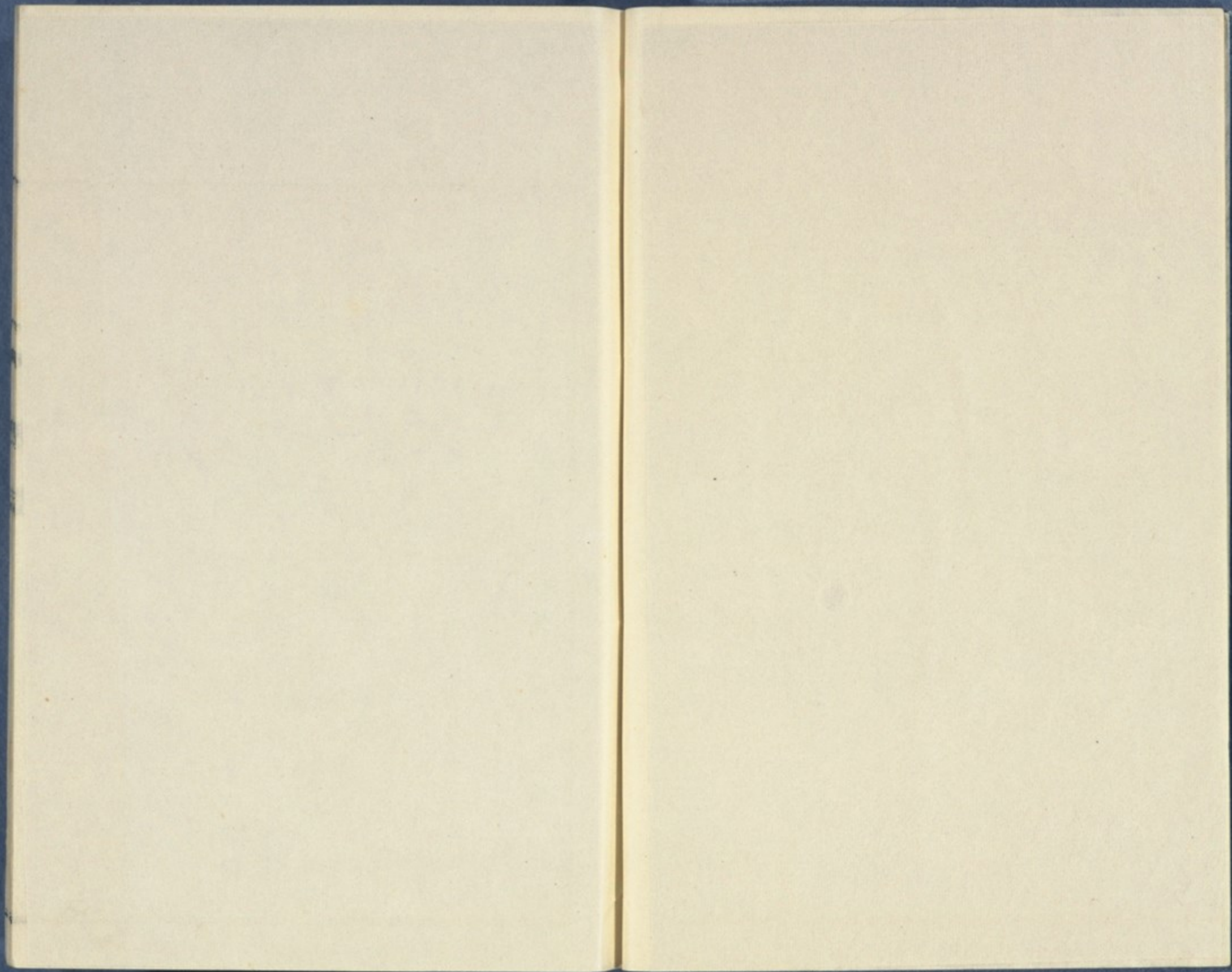
(北村先生喜壽會結末報告書を添附す)





京都府立総合資料館所蔵





京都府立総合資料館所蔵



何鹿郡下

山家村

山家村 大字 鷹栖 廣瀬 西原 下原 上原

戸奈瀬 和木 釜輪 橋上

和漢三才圖繪云至江戸百三十九里坤至漢部

二里半北至丹後田邊五里

舊稱山家十四箇、山家 廣瀬 鎌輪 戸奈瀬

井坪 下溝内 上原 下原 鷹栖 橋上 塩谷

下八田 所養 淵垣 山家村ヲ以テ一封疆ト

爲スヤ十四村ヲ合セテ一山家ト爲シ町村制ヲ施

行スルニ當リ九箇ノ大字ト爲シ之ヲ一山家村ト

ス

地勢ハ郡ノ東南ニアリテ東北ニ上林アリ西嶺南

ニ綾部アリ相並ニテ郡中ノ集合離散ノ要點トス



上林川東北ヨリシ和知川東南ヨリシテ此ノ地ヲ  
 狭ム川外ニ在ルモノ舊村九個ヲ合セテ兩山脈ニ  
 狭迫セラレテ峽勢ヲ爲シ田野從フテ乏シ  
 谷氏祿中三千八百九十二石ハ此ノ畧ニアリ  
 九百七十一石 山家橋上 所養 鷹栖上原 廣瀬  
 錦輪 戸奈瀬 井坪 境内 垣谷 二百二十石 下原  
 西原 千三百四十九石 下村 下八田 洲垣 元祿  
 高千五百七石四斗九升 山家十四箇村 二百四十七  
 石二斗三升 山役 内百石 谷縫 殿助知行  
 人家百三十戸 旅亭三戸 小店簷ヲ並べ農具雜貨  
 ヲ鬻ク 明治二十七年  
 産物 鮎栗茶絲 米田桑園少シトセズ米質不良

山家村

丹波志

製絲家四戸石油機ヲ以テ製出スル高年三百五十  
 貫及價壹萬八千六百餘圓 二十七年 中等養蚕傳習  
 所アリテ生徒ヲ出カス<sub>7</sub>多シ融通合資會社アリ  
 テ産物ヲ幫助ス 街路崎嶇トシテ城下ト唱フル  
 所五町許之ヲ鷹栖トス豪家大戸無ク草屋菱舎半  
 農半商人力車只八輛ソレスラ常ニ廻轉セズ明治  
 十三年全町ヲ燬却ス今ハ再築シテ是レデモ維新  
 當時ニ比スレバ面ヲ革メタルナリ綾部ハ郡中ノ  
 要部ニシテ距ル僅ニ里半コレカ爲ニ利潤ヲ汲收  
 セラルモ亦地勢ノ然ラシムルナリ 公立ノモノヲ  
 數フレバ役場郵便局學校ノミ 古時舟楫野々村  
 ニ通シ南方郡村ノ運路アリシモ積載品ノ些少ナ



ルヲ以テ中途ニ蹉跌シ野々村ヨリ福知山ノ運  
 路ハ次第ニ佳良ニ赴クヲ視テ只垂涎スルノ三椀  
 筏ハ外谷ニ通ス筏差ヲ以テ業トスル者多シ渙利  
 ハ士族ノ資トナルヲ封縣時代ヨリ然リ鮎ノ味美  
 ナリ荷ヲテ走り京都ニ入ル  
 時候 華氏計最寒二十七度最暑九十度 雪平地  
 ニ尺五寸ニ及ブ近年減ス  
 田得米 上田ニテ一畝歩ヨリ平年一石五斗 此  
 ノ内ヨリ田主所得五斗麦一石ニ斗ハ作得  
 風俗 樸陋ニシテ事々舊套ヲ墨守シ文明ノ風潮綾  
 部ヨリ吹キ送ルモ勤スレバ之ニ反抗スルヲ以テ  
 得策トシ三十八年今猶舊曆ヲ用ヒ郡令町示モ一

紙ノ反故視セラル學校ハ設ケラレテ寺子屋ハ廢  
 シ封無罷ノラレテ士族ニ常職無ク戸長出デ、庄  
 屋退キ愚民ノ耳目具ノ方面ニ送フ所ノ府知事長  
 谷信篤御ト楳村正直ト、交迭アリ新知事ノ急劇  
 華改大ニ民心ト相容レザルニ加ヘテ斷髮令出デ  
 一層ノ反抗ヲ誘引セリ是レ正シク日本ノ風俗ヲ  
 キ破シ外國化セントスルナリ是レ即チ日本亡滅  
 ノ兆候ナリナド申唱乙和彼處ニ三々此處ニ五々  
 相寄り相集リ後所ニ嘆願セント云フアリ令命ヲ  
 峻拒スベシト叫ブアリ寺院ニ於テ連判スルアリ  
 福前ニ血誓スルアリ遂ニ八村ノ百姓一揆トナリ  
 竹槍木刀鐵銃ヲ奉ニシ肩ニスルノ數百名木綿旗

京都府立総合資料館所蔵



押立立ッ京都府官吏ノ宿セル若松屋旅亭ヲ十重  
 二十重ニ圍ミ鯨波ヲ作りテ責メ込ミタリ官吏數  
 名ハ漸ク身ヲ以テ免レ後林中ニ潜伏ス之ヲ頃ク  
 シテ警吏馳セ附キ隣村警吏ト相呼應シテ鎮撫シ  
 檢擧シ張本人廣瀬某以下ヲ捕縛シ事成クヲ得タ  
 リ張本人ハ懲役ニ處セラル他府縣ニハ見レ稀ナ  
 ル事情ナリシ此ノ旅亭ヨリ奇兒ヲ出ス菅生傳  
 三郎ツノ人ナリハ學時ヨリ奇習アリ卒業後郷里  
 ヲ出デ、四方ニ遊ビ魯語ヲ習得スルニ熱心ナリ  
 當時世人ハ英語ヲ以テ萬國語ノ最上乘トシ苟モ  
 外國語ト言ハバ必英語ナルニ傳三郎ハ日魯交通  
 ノ先導ヲ以テ自任シ意ヲ決シテ渡航シ魯領ニ入

リ年齒二十三時ニ明治二十七年ナリ  
 式内 伊也神社 谷氏舊陣屋山上ニアリ  
 谷靈神社 谷氏始封ノ君衛友ヲ祀ル宇廣瀬ニア  
 リ舊陣屋ノ地ナリ三巨岩相擁スルノ中ニ垣地ア  
 リ六柵蔽フノ下ニ小祠ヲ安シテ其舊庭ニ係ラル  
 ヲ以テ性趣ヲ存ス然レハ雜草繁茂シ路爲ノニ通  
 セズ山家村宇釜輪ノ民木下勘右衛門櫻樹ヲ植エ  
 其風趣ヲ添フヤ好ミスベシ領君ヲ追慕スルノ情  
 ヤ深シ舊臣年ヲ逐フテ退散シ賽者寥々タリ  
 祭禮 九月九日ヲ以テ氏神祭祀ヲ行フ人民飲食  
 醉飽スルノミ由リテ喰祭ト呼ブ  
 八月十五日ハ舊年平氏ノ入部ヲ許シ部内ニテ人



形芝居アリ君侯ノ臨遊ニハ儀式嚴ナリシ  
 岩根神社 上原ニアリ役行者ヲ祭ル舊曆五月一  
 日賽者遠方ヨリス  
 覺王寺 舊稱天然寺臨濟宗 谷氏菩提所 惠心  
 僧都行脚廻國ノ際此ノ處ニ留錫シテ小菴ヲ營ニ  
 藥師如來ノ像ヲ自彫シテ本尊トシニ六時中勤行  
 シタルガ幾許モ無クシテ僧都去ル隨喜ノ徒輩コ  
 レヲ保存シテ藥師菴ト呼ビ僧都ガ在リシ如クニ  
 供養シタルモ星霜ト夫ニ移リ自然衰頽セルヲ寬  
 永年間領主谷大覺頭由緒ヲ聞キテ信念ヲ起コシ  
 時々參拜シテ香花ヲ供シ堂宇ヲ修築シ寄附永存  
 セシメタリ

五坪瀑泉 西原ノ西北五六町許ニ山間ヨリ注出  
 スル泉滴數派草叢樹底ヲ縫ヒ岩石ヲ綴リ帛布ヲ  
 懸ケタラシ如クニシテ下ル山家村ノ一奇景トシ  
 立岩ト併稱セラル  
 産物 鮎及ヒ塩引 塩引ハ落鮎ノ子持ヲ其ノ儘  
 カラスミノ如クニシ固メタルモ東京ニ輸出シ酒  
 客ノ賞味ヲ博ス藩士某ノ發明スル所ニシテ士家  
 消閑ノ杜事トス又内職ノ一ニ居リ平民ハ之ニ興  
 カルヲ許サバリシガ維新後農家漢戸亦自由ニ製  
 出ス 甘藷 鷹柘 西原ニ産ス  
 丹波ノ天才博士 菅井嘉兵衛妻縫ノ間ニ呱呱ノ  
 聲ヲ揚ゲタル一小兒名ヲ竹吉ト呼ブ嘉兵衛十八

京都府立総合資料館所蔵



歳ニシテ村惣代ニ撰マレテ三十年間在職スルモ  
 珍ラシキニ縫女ノ敬神ナル上ニ溫柔敏慧ナル家  
 庭ニ育テラレ初ヨリ望ヲ大ニシ小學ヲ出テ、漢  
 學ヲ專修シ諸所ニ轉學シ遂ニ大學ニ入り卒業シ  
 タリト云フ  
 白波瀬左衛門ハ山家城主和久左衛門佐ガ臣ナリ天  
 正年中明智光秀コレヲ陥シト欲シ日夜思惟ス  
 レドモ白波瀬ノ智畧拔群ニシテ忠臣ナルヲ以テ  
 卒莫ニ攻戰シ得ズ乃チ佯リテ和ヲ結フ和久ソノ  
 謀トモ知ラズ直ニ承諾シテ幼女ヲ送り出ダシ質  
 トス一年ニシテ女死ス和破レ内藤備前守兵三千  
 来リ攻ム城險ニシテ兵勇數ク出テ、戰フ内藤方

敗ル城中ノ銃兵三十六人進路ヲ遮ル内藤方五十  
 七人敗死ス足輕ノ敗亡死歿數ヲ知ラズ光秀大ニ  
 恐レ姦計モテ又使者ヲ送り和ヲ議シ神文ノ誓紙  
 ヲ附シ利害ヲ説キ東軍ニ降ルヲ勸ム白波瀬主君  
 ニ語ゲテ曰ハク臣光秀カ人ト爲リヲ熟思スルニ  
 不信ニシテ歎心アリ今俄ニ和ヲ議スル本心ニア  
 ラズ吾ガ味方ノ勇氣ニ怕レテ和ヲ議スルナリ我  
 ヲ急ラセテ虚ヲ打タシムル意ナルヲ鏡ニ掛ケテ  
 明ナリ今コレヲ許サバ石ヲ抱キ淵ニ投ズルヨリ  
 モ危シト諫言頗ル勉ム和久聞カズ曰ハク光秀ハ  
 當時一國ノ主トナリ萬人ヲ指揮スルノ身ナリ奈  
 何ゾ詭ヲ以テ人ヲ殺サンヤ况シヤ約スルニ神



文ヲ以テ天地神祇ニ誓ヘリ若ユノ誓ヲ破ラバ天  
罰彼トガ身ニ降ラシム何シゾ疑フトアランヤト終  
ニ之ヲ許ス光秀心ニ莫クテ之ヲ招ク白波瀨大ニ  
嘆息シツ、和久ニ隨ヒ敵陣ニ入ル光秀喜ビ迎ヘ  
テ之ヲ饗ス其ノ歸ル途ニ矢數十百人アリテ和久  
主從ヲホツテ白波瀨恐ル氣色モ無ク數人ヲ殺シ  
テ主人ト共ニ仆ル

和久左衛門長利ハ横山大膳大夫頼氏ノ弟ニシテ  
勇武ノ將ナリ 天田郡福知山町 記事参照 永祿六年三月天田郡和久  
莊山田城ヨリ来リ和知上林ノ兩方面ニ働キ勝利  
ヲ得テ新領主トナル山中ノ照福寺ニ據リ城守ス  
谷氏ノ部ソノ麓ニアリ寇アラシカ谷氏ノ據リ以

テ拒戦スベキ要害ニテ氏君臣ガ年頃軍事ニ付キ  
心ヲ用ヒ矢ヲ鍊リタル遺蹟トス

天正ノ末年ニ當リ天田郡三侯城主八木備前守攻  
メ来リ四方氏谷氏 大名ノ谷ニアラズ ヲ相手ニ戦ハントセシ  
ガ當地郷士ノ策ニ中テラレ戦死ス土人コレヲ憫  
ミ莫ノ首ヲ得テ上原中原ノ間ナル原野ニ埋ム之  
ヲ備前ガ尾ト云フ此ノ時郷士中ニ策士アリ兩フ  
ル夜間諜ヲ敵陣ニ入レ其ノ油断スルニ乗ジ弓ハ  
絃ヲ切り断テ銃ニハ水ヲ含マセ置キ其ノ明朝コ  
レヲ襲ヘルニ敵大ニ狼狽ニ爲ス所ヲ知ラズ或ハ  
殺サレ或ハ降ル主將備前守モ亦爲ス所ヲ知ラズ  
奮闘シテ首ヲ取ラレタリト云フ 船井郡八木城

京都府立総合資料館所蔵







待主 律預ノ長子 律昉ト改名ス 出羽守 後ニ播磨守 從五位

丹波志

三道具  
千ト程シ





京都府立総合資料館所蔵



衛好	姓源谷野氏改テ谷トス
衛友	衛好ノ子 從五位出羽守 山家一萬六千石ヲ領ス 三男衛成衛勝衛政アリ 衛政嗣
衛政	從五位大學頭
衛廣	從五位出羽守
廣賴	衛廣ノ子 大學ト稱ス 稚ク早世
衛衛	出羽守ト稱ス 廣賴ノ子 從五位
衛將	大學ト稱ス 衛衛ノ長子 相續セシテ死ス
衛秀	播磨守 衛衛ノ六男 衛將ノ養子トナル 從五位
衛量	衛秀長子 出羽守 從五位 播磨守 從五位
衛萬	衛量ノ長子 大學頭 從五位
衛彌	衛萬ノ長子 妾服ノ子 右京亮 衛萬逝去ニ際ニ急養子トナル 從五位
衛封	衛彌ノ長子 衛昉ト改名ス 出羽守 後ニ播磨守 從五位

丹波志



安永元壬辰歲  
 銀壹匁  
 八月吉祥日  
 丹波國山家

役所

五穀者民也 司命也 黃金勿希者 民也 通貨也 制其通貨 御其司命



誅近江國村郷  
石甲子氏ノス

衛弼 本多兵部大輔康頼ノ三男衛昉ノ養子ナル從五位下播磨守  
衛滋 北平播磨守頼繩ノ弟 衛弼ノ養子ナル  
壽衛

開衛 大正六年壽十四歳

谷家畧史 從五位出羽守谷衛好ハ美濃国席田郡  
伊志良村ナル僻地ニ生マル岐阜ヲ距ル数里ノ北  
方一小邑ノ奇傑男兒ヲ産ス一説江州大上郡ノ人  
幼ニシテ岸傑衆童ニ伍セス父ヲ福田六兵衛尉正  
之ト呼ブ源氏ノ庶流ニ属ス伯父ナル谷野太郎左  
衛門尉細衛ノ養フ所トナリ数年甲賀郡長野村ニ  
住シ遂ニ父ノ許ニ復歸ス然ルニ猫谷野氏ヲ冒シ  
名ヲ大膳ト稱ス長スルニ及ビ武事ヲ好ミ生ヲ山

野ニ托スル能ハズ出デ、豪族長井道利ニ依ル幾  
年ナラズシテ道利ノ死スルニ逢ヒ國守齋藤山城  
入道々三ニ臣事シ道三亡ビテ木下秀吉ハ抱シテ  
織田信長ノ臣籍ニ加フ信長命ジテ氏谷野ヲ改メ  
單ニ谷ト稱セシム甲賀郡谷村ニ因ムニ由ルト云  
フ信長早ニ衛友ノ勇傑伎倆ヲ知り戦争アル毎ニ  
隨ハシム勝龍寺ノ戦ニ敵首ヲ實檢ニ供ス信長之  
ヲ賞シ飲ム所ノ盞ヲ賜ヒ一嚥セシメ手ヅカラ五  
箇ノ丸餅ヲ其ノ刀筭ニ貫キ之ヲ喰ハシム是レ異  
數ノ賞ナリ天正六年信長羽柴筑前守秀吉ニ命シ  
播磨ヲ攻メシム信長命ジテ共ニ不可キモノヲ撰  
ハシム信長ニ乞ヒ衛好ヲ以テ寄將トナサントス

丹波志



信長曰ハク援將トスベシト蓋シ其ノ客將トシテ  
待過スベシトノ意ヲ示セルナリ時ニ山陰山陽信  
長ニ販セズ別所小三郎長治ノ三木ニ據リ東軍ヲ  
防グ東軍壘ヲ賀伏坂ニ設ケ國ク之ヲ守ル長治ノ  
弟彦之進小八郎等ノ軍平山ヲ攻ム平山ハ羽柴氏  
ノ陣營ナリ攻撃頗急ナリト聞クヤ衛好子衛友赴  
キ救フテ敵ヲ退ク敵又新子ヲ以テ賀伏ヲ攻ム衛  
好ノ家臣福田左京進土田ノ一族彦三郎小傳次等  
十一人戰フテ仆レ其ノ他死傷頗多シト聞クヤ衛  
好父子嚮ヲ并ベテ返リ防戰太勤ム衛好十餘創ヲ  
被リ猶フノ城寨ニ近ヅク能ハズ三敵騎迫マル槍  
モテ鋌キ三騎ヲ斃シ送者ヲ顧ミ之ヲ敵ヒシム又

二十騎ニ過フ衛友瞑目怒弔スレバ逃グ逐フテ城  
寨ニ近ヅクテ二回猶入ル能ハズ秀吉前進シ之ヲ  
看テ曰ハク大膽平日ノ大膽今日ノ老耄ト衛好怒  
リ答ヘテ曰ハク城寨固ク矢又多レ俄ニ抜ク可ラ  
ズト秀吉具ノ不遜ヲ愈リ刀ヲ按ス衛好劔ヲ揮フ  
テ之ニ當ラントス竹中重治峰須賀家政間ニ居リ  
開論調停ニ衛好ヲ強ヒ陣所ニ送還ス其ノ夜秀吉  
酒肴ヲ携ヘ谷氏ノ陣ニ入り謝シテ曰ハク今日ノ  
合戰君最カム實ニ拔群ノ功ナリ我レ前言ノ愆ヲ  
謝ス請フ怨ヲ解ケ共ニ興ニ忠ヲ竭クサント杯ヲ  
勸メ献酬ニテ去ル自後戰攻數十回明年七月十日  
城兵出テ平山寨ヲ襲フ衛好父子赴キ救フ敵又



采リテ賀伏ヲ攻ム衛友苦戦ス敵群至シテ味方継  
 カス衛友遂ニ仆ル別所長治ノ軍卒室小矢衛ナル  
 モノ進シテ敵首セシトス衛友左ハサセジト之ト  
 闘ニ終ニ隍中ニ逐ヒ之ヲ斬リ又戦ハントス秀吉  
 ノ来リ援フニ遣フテ衛友ハ全キヲ得戦ルヤ  
 源トス前後戦鬪無数大小勲功十九度死骸ヲ檢ス  
 ルニ兩腋ニ銃劍アリ賀伏山中ニ墓標ヲ立テ改葬  
 ノ表識トス土人コレヲ大膳塚ト呼ビ香華ヲ供ス  
 瘡病者コレニ向テ祈願スレバ瘡鬼去ルトテ賽  
 者ノ跡往々ニシテ在リ故ニ後年數十百星霜ヲ經  
 テ香花絶エズ衛友名ハ甚太郎ニ百石ノ士ナリシ

○  
 搜シホノ父ノ屍ヲ負  
 敵中ヲ驅ケ廻リ  
 所陣ニ

ガ父ノ死後六百石ヲ得時ニ年齒十七自後カヲ秀  
 吉ニ奉ズ秀吉ノ推薦ニヨリ増祿セシム茲ニ丹波  
 ニ所領ヲ賜ヒ山家ニ入り天正十一年瀬川一益ヲ  
 討チ又江州賤ヶ嶽ノ役ニ功アリ以後各所ニ轉戦  
 シ中ニモ十五年嶋津義久征伐ニ殊功アリ秀吉時  
 ニ越中尾張以西三十七個國ヨリ糧ヲ徴シ兵十五  
 萬ヲ以テ四月豊前ノ馬嶽ニ陣ス秋月種實嶋津氏  
 ノ爲ニ叢石城ニ據ル城ハ豊前筑前ニ跨リ堅固ノ  
 名アリ秀吉丹波少將秀勝ヲシテ攻城軍ニ當ラシ  
 ノ蒲生飛騨守氏郷ハ城ノ前面ニ前田利長ハ其ノ  
 背後ニ逼リ衛友ト小野木縫殿助公共ニ監軍ヲシ  
 シム敵軍險ニ据リ持重スルガ爲ニ戦鬪容易ニ進



行セズ衛友コレヲ坐視スル能ハズ身先登セシ  
 ト欲シ列ヲ脱シテ城ニ向ヒ忽敵壘ヲ攀テ登ル刀  
 ラ塀上ニ抜キ城中ヲ下瞰スレバ敵ニ三十人アリ  
 直ニ身ヲ躍ラセテ敵中ニ突入ス敵驚キ怕レテ散  
 乱スルヲ追フテ本城竇戸内ニ撃テ倒シ其ノ首ヲ  
 獲ルニ及ンテ他ノ一人鎧色ノ鎧ヲ着メル法師来  
 リ戦フ衛友又コレニ向ヒ刀ヲ捨テ、互ニ組ニ合  
 フ従者後方ヨリ来リ敵ヲ打ワテ主ノ危キヲ救フ  
 衛友生命ヲ完フスルヲ得テ進シテ城ニ入ル火ヲ  
 縦ワモノアリ敵驚キ散シ城陥ル衛友ノ城ヲ出デ  
 ルニ及ンデ諸軍始メテ城ニ入ル秀吉手ヲ拍ワテ  
 厚ク衛友ヲ賞揚ス幾許モ無クシテ嶋津氏成ラデ

十六年從五位出羽守トナル征韓ノ役ニ四百五十  
 士率ヲ以テ彼ノ國都ヲ守ルニ與カル秀吉薨シテ  
 軍勢ヲ纏メテ還ル其ノ葬ニ會スルヤ身ニ五烏帽  
 子大紋ヲ着ケテ徒歩シ士卒百餘人ヲ隨ヘテ決奉  
 セリ

太閤葬送  
 供奉ノ圖





乱スルヲ追フテ本城實戸内ニ撃テ倒シ其ノ首ヲ  
 獲ルニ及ンテ他ノ一人鎧色ノ鎧ヲ着メル法師来  
 リ戦フ衛友又コレニ向ヒカヲ捨テ、互ニ組ニ合  
 フ従者後方ヨリ来リ敵ヲ打ワテ至ノ危キヲ救フ  
 衛友生命ヲ完フスルヲ得テ進ニデ城ニ入ル火ヲ  
 繼ワモノアリ敵驚キ散シ城陥ル衛友ノ城ヲ出デ  
 ルニ及ンデ諸軍始メテ城ニ入ル秀吉手ヲ拍ワテ  
 厚ク衛友ヲ賞揚ス幾許モ無クシテ嶋津氏成ラデ

十六年從五位出羽守トナル征韓ノ役ニ四百五十  
 士卒ヲ以テ彼ノ國都ヲ守ルニ與カル秀吉薨シテ  
 軍勢ヲ纏メテ還ル其ノ葬ニ會スルヤ身ニ五烏帽  
 子大紋ヲ着ケテ徒歩シ士卒百餘人ヲ隨ヘテ供奉  
 セリ

太閤葬送  
 供奉ノ圖





徳川氏ト石田氏ト難ヲ構フルヤ上杉景勝先ツ兵  
 ヲ東北ニ擧ゲ天下殲然タリ徳川氏命ニテ領地山  
 家ヲ出デシメ不以テ違ニ京都近傍ノ押ハタラシ  
 ム衛友本田上野ハ正統ヲ經テ東征軍ニ加ハラシ  
 下ヲ請フ許サレズ三成ノ兵丹波但馬ノ兵相合ニ  
 テ細川幽齋ヲ丹後田邊城ニ攻ムルヤ福知山ノ城  
 主小野木縫殿助コガ將トナリ一萬五千ノ寄手ハ  
 孤城ヲ環リテ攻メ掛カレリ時ニ細川ノ臣ニシテ  
 勇カアルモノハ幽齋ノ子三齋ニ從テテ關東ニア  
 リ宮津以下峰山其ノ他ノ諸城留守ノ兵士ヲ合セ  
 僅ニ五百人ニ過ギズ幽齋乃チ決スル所アリ宮津  
 以下ノ諸城ヲ燒キカヲ田邊ノ一城ニ專ニシ防戦



ノ準備ニ怠無シ茲ニ同地桂林寺ノ和尚大溪ハ幽  
齋父子ト親交アリ平素ノ恩ニ報イントテ袈裟モ  
テ旗幟トシ弟子僧十四五人ヲ率ヒテ城兵ニ加ハ  
ル是レヨリ前ニ京都ノ東ナル吉田ニ閑居セル三  
刀屋監物孝和ナルモノ幽齋ト親善ナルヲ以テ城  
ニ入ル其ノ他コノ籠城ニ與ルモノ丹波丹後ニ多  
シ同年七月二十日ニハ大坂ノ軍已ニ國境ニ進入  
シ二十三日ニハ攻城ニ取リ掛カレリ衛友モ亦大  
坂ノ催促ニ應ジ已ハ無ク攻撃軍ニ加ハリテ先鋒  
タリ然レモ時勢ヲ洞觀シ又三成等諸將ノ姦計ヲ  
モ察知シ加之幽齋ハ歌學ノ師ニシテ城中ニ亦同  
志ノ輩多シ是ニ於テカ如何ニモシテ之ヲ救ハシ

其ノ  
於真情ヲ具陳シテ  
家康公其ノ義ヲ  
嘉賞シ

モノトテ思萬考ノ結果陰ニ欽ヲ城中ニ通シ陽ニ  
陣ヲ城外ニ列シ銃ニ丸セズ矢ニ鏑セズシテ攻撃  
對陣數十日ニ至ル自ラ以爲ヘラク師ニ對スルノ  
禮ナリト天使下降シテ扱ヒトナリ幽齋以下城ヲ  
開キテ出ヅ細川父子幽齋ヲ徳トセリ後世以テ將  
士ノ美譚トス東軍捷チ西軍ノ黨興ヲ治ス幽齋深  
ク衛友ノ友誼ヲ憶ヒ其ノ罪ヲ宥サレシトテ請フ  
舊領安堵ノ特例ヲ得テ猶山家ニ治スルトテ得々  
リ食祿壹萬六千石幕府相伴衆ニ補セラレ亦特典  
ナリ大坂夏陣ニ平野口ノ先鋒トシテ子衛成衛勝  
衛政ト共ニ前進奮闘シテ深入シ敵ヲ追ヒ城門ニ  
至ル首ヲ斬ルト無數ナリ細川忠興來リ看テ大ニ



感シ誘フテ共ニ前將軍ノ前ニ啓サントス衛友曰  
 ハク僕老イテ功微ナリ啓スニ足ラズト志興之ヲ  
 強フレバ聞カズ凱旋ノ後コレヲ聞シテ曰ハク前  
 ニハ本多正統ヲ以テ関東供奉ヲ乞ヒ後ニハ田邊  
 ヲ通シテ赤心ヲ顯ハス毫モニ心ナキナリト家康  
 コレヲ納レテ戎野彈正ニ命シ衛友ヲ召シ永々本  
 領安堵スベシトノ懇命金幣ノ下賜サヘアリ是レ  
 隣地福知山ノ小野木氏カ所領ヲ没收セラレシニ  
 モ関ハラズ僻邑山家ノ地カ戰國ノ世ヨリ明治維  
 新ニ至ルマデ累代谷氏ノ所有タル所以ナリ元  
 和元年五月七日午ノ刻大阪攻城ノ諸軍左右ヨリ  
 真田山ヲ畧セントス時ニ徳川將軍秀忠右軍ニ將

タリ其ノ先鋒大和口ニ進ム城中モ亦兵ヲ出ス既  
 ニシテ兩軍接戦ス偶々裏切ノモノアリトノ流言  
 アリ之レガ爲ニ幕府ノ前軍過半其ノ行伍ヲ乱ス  
 衛友父子ノ陣毫モ動搖セズ其ノ混乱ノ中ニ細川  
 ノ家臣熊谷隼人助獨踏ミ止マリテ衛友ト語ヲ交  
 ハ逃ゲザルノ證人トハナレリ時ニ前面遙ニ敵兵  
 三四十人ト六七人ト兩所ニ陣スルアリ衛友一  
 突撃ヲ試ム伏兵アリ俄ニ起リ衛友ヲ刺ス槍鋒徹  
 セズ而シテ伏兵前後ヨリ来リテ衛友ノ馬標ヲ奪  
 フ衛友馬ヲ馳セテ之ヲ追フ家臣柘田大左衛門進  
 シテ之ヲ取り返シ且具ノ首ヲ獲タリ衛勝衛政亦  
 父ニ從フテ首級ノ功アリ本多佐渡守ノ執啓ニヨ



リ家康ガ陣所ナル茶臼山ニ至リ謁シ實檢ニ供ス  
部下ノ斬首九級而シテ家士ノ周防次郎兵衛中村  
又助土田十兵衛戰死シ姓不詳市左衛門斬首ニ級  
ノ功ヲ建テ、戰没シ土田六左衛門重傷シテ大功  
アリ佐原作兵衛鈴木忠左衛門河田長兵衛石田長  
右衛門道家助太夫各務嘉右衛門小池八兵衛山田  
藤十郎佐々庄兵衛佐々兵三郎貞住左兵衛加藤半  
之丞道家兵右衛門招井九右衛門内藤平兵衛姓不  
詳伊之助同久太夫同加左衛門同太左衛門等各隨  
從スル所ノモノナリ  
元和元年徳川前大將軍家康薨ニ秀忠後ヲ継グ當  
時文武一藝ニ秀デタルモノ拔擢シテ御側衆ニ任

ゼラル衛友亦其ノ撰ニ與リ同二年十二月二十一  
日談伴衆ニ選マル 貞享三年鐵砲改アリ證状ヲ  
出ガス 享保十七年七月備米檢定代官來ル優遇  
セル時々領地山家ニ歸休セシメラル、ト其ノ江  
戸ニ運ルニ際シテハ岳川ノ本陣マデ上使ヲ差シ  
向ケテ直ニ登營ヲ命ゼラレ厚遇ヲ受クル毎度  
ナリシニテ知ラル故ヲ以テ小藩主ノ身ヲ以テ大  
藩主ニシテ御側衆ト相交ハリ得タルナリトカヤ  
寛永四年十二月衛友江戸邸ニ病ム秀忠憂慮シ酒  
井雅樂頭ヲシテ病床ヲ問ハレム又侍醫ヲ遣ハシ  
詔療セシム同月二十三日壽ヲ以テ終ハル年六十  
五遺骸ヲ芝ノ泉岳寺ニ葬リ常照院心翁荒鐵大居







江戸在勤ノ大名間ニ御茶漬頂戴トク御湯漬御無  
心トカ云フテ臨時ニ訪問仕合フテアリ或ル日仙  
臺候外出ノ序ニ谷家ニ入り御湯漬ノ無心アリ谷  
家俄ニ酒食ヲ供ス翌日仙臺邸ヨリ使者来リ黄金  
若干兩ヲ贈リ謝ス衛友之ヲ却ケテ曰ハク吾ガ藩  
小ナリト雖モ未タ飲食店ヲ業トセス歸ツテ仙臺  
候ニ告ゲヨ候之ヲ聞キ始メテ其ノ非禮ヲ悟リ更  
ニ使者ヲ以テ前非ヲ謝セシメ記念トシテ尾州藤  
四郎ノ作ナル茶壺ヲ贈ラレタリ今ニ當家ノ寶藏  
トナレリ

寛永二十年夫卒三十人ヲ出カシ江戸ノ防火隊ニ  
組ム壹萬石三十人ノ割合ナリ諸大名十日代ハリ



弘化元年江戸本丸  
 伏見二村出願金  
 一列藩同論  
 参看

二之ヲ勤ム 寛文四年六月三日高壹萬三千五百  
 八十五石八斗三升一合五勺ノ朱印ヲ賜フ 同五  
 年實子ノ江戸住居ヲ免セラル細部ノ部 十二年十  
 二月八日交代寄合ノ高原數馬ヲ預ケラル數馬ハ  
 藩主衛利ノ兄ナリ養子トナリテ旗本トナリ交代  
 寄合席ナリシガ不孝ノ罪ニ因リテナリ養父ノ訃  
 ニ由ル 延寶八年香眞銀三枚ヲ將軍嚴有院ノ棺  
 前ニ薦ム 同年後水尾天皇崩御香資若子ヲ奉ル  
 鷹ノ栖陣屋 無城大名百家ノ一 丹波四陣屋ノ一  
 江戸郎上屋敷ト云フモノ麻生ニアリ中屋敷龍土  
 ニアリ下屋敷世々木ニアリ  
 江戸日本橋マデ百三十九里京都十六里 下皆知

草尾峠ヲ經テ水呑ニ檜山ニ京街道ヨリ東行ス  
 藩主一年ハ參觀シテ幕府ニ勤メ一年ハ在國シテ  
 領地ノ政務ヲ執ル臣下ノ權ニ百餘名其ノ内江戸  
 ノ三郎ヲ守ルモノ四十名アリ藩主ニ從テ送迎  
 スルモノ亦常ニ二十餘名アリ中藩以上ノ臣家ノ  
 如ク一生涯ニ幾度カ途ニ登ルト云フノ境過ニア  
 ラズ且ツノ臣家ニ老弱者アリ無主ノ家等アリテ  
 臣務ニ就クベキモノニ缺欠ヲ生ズルトサヘ之レ  
 アリ故ヲ以テ領民中士氣アルモノヲ傭雇シ以テ  
 其ノ補給トセリ幕府ノ末路ニ中リ國家多事幕令  
 朝以テ夕ヲ圖ル能ハズ小藩ノカヲ以テ猶且ツ江  
 戸ヲ護リ京都ヲ守リテ才ヲ提ゲテ東西ニテ役ス

叫 岐 志



留守ノ妻兒ハ衣食ニ裕ナラズ只君命ノ重キヲ知  
リ朝ニ命アリ暮ニ路ニ就キ親ノ衷モ孰ルニ隙ナ  
ク妻子ノ病モ夕クルノ暇無ク致々矻々臣道ヲ守  
リ窮苦ヲ訴ヘザリシハ武士道ノ模範タルベキ歟  
丹波大名中ノ艱苦ハ實ニ此ノ藩ニアリキ 最小  
藩級ニアリナガラ其ノ門閥ノ故ヲ以テ行列ノ先  
箱ヲ用エルノ許可アリタリ先箱トハ一對ノ狭箱  
ヲ行列ノ最前ニ置キ其ノ手替ハリガ行列ノ十間  
乃至二十間許リヲ離レテ先キ立ち大手ヲ左右ニ  
振り搦ゲ勇威ヲ示スモノトス十萬石以上ナラデ  
ハ容易ク許サレザル格式タリ元禄以來虚飾ハ大  
名ヲ疲弊セシメ加フルニ工役ノ賦課アリ歳入ハ

凶作水害ニヨリ減退ニ無相當ノ不換紙幣ト大阪  
富商ヨリノ借入金額等極點ニ達シ領民ヨリノ献  
納モ毎度ニテ此ノ上ハ誅求ニ其ノ路無キヲ以テ  
一策ヲ案ジ藩領ヲ賦シ以テ大名籍ヲ脱セントシ  
二千石ヲ分テテ十倉ニ谷主計ヲ千五石ヲ分テテ  
谷録造ヲ各分封シ本家ノ高ヲ一萬石以下ニ耗ラ  
セ以テ負擔ヲ免レント計リシガ幕府ハ故モ無キ  
ニ大名ヲ更メ減祿シタルノミニテ旗下士ニ列セ  
シメシテ好マシカラズ且又コレガ例トナルノ恐  
アリテ願意撤回ヲ懇患シ前計全ク畫餅ニ歸シ了  
シ又番采幕議具ノ事情ヲ察シ何鹿一郡ノ山手ノ  
利ハ此ノ藩ニ收メシメタリ山ノ手トハ山林税

丹波志



ニシテ一名山役ト呼グ是ニ於テ何鹿一郡ノ山林  
 稅ハ幕府代官小堀數馬納メテ改メテ此ノ藩ノ代  
 官ハ納ムルトナリテ再ビ大名タルノ轄面ヲ刷  
 二得タルハ幸カ不幸カ只觀音寺村ハ其ノ不便ヲ  
 申シ立テ許可ヲ得テ天田郡ニ編入セラル、トト  
 ハナリヌ  
 藩札ハ十及五匁五分一分五厘ノ六種アリ額面ノ  
 差ニヨリ形面ニモ大小長短ノ差アリ此ノ債券ハ  
 小藩文ケソレ文ケ勢カ範圍狭小ニシテ本郡ヲ出  
 ズレバ出ヅル文ケソレ文ケ價位漸減ノ不運ヲ免  
 レズ因部龜山札ハ當地ニテ稻原價維持カラ失ハ  
 ズ旅客ノ囊中ヨリ出デ、旅亭ノ宿費ニ當テラレ

輕々ノ差ニテ取り引キセテレタルモ此ノ地札ノ  
 龜山ニ於ケル一小片ノ及故ノ三是レ其ノ兌換ノ  
 名アリテ實ノ恊ハザルト交換所ヲ他地方ニ置カ  
 ザルノ致ス所ナリ 或ル人予ヲ詰リテ曰ハク生  
 金正銀ナキヲ以テ此ノ債券手段ヲコソ講ズルナ  
 レ其レニシテ潤澤ナラバ何シゾ藩司ニシテ債券  
 ヲ出ダサン何シノ交換所ヲ要センヤト是レ其ノ  
 一ヲ知り其ノニヲ知テザルナリ予ガ謂フ所ノ交  
 換所ナルモノハ本領内ニ入り来ル所ノ客券ヲ割  
 引シテ主券ニ引キ換へ交換所ニ送リテ本藩ノ債  
 券即チ藩札ニ換へルナリ 然ラバ交換所ノ役負  
 役所及ビ其ノ失費ハ割引ノ利ニテ如何ニ維持ス



バキ却リテ藩ノ財政ヲ紊スベシ 答ヘテ曰ハク  
 地方ノ豪家ニ命シ之レニ當タラシムルノミ苗字  
 許可帯刀免許破風作り家屋等ノ特許ヲ與ヘテ足  
 レリ 廢藩トナリテ藩債ハ太政官ノ負債トナリ  
 金壹萬。七百二十七圓七十三錢九厘 此ノ外太政  
 官札トノ引換アルヲ知ラズシテ空敷ク儲藏シ  
 鋌一文ニモ爲ラズシテ紙屑屋ニ賣ラレシモノナ  
 ド數知レズ

一槍行列ノ前ニアリ次ニ六人ノ徒士與前ニ双行  
 之與例ニ亦六人左右ニ並行ス之。ト呼ブ立  
 年與後 茶箱合  
 羽籠 茶箱合  
 アリ防 他ノ者ナシ 九人ハ圓ヲ  
 用ニルハ前文ニ示セル勝龍寺合戰ニ信長ヨリ賜  
 ヘル九餅ヲ紀念トシテ 千廻箱 九  
 幕布ハ 幕布 千廻箱 九  
 月 月 千廻箱 九  
 藩士 藩士 千廻箱 九  
 左マデ六ツケ敷キヲニテハ無カリシモ中古世上  
 一斑ニ表ヲ張ルヲトナリ中ニモ大名トサヘズ

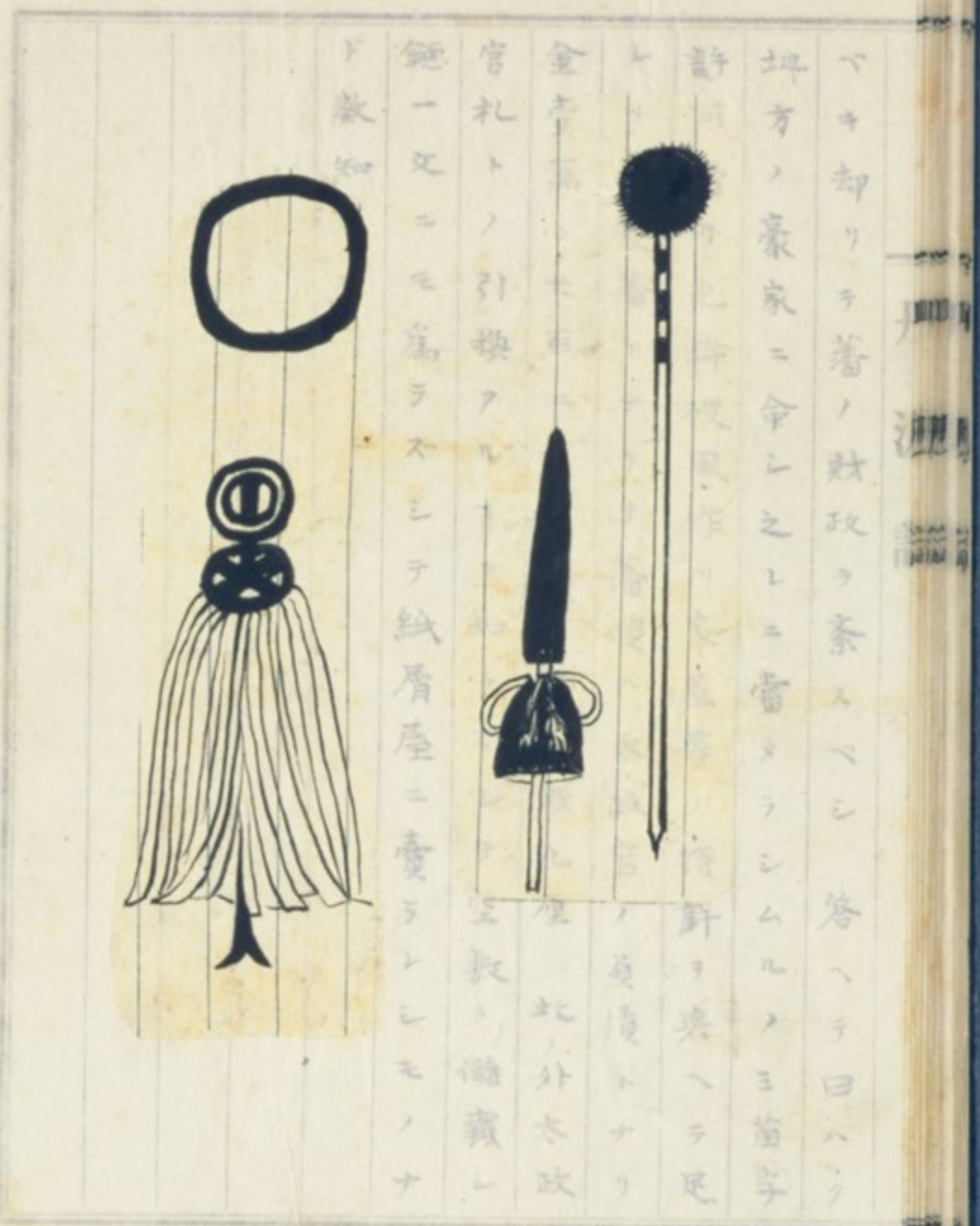


京都府立総合資料館所蔵



一槍行列ノ前ニアリ次ニ六人ノ徒士奥前ニ双行  
 ニ典例ニ亦六人左右ニ並行ス之ヲ六々ト呼ブ立  
 傘輿後ニアリ牽馬コレニ次グ其ノ次ハ挾箱合  
 羽籠 押ノ卒ナド行ク道中トテ旅行ニハ茶辨當  
 アリ防大隊用纏兵ノ他ノ藩標等多ク丸又ハ圓ヲ  
 用エルハ前文ニ示セル勝龍寺合戦ニ信長ヨリ賜  
 ヘル丸餅ヲ紀念トシタルナリ  
 幕府ヘノ獻品 藩主江戸着ノ時ニハ千鯛箱 九  
 月ニ山椒 國産紬 今ハ此ノ品無シ定府御交代  
無シトナリテハ千鯛モナシ  
 藩士某ノ話中獻上品ノ一アリ往昔ハ獻上品トテ  
 左マデ六ツケ敷キ一ニテハ無カリシモ中古世上  
 一斑ニ表ヲ張ル一トナリ中ニモ大名トサヘ云ヘ

丹波志



マキ却リテ藩ノ財政ヲ紊ムベシ 答ヘテ曰ハク  
 坪方ノ豪家ニ命シ之レニ當テラシムルノミ箇字  
 許  
 金  
 官札トノ引換アル  
 鍾一文ニモ爲ラスシテ紙屑屋ニ賣ラレシモノナ  
 ド歎知  
 空敷ノ備載シ  
 屋  
 此ノ外本政  
 ノ負  
 軒ヲ具ヘテ足

京都府立総合資料館所蔵



バ百萬石ノ如賀様モ一萬石ノ吾ガ藩モ同様ニ見  
ナサレ者ス々無駄ト知リナガラ同様ニセネバナ  
ラヌトトナリマシタ 左様一例ヲ申シマスナラ  
道中ヲ致シマスルニ大名方カラ御馳走ト申シテ  
奉行格ノ者一人カ若黨二人槍挾箱草履取等ガ城  
門外ニテ一拜スルノミニ對シ一封ヲ贈リマスガ  
加賀侯デモ金百匹即チ貳拾五錢一包吾ガ藩トテ  
モ大名中間ニアル以上具ノ半價即チ貳朱金一片  
テ濟マサレバ矢張り金百匹出サネバナリマセヌ  
ト云フ仕未デ迎モ年々百餘里ノ道中入費ニ堪エ  
ヌノデ定府ヲ願フタ譯ナノデス 左様山椒ハ針  
無シノ朝倉ガ丹波ノ名産トシテ當國ノ大名ハ孰

レモ献上致シマス 柘原藩ノ部山椒五郎兵衛  
ノ部ニ出テス 將軍家ヨリ諸  
士へ下サレマス故溜ウテ仕方ガ無イト云フハ  
無イソウデス獻残屋ト云フ商家ガアリマシテ残  
物ハ一手買入レテ直ニ賣リマス  
君主ノ在國スルヤ是ゾト云フ仕事ハナシ漢獵獸  
獵ヲ以テ夏冬ノ消閑具トナスナリ祭禮ノ時ノ人  
形芝居ハ殿中ノ男女ガ最快ヲ取ルモノトス冬季  
ノ大狩ハ武ヲ講ナルト農害ヲ除クトヲ以テ行ハ  
ル戰鬪準備ヲ爲シテ城山ヲ攀テ取ルモノナリ  
舊曆九月ト三月ニ奉行スルガ例トナレリ  
藩制

家老 用人 番頭 物頭 給人

丹波志



以上ヲ知行ト云フ

中小姓 入ツテハ君側ニ侍シ出テハ奥側ヲ衛ル

徒士 君侯外出ノ時前列ニアルモノ

足輕 門ヲ衛リ列後ニ行キ使役セラル、ノ

小吏ナリ

合計百二十人アリ三代相恩ノモノトテ皆士族トナレリ

禄制 高百五十石ノモノ一人以下遞減シテ二石

三十石ニ至ル四ツモノ成トテ百五十石ニテ實禄

六十石ナリ中小姓ヨリレテ高五十石位以下ハ

禄以テ一家ヲ餉口スル能ハズ故ニ川獵ヲ以テ

臣家ノ特有權トシ人民ハ城下ノ川流ニテ漢獵

スルヲ許サズ城山附近ノ松茸ハ又臣家ノ自由

採取ニ供シ人民ハ之ヲ取ルヲ能ハズ此ノ二禁

ヲ犯シテ嚴刑ニ處セラル、トアリ

江戸部 上麻生 龍土 登城ノ時ハ柳ノ間ニ着席

ス隔年四月ニ暇ヲ乞フテ領地ニ歸リ又四月ヲ以

テ國ヲ出テ江戸ニ祿役ス道中日數大凡十四五日

ヲ要ス大井川以下出水シテ川止メアルハ此ノ限

ニアラズ

兵制 軍役ト云フ 馬上十騎 鐵砲 銃ノ一二十挺 弓十張

鎧三十本 但長柄持鎧夫 旗三本

谷家ノ菩提所覺應寺ハ臨濟宗妙心寺末ニシテ村

ノ西端ニアリ



本尊 拈華微笑ノ釋迦如來 鎌倉佛師ノ作ト云フ

仁王門ハ塩谷山願成寺ノ遺品ト云フ 談寺ハ

空也上人ノ開基ニテ十二坊アリ天名宗籍ニテ

平重盛ノ祈願所タリシカ明智ノ乱ニ破壊セラ

レ福知山城築造ノ用ニ取り去ラレタルヲ南雄

周最コノ寺ヲ創シ願成寺ノ仰ヲ遺セリ覺應禪

寺ト命シ末寺十個壇越四十ヲ有セシガ三個ノ

末寺ハ離籍シテ分レタリ寺地一千一百七十七

坪官有地穿四種ニ屬ス

此所村外レニ標示アリ 右山林 左舞鶴

小藩ノトトテ特別ノ行動ヲ取ルト能ハズ在京ノ

周旋方報知ニヨリ諸藩ノ方嚮ヲトシテ方針ヲ定

ムルナルガ維新ノ際モ其レニヨリテ方向ヲ勤王

ト云フニ取りタルニ因リ佐幕黨ノ隨一二數ヘテ

ル、若州勢ノ通過スルト聞キテハ黙止ス能ハズ

之ニ向テテ發銃セリ頃ハ慶應四年正月ノ初ニ方

リ若狹小濱ノ藩主ハ前年ヨリ大坂ニ在リテ將軍

徳川慶喜公ニ從ヒ城中ニ於テ軍議ニ興リ居タル

モ伏見烏羽ノ一二戰ニ幕軍大敗シ將軍ハ輔佐ノ

臣會津末名具ノ他旗下ノ重臣ヲ率ヒ海路東奔セ

シヲ以テ若狹藩主酒井氏モ已ムトテ得ズ歸國シ

テ謀ル所アラント歎シ軍ヲ抜キ北行セシモ官軍

ノ先鋒土藩薩藩長藩ノ南下シ来ルヲ以テ金塞ガ

京都府立総合資料館所蔵



り通ゼズ是ニ於テ攝津ヨリ丹波ニ入リタルニ官  
軍既ニ先ツ在リ便チ降ラ乞ヒ福住ニ於テ具ノ許  
可ヲ得漸ク安堵ノ思ヒヲ爲シ山家マデ来リシニ  
要所ニ待構ハタル藩士ハ一應ノ取調ヲモ爲サズ  
之ニ向テテ數九ヲ送レリ若藩士弁ノ狼狽スル一  
方ナラズ上下面色無キニ至リ已ム無ク使者ヲ関  
門ニ送り事由ヲ叙ブレドモ其ノ證左ナキヲ以テ  
許サズ即チ急騎ヲ發シ勅使ノ本營ニ乞ヒ具ノ信  
書ヲ得テ又福住ヨリ星馳シテ其ノ信ヲ示ス是ニ  
於テ山家藩ノ関門ハ開カレ君臣一行虎口ヲ免レ  
テ國ニ歸ルヲ得タリ斯ク云ハバ左派ナル関所ニ  
テモ設ケタラン様ナレド只木柵ヲ構ハタルノ三

落武者ノ常トシテ怕ゲタルノ三  
本藩會計上ノ事ニ付キテハ君臣相共ニ首ヲ疾マ  
シムル所ニテ藩論ニ派ニ分カレツハ因循シテ維  
新ニ遇ヒ論議モ瓦落シタリ今斯クニ其ノ概要ヲ摘  
記セン經濟上會計上ニ至リテハ勘定方郡奉行ヨ  
リ勝手方ノ家老コレヲ掌ル所ナルガ維新前ニ至  
リ入費多端ノ折柄ニハ重役中表役ヲ除クノ外ハ  
惣掛カリト云フ有様ナリシ假令ハ江戸邸ニ於  
テハ何時ト無ク費途ヲ示シテ請求スレトモ固本  
ニ於テハ餘裕無キヲ以テ郡奉行ヲシテ人民ノ膏  
血ヲ浚ヘシメ格式ヲ賣リ帶カラ許シテマデ農家  
ノ儲蓄ヲ竭盡シ尚足ラザルヤ紙幣ヲ増發シテ一



時ヲ維持シタルモ到底具ノ策ナキニ至リ已ムヲ  
得ズ大阪ノ富高ニ求ムル丁諸藩ノ爲ス所ニ同レ  
左ハ去リ乍ラ藩ノ小ナル文フレ文融通ノ途モ絶  
ニ昂ク如何レ氏スル能ハザルニ至レリ  
一派ノ論旨ハ主家ヲ諸子ニ分カテ幕府ニ白フテ  
分地願ヲ爲レ主家ヲレテ一萬石未満ノ高トスレ  
バ幕制ニ於テハ之ヲ旗下士ノ列ニ加ヘ交代寄合  
ノ名稱トシ大名デ云ヘバ外様ノ列トナリ公役ヲ  
課セラル、モ寛典ナリ且ハ舊臣モ隨フテ其ノ家  
ニ轉仕シ主家ノ經濟モ收縮シテ世ヲ永フスルノ  
良法タリト云フニアリ之ヲ急劇派ノ團結トス成  
程北ノ輩ノ畫策ニシテ成ラシ乎谷家ノ戦ニ滅ビ

カレテ貧ニ墮ルノ慘ハ免ルベシ一萬石ノ高アレ  
バ大名(實ハ小名ナレドモ)ノ體面ヲ維持シ獨立的行爲ヲ多クセ  
ザルヲ得ズ下ツテ旗下士トナレバ大抵共同的行  
爲トナリ軍賦ニ至リテモ萬石以下ハ遙減ノ差著  
レク大阪陣ニ一萬石毎ニ貳百人ヲ出シ槍手百人  
ノ中ニ銃貳拾ヲ以テ槍五十ニ代ヘシノ各三百人  
口糧ヲ給スルニ由リ各藩競フテ一挺タリトモ銃  
ヲ多ク出ダスヲ聲譽トシ軍罷ンデ其ノ跡始末ニ  
苦ミタル貧乏談ヲ故老ニ聞キ傳ヘタル丁アリ降  
リテ旗下士トナルニ至リテハ多クハ幕府中軍ノ  
内ニ加ヘラレ虚榮ウキ文ニ困苦モ赤少カリキ祿  
高九千九百九十石ノ旗下士横田某ヲ大名ニ昇格

京都府立総合資料館所蔵



スバキノ論屢次幕府中ニ起レルモ断ジテ之ニ應  
セザリシト云フモ其ノ故ナキニ非ルナリ 視ヨ  
維新前嶋津三郎久光ノ云米壹萬俵献納アリ諸藩  
ヨリ國産貢上ノ丁アリ而シテ旗下士ハ與カリガ  
リシ僅々十石ノ差以テ義務ニ輕重ノ大差アリシ  
ヲ視ルニ足ル 之ヲ難スル者アリ征長ノ役ニ旗  
士多賀外記カ討死シタルヲ以テ證トシ旗下士モ  
亦幕軍ノ前頭ニ五ツニ非ヤト詰ル 著者之ニ  
答ヘテ曰ハク成程多賀ハ長州征討ニ率先シテ死  
セリ旗下士カ全ク先陣セズトハ云ハズ之ヲ旗本  
ト云フ中軍ノ謂ヒナラスヤ請フ當時ノ情况ニ視  
ヨ幕府ハ大名ノ頼ムニ足ラズ旗士ノカノザルヲ

知り農兵ノ制ヲ立テ業已ニ民間ニ賦シテ幕府直  
轄ノ郡村ヨリ壯丁ヲ出サシメ次テ旗下士領内ヨ  
リモ之ヲ取り領地ナキ輩ヨリハ高ニ應シ賦役金  
ヲ出サシメ筑波山ノ乱アルヤ多賀外記ハ其ノ隊  
長トシテ功アリ依リテ征長ノ役ニモ亦前軍ニ參  
加セシナリ著者ハ多賀ト舊アリ由リテ聊ソノ丁  
ヲ記臆シ茲ニ辯明ス  
年々一度ハ旅路ニ上ラザル可ラス上士中士下士  
合シテ二十名乃至三十名之ニ加フルニ槍箱引馬  
輿丁輕尻(荷物ノ上ニ  
一人乗ルモノ)長持上士ノ槍持臣下ノ荷物及ビ  
宰領等大凡百人此ノ旅費金百兩充テナルガ何レ  
ノ年モ此ノ金ノ準備アリタルヲ無シ故ヲ以テ參

京都府立総合資料館所蔵



觀時期トナレバ御用達ノ町人が藩札ヲ以テ福知  
山又ハ綾部ニ出デ時トシテハ京都大阪ニ出デ、  
正金ト交換セザルヲ得テ如何トナレバ當地方ニ  
於ケル通用ハ藩札カ又ハ近藩ノ紙札ノミナレバ  
ナリ謂ハ所ル悪債ノ行ハル、所ニハ奸債ノ跡  
ヲ看ムノ義ナリ而シテ之ヲ交換スルニ手數ヲ要  
スルノミナラズ其ノ歩モ亦輕少ナラズ其ノ損  
耗ハ頗テ藩ノ疲弊トナル 其ノ用達ノ爲ス所ヲ  
見ルニ利ハ常ニ己ニ收メ不利ハ毎ニ主家ニ嫁ス  
故ヲ以テ此ノ職ニアルモノニシテ店丁ニ横奪セ  
ラレザル以上ハ富マザラシト欲スルモ能ハザリ  
シナリ其ノ故ハ當所ニ御用達高人果アリ君侯ニ

隨テ常ニ東海道ヲ上下シ道中ニテモ相應知ラ  
レタルモノナルカラニ信用モ薄カラズ君侯東上  
期ニ先ダテ旅費ノ調達トシテ諸方ニ赴キ藩札ヲ  
以テ硬貨ニ引換ヘルニ先ソノ金相場ヲ調査シ藩  
札百匁ヲ以テ金壹兩ト交換シ得ベキ相場ナラバ  
更ニ銀相場ヲ調査シ銀六十匁ヲ以テ金壹兩ト相  
當ルヲ知り又藩札ト銀相場トヲ調査シ藩札九十  
八匁ニテ銀貨小玉目方六十匁ニ交換シ得ルノ銀  
相場下落ニ乘シ銀ヲ得テ札ヲ出シ又金相場下落  
ノ日ヲ待ツテ其ノ銀ヲ賣リ金ヲ買ヒ以テ藩ノ勘  
定方ニ送金ス當時ノ制トシテ金銀兩本位ナリシ  
ヲ以テ大阪ノ相場日々ニ小高下アリ何カ人氣ニ

支 志



関スルホドノアトバ大變動サヘアリタリキ斯  
クシテ利ハ乏ヲ已ニ歸シ損ハ乏ヲ蓄ニ歸スルモ  
士分タルモノ、會計ニ疎キハ其ノ通弊ナルニ賭  
賂サヘ公行シタル折柄トテ誰咎ムルモノ無カリ  
シナリ又道中ニテ俄然金調ノ起ルトアリ當藩ハ  
四月交代ナルヲ以テ道中大川ノ出水稀ナル故川  
止ハ希有ナルモ全ク之レ無キニアラズ故ヲ以テ  
道中ニテノ貸借ハ士分ノ爲シ得ル所ナラズ斯カ  
ル時コソ道中師トモ唱ノル御用達コソ働キブリ  
アル時ニテ又大利アル時ナシ廢美トシテ扶持米  
ヲ得ルモ此ノ如キ時ナレ故ヲ以テ御用達ナルモ  
ノハ騎着ノ度往々領主ヲ起駕スルトアリキ

舊藩士問答

弊藩ノアト申レ上ゲマスノデゴザリマスカ從前  
ノ由緒書ハ是デムリマス御麾下サリマセ小高  
デムリマシタ上ニ故アリテ前項一論ノ  
言參者分家分祿シ  
遂ニ壹萬零八十二石餘トナリマシタテデムリマ  
ス左様壹萬石ト云フ大數ヲ舉ゲナガラ石ノ下  
ニ餘ト書キ幾斗幾外ヲ含マシメマシタハ隨分變  
ナモノデムリマス大名杯ノ高ハ石ニテ止メマ  
スルガ當リ前デゴザリマスカ只此ノ一字ニテ大  
分餘裕ノアルヲ示シタモノサウデムリマスイヤ  
中々弊藩ナドハ大體ニ於テ知レタモノデス故餘  
ト申シタ所何程ノ有リ難味ガゴザリマシヨ

丹波志



天正七年山家落城、際ニ谷左衛門領地三千石谷伯  
耆守領地同三千石荒木山城守具ノ子主水彌太郎  
等東國ニ下リ秋田城助織田信忠ニ扶持セラレ並  
河掃部ノ子孫ハ寺澤山内森等ノ家ニ入り高祿ヲ  
得タリトムリマスガ是レハ舊藩ノ書付ニ乗ツ  
テ居リマスガ天正七年ニ主家ノ先祖ガ此所ニテ  
落去シタト申ストモ判然致シマセヌデハ弊藩  
ノ足輕デ按摩功者ナ人物ヲ御承知デムリマスカ  
彼レコソ真ノ足輕デ一日ニ貳拾里餘ヲ歩ミマシ  
タ左様御説ノ通り夜行バカリ致シマス晝間ハ  
人ニ行キ逢フ面倒ガアルノデ夜行ニ限ルト申シ  
ヨリマシタ南東田郡ノ馬路ニ御出デノ時デシ

タカデハ當所ヲ出マシテ其ノ日ニ馬路マデ参  
リマシタノデシヨリ長林寺ト申ス寺デ宿ヲシ  
テ貰斗マシタノデスカ成ル程スルト其ノ老僧  
ノ按摩ヲシテ大阪へ働キニ参リマシタノデスナ  
大抵晝ハ栢林ヤ茶店デ寐マシタ様デス當時  
尾張ノ名古屋カラ京都へ日着ニ往來スル飛脚ガ  
アワテ何日モ関ヶ原ヲ中食所ト極メテ并ルト云  
フテ其ノ足ノ違者サヲ感心シテ并マシタソレ  
デ弊藩デハ早飛脚用トシテ使フテオリマシタ  
足輕ノ丁デムリマス故三石ニ人扶持位デムリマ  
シタ左様藩用ヲ勤メマスト手當ガ付キマス  
只今申ス日當デ大抵一人扶持デ一日玄米五合ッ、



旅費ハ一宿百五十文晝食五十文位デアツタト思  
ヒマス。江戸行六日七日位ト存ジ升。何今早足  
ノ丁デムリマス故同勢ガアルト大困リデ足弱ニ  
附キ合フノハ一番関口シヤナド申シヨリマシタ。  
足輕ノ勤ノデムリマスカ門番狀箱使獵場ノ背子  
消防夫ノ助使者ノ若黨ナド致シマスガ平常ノ丁  
デ鞆半時代ニハ歩兵ノ役デ。具足ナド、申ス程  
ノモノハ興ヘマセヌ皮製ノ塗込ノ胴ニ~~無~~レガ附  
ケテアル位ノモノデ頭ニハ陣笠ヲ被リマス陣笠  
ト申シマシテモ一樣ノ山形ノモノヲ着用致サセ  
マス。イヤ中々刀脇差ナドハ謂ハ所ル足輕竹光  
デ中身ハ竹位ナモノデムリマシタ。櫻田騷動以來

切レルカラ差サネバナラヌ様ニナワタト存シマ  
ス。サウデモムリマス。筈デス。アノ百騎衆ト申  
シマシタ。典カデシタカ旗本デシタカ江戸カラ大  
阪ヤ京都ノ城詰ニ往來シマス人等ノ具足櫃ニハ  
鍋釜ガ入レテアウタト申シマスデナ。ハ、ハ、ハ、  
夫レデ又藩カラ保護ヲ致シマシテ長屋ニ住居サ  
セマシテ大川ノ奥取ハ百姓ニ禁ジテ藩中ノ内職  
ト致シテムリマスノデ足輕中ニ鮎取ノ名人カ多  
ク出来マシタ。大工左官疊職以下大抵具ハツテ  
居リマスノデ主家ノ修繕ナドハ足輕デ出来マシ  
タ。修繕デスカ福知山デ出来ルノモアリ大坂へ  
出テ仕上ゲテ參ルノモムリマス。修繕中ハ一人扶



持ヲ着ケテ遣リマスノデ先方ラモ丁稚扱ヒニハ  
致サズテ寧ニスルサウテムリマス 勿論其ノ間  
タリトモ兩刀ハ佩バセマス 要ラヌ丁ノ様テム  
リマスガ所人風ヤ職人體ニナツテ仕舞ノヲ防  
ク爲デアツタト存シ升 尤一生所カ子孫永々足  
輕ニ終ル心懸テムリマス 表向ハ養子願ヲ出シ  
内々株ヲ賣リマスガ ツレハ大目ニ見逃カシテ  
置キマシタノデムリマス 以下畧ス  
舊藩士問答其ノニ  
斯ニナ僻地、能フ社入ラセラレマシタ昨夜ハ  
アソソノデスカ菅生デ御一宿デミタカ菅生モ私  
方ノ出入ノモノデ心安イ申デゴザリマス 左様

デス斯ニナ所デモ本陣ト申ス宿屋ガ要リマスノ  
デ古クヨリ其ノヲ菅業ニシテ居リマスノデス  
弊藩ノヲナド申上ゲル程ノヲハ何モゴザリマセ  
又御藩程ノ御高デモアリマスルヲナレバ御話ノ  
程モアリマスガ アソソノデスカ夫レデハ亀岡  
ニ御住居ナシテ幕府ノ御臣下ナンデスカ夫レデ  
ハ尚更申上ゲル程ノヲハゴザリマセ又 アソソ  
ノデスカ丹波ノヲ何クレト無ク御記載ナサレ  
マスノデ、スカ然ラバ承知ノヲハ申上ゲマシヨ  
何分小藩ニテ參觀交代ト云フヲ爲ネバナ  
リマセ又故分家ヲニ斬マデモ致シ壹萬以下トナ  
リ旗本列ニ入りマスレバ萬事セツト節約ガ出来



マスルデ實行シマシタガ今一軒ト云ノ所ダ天下  
多事ニテ領主モ江戸引掛ヒ國任トナリマシタガ  
所々ノ國メヲ申シ付ケラレ藩カモ此頃ノ雪見タ  
様ニジリノ消正行キマスノデ頻リニ藩札ヲ増  
發シマスト領民ガ不信ヲ叫ヒマスノデ米廩ノ在  
米二千石ヲ引當ニテ又々増祭シマスシテ其ノ  
實米廩ハスツト前ニ空トナリテ居ルト云フ有様  
デシタ左様デス江戸ニ定府ト申ス家来ガマリ  
マス是ハ國ノ一ナド領ト知りマセヌ之ヲ置ク譯  
テスカ其ノ年々交代ノ入費ガ支ヘラレマセヌ故  
デス四ツ物成リデス私方モ百石高テスカ四十  
石手取りナンデス私共ノ下デハ江戸デハ下駄ノ

鼻緒ヲ内職ニ致シ國ニ居マレテハ夏ノ鮎取り其  
ノ他ノ時ニハ山行キテ柴薪拾草ナド取りテ所々  
賣ルト云フ哀レナ經濟デス主人デスカ是ハ又  
桑ノ毒ナモノデ江戸ニ居マレテモ狭イ屋敷デス  
故庭ヤ園デ遊グテモ出来マセヌ下屋敷ハ參  
ルノガ一番ノ樂ミデガザリマスノデ國ハデモ還  
フタラ廣々トシタ山野河川デハモ遊バウト遙々  
歸リテ見マスト其ノ當座社籠ヲ出タ鳥ノ様デス  
カ是トテモ毎日デハ面白ウハ無イヨウニナリマ  
ス小藩ノ情無サハ其ノ近習小姓ガ僅々十名位デ  
アリマス故日々同じモノヲ相手ニスルノデス稽  
ツタ話トテモゴザリマセヌ夫レモ若イ主人デゴ

呼  
成  
志



ガリマスト小性ト相撲ヲ取ル庭デ走りゴツコヲ  
スル杯デ日ヲ送りマスレ小性ヲ若シメテ慰ンダ  
リシマスガ年長ノ君トナリマスト領ト慰ガアリ  
マセ又若シ老人ニデモアロシモノナラ冬日ハ丸  
切り巨燵ノ籠域ト云フ様ナモノデス雪カ降り出  
シマストコ、ラ一面真白デ其ノ寒氣ハ速モ通常  
デハ凌ガレマセヌカラレテ早フ江戸へ往キ度  
イ杯ノ語モ出マスフレデコソ江戸ニモ行ケ団  
ニモ歸へレタモノデス殊ニ氣ノ毒テシタノハ  
彼ノ松平春嶽公ノ申立テトカデ大名ノ人質ヲ団  
ニ返へレ根本ナル國カラ養へトノ儀デ弊着ノ江  
戸ニ在ルモノ一度ニ國住トナリ奥方モ来ラレマ

シタガ此ノ山バカリノ所ハカナハヌトノ嘆聲ガ  
出マスノヲ慰メマスニハ附ノモノ一同困難致  
シマシタ老女ガ附添ヒ外ノ女中モ十名バカリ参  
リマシタガ孰レモ聞キシヨリノ片田舎ナルニ困  
ミマレテ次第ニ暇ヲ乞フテ東歸シマレタ奥方ノ  
不自由ハ買物ノ出来ヌノデシタ紅白粉ヲ需メラ  
レマシテモ京都マデ買ヒニ遣ラネバ氣ニ百サヌ  
ト云フ塩梅デ其ノ都度不平ガ出マシタツデー私  
ノ父ナド毎度申シテ弁マシタ團テノ慰ハ祭禮ト  
盆ト初午位デ是モ到底御樂ニナドニハナリマセ  
又江戸デ、スカ是モ籠ノ鳥デスカ矢張里方ヤ  
親類縁者ノ贈答モアリ一年一度ハ浅草觀音参詣

母  
披  
志



ヤ下屋敷、春秋ノ遊行親類ノ訪問ナドカアリマ  
シタ故ソリヤ國ニ居ラレマスヨリハ幾ラカ慰ミ  
ニナルトガ多クゴザリマシタ 領主ガ國ハ歸リ  
臣下モ皆本國住居トナリマスレバ樂隱居デモス  
ルカノ様ニ思フテ居マスト京都ノ方カラ參レト  
ノトデ上京シマスト守護ノ命カアリマスノテ屋  
敷ヲ假物ナガラ設ケネバナリマセ又參内モセネ  
バナリマセ又江戸ニテハ一本道具デアリマスノ  
モ道中裝飾ニテ二本道具ニ致シ供廻リモスツト  
派手ニナリ中ニモ主人ガ衣冠ヲ用ヒネバナラヌ  
トトナリマスニヨリ私共モ大紋烏帽子又ハ素袍  
ニ侍烏帽子ナド用ヒマスルトトナリ參内ノ都度

ニ傳奏ノ家来ニテ雜掌ト申スモノ等非藏人ナド  
ノ役ニ贈リ物致サデハナラヌトトナリ在デ江戸  
ノ御坊主ニ奥向ノト頼ミ不都合無キ様ニセント  
テ不斷贈リ物スルト同様デ目當ハスラリト外レ  
テ仕舞イマシタ 教育ノトデスカイヤハヤ御馳  
ケレイトデス俸給ヲタツブアリシテ文武ノ師ヲ聘  
スルナドハ思ヒモヨラヌトデ藩士ノ内ニテ出表  
ソリナモノヲ江戸ニテ修業致サセ可ナリ出表マ  
スルト國ハ召寄セ藩士ノ若イモノヲ教ヘサセマ  
スル位ノトデス夫モ僅々ニ十名位ノ子弟ガ毎朝  
五ツ時ヨリ四ツ時迄位ノ間ニスル素讀ノミデス  
論語孟子ノ講義ハ日ヲ極メテ致シマスルガ聞人

母  
城  
志



ガナイ位デス江戸話ノモノハ志サヘアリマスレ  
バ町儒者ヤ町道場デ文武ヲ勵ムトガ出来ル筈デ  
相應ノ手當モ出マシタカクメデゴザリマシタ慶  
應以後ト申スモノハ人数ノ足りマセヌトテ表役  
ガ表役ハカリ仕テ居ラレマセヌノデ一人テ幾役  
モ兼ネマシタ假令バ京都ニ留守居ヲ置キマスル  
ト所司代カラモソレヲ呼出シマスルシ御所ノ方  
カラハ傳奏ノ召ガアリ藩ハノ違シハソレハ参リ  
マスノデシタガ江戸ノ留守居ガ従前仕来リタル  
藩同士ノ交際ガ始マリマシテ周旋方ト申スモノ  
ガ諸藩ニ出来マシテ弊藩カラモ人撰シテ出シマ  
シタが大藩中藩小藩ノ別無ク扱ハレマスノデ此

ノ失費ガ莫大デゴザリマシタ月々ニ七ノ日デシ  
タカ祇園町ノ一カ樓アタリテ會議スルノテスカ  
ラ溜リマセヌ左様是ハ維新後モ影ガケアリマ  
シタカ何日ノ程ニカ失セマシタイヤ是ハツマ  
ラヌトバカリ申上ゲマシタ

藩士問答其ノ三

私方ノ役義ヲ御尋ネテスカ何分私ノ少年時代ニ  
維新トナワタ次第デヨリ以前ノ事ハモロオホエ  
デコザリマスカラ取トハ御對ハガ六ヶ敷ノ思ヒ  
マス併シ母モ是レニ居リマス故兩人テ申シ上ゲ  
ルトト致レマレヨウ父デスカ父ハ江戸留守居  
ヲ勤メテ居リマシタイヤ御藩ノ比較ニハナリ

京都府立総合資料館所蔵



マセ又何分小藩ノトデスカラ 左様デスカ龜山  
ノ御藩士デハ申ラツシヤラヌノデスカ 舊幕ノ  
御臣下デ當時龜岡ニ御出デナシテスカ ソレデ  
ハ藩中ノトハ御承知ナサリマセヌハ御尤デス  
ハ一留守居ト申シマス後ハ表後デ諸藩ト交際シ  
テ其ノ連絡ヲ取り同盟ヲ尋ヌルノガ主義ノ様デ  
ス 當府ト申シ江府ニバカリ居リマス 專攻的  
知識ト經驗ガ要リマス故祖先以來継承勤役デス  
ソレデ無クテハカラフキシ 怒テノ意俗言ノ丸デノ意  
江戸言葉ニテ差ク下昇ノモノノ顔ガ  
揚カリマセヌ其ノ席次ハ老功者ヲ上席ニ致シマ  
シテ主人ノ高カ一萬石多イカトテ又五千石少ナ  
イトテ其ノ関係ハナイノデス 同藩同士ノ交際

ヨリモ他藩ノ同役同士ノ方ガ親密ナノデ縁組ナ  
ドモ他藩ノ留守居ト結フ傾キガ多イノデシタ  
勤務ト申シマスト毎月定日ノ集會ニ品川アタリ  
ノ妓樓ヤ向嶋ノ料亭ニテ類合ハセラヌル位ナモ  
ンデス ガ昨日閣老ノ誰具カ斯クノ論ヲ吐イ  
タトク大目付某ガ大老ハ何々事件ヲ陳ベタトカ  
申ス丁ガ聞コヘマスト留守居カラ理章テ集會ヲ  
促シマス スルト一同午後ノ四時頃當時ノ言葉  
デハ申ノ上刻トカ四ツ時トカテ類カ揃ヒマス  
其ノ機密ヲ知ルノデスカ ソレハ御坊主ト申シ  
マシテ殿中ノ坊主頭願ノ小使カ伺ヒ知ワテ内々  
報告スルノデス尤禮金次第デ イヤ是等ノトハ

呼  
城  
志



申シ上ゲヌトモ能ク御存ジノトデシタナリ  
シナトガナゼ外交官ナル留守居ノ管係スルゾト  
疑ハレマスガ是レガ諸藩ニ取り大幸福トモナリ  
知命偏トモナルノデス ト申シマス譯ハ假令ハ  
バ大城修繕ガアル御手傳カ幾大名ソレハ誰某ニ  
極マリソノトカ大坂城代ノ交代ガアルカ加蓋  
ガ誰某ト極マリソノトカ何々事件ニテ何藩ニ  
手藩ガアツタ罰トシテ何役ヲ申渡サレルトカ火  
消番カ撫ハル何ニツクテモ探偵ト運動カ必要ナ  
ノテ同役ヲ揃フテノ内訌モアリ聞キ得タ丁ヲ直  
ニ家老用人ニ報告シ一藩ノ方向ヲ極メルトモア  
ツタ様デス 老母氏曰ハク出勤ニハ大抵縫上下

デ両若黨槍箱草履取位テゴナリマシタ其ノ供ハ  
皆御主人様カラ出マス若黨ハ足輕デ外ハ皆仲間  
デゴナリマス弊ノ申上ケマシタ通り外ノ勤メカ  
主ナモシデス故衣裳ノ張ルニハ誠ニ困リマシタ  
併シ皆御主人様ノ御賄テゴナリマス肩衣杯ハ自  
分ノ紋ヨリハ御主人様ヨリ下サレマシタ御紋附  
ノヲ用ヒマシタ ヲレガ同役中デ目僚ニデモナ  
ルノカ知レマセヌ何レデモ御手當トカ賄料トカ  
申シマシテ御金カニ分金デ澤山下カリマシタ  
ハイアノ住居ハ御長屋ヲ表門ヲ這入りマシテ左  
ノ一番カ江テ詰御家老ニ番カ御用人右ノ一番カ  
私方ト申ス様ニ成ル文見苦シウ無ク所カ充テガ

母  
皮  
志



ハレテアリマシタ女氣ハ屋敷中ニ極少ナフコザ  
リマシテ御主人様ノ女中奥様附ノ女中其ノ外ト  
申シマスト私マ私方ノ下女位テゴザリマス下  
女モ矢張り御客ノ前ハ出シマスノデホザツバ  
リシタノヲ撰リマス給金モ高イ方デスウレハ  
留守居ト申スノハ御金ノ澤山要ル御役テゴ  
ザリマス又同役ノ古顔ヤ派利キニナリマス  
中々御五派ナモノデ大層ナ御威光デ新参モノハ  
在テ下役カ家来見タ様デゴザリマシタ私方ナド  
ヨリ附ケ届ケヲ致シマスノモ中々物入りデスガ  
皆御主人様カラ下ガリマスナレデモ神田於玉  
ヶ池ノ市橋様ノ水上勘兵衛トカ仰シヤル方ケ派

利キデアツタ様ニ承ツテ居リマシタ私共デス  
カ何分女ノ下デス故表ハ出マセヌガ長屋デ間  
挾ナモレデス故イヤク族扱セヌニ居ラレマセ  
又下モゴザリマスレ又同役中ニ極意ナノモゴ  
ザリマシテ御合手ニナル下モゴザリマシタ昨  
ナドモ親ノ御意デ見習トシテ出マシテモ幸イ目  
ニハ逢ヒマセナシマスガ若イ間ハ上下着タ下帷  
シヤソレデゴザリマスウシ悪マレデモ致シマス  
ト大切ナ會談ヒモ寄セラレマセヌ下モアリマシ  
テ藩ノ不面目トナリ不仕合ハセトナリマスノデ  
家老衆カラハ叱ラレマスシ他藩カラハ侮ラレマ  
ス大名ノ家来ト致シマシテハ幸イ役ノ様ニ承ツ

母  
枝  
志



テ居リマシタ 大名屋敷ノ門限ハ夜ノ四ツテゴ  
ガマスカ留守居丈ハ夜中ニ歸ヘリマシテモ丑ノ  
刻ニ歸ヘリマシテモ挑灯サハ點シテ居リマスト  
門番カ直ニ明ケテ通レマス 御使ナドニハ参リ  
マセ又其ノ代ハリ幕府ノ御城ハ参ル丁ハゴザリ  
マレタ ドノ様ナドテスカソノ程ハ私共デハ分  
カリマセ又 火車場ナドハ出ル丁モゴザリマセ  
又 忙シイノハ年頭暑寒ノ往來デゴザリマシタ  
御上洛家茂將軍時分ニハ何トナク多用デゴザリマ  
シタ 櫻田殿勅ニハヒツクリカヘル程デシタ  
慶喜様御時代ニハ京都へ参リマシテ周旋方カナ  
ニカ矢張り江戸デノ留守居見タ様ナドヲ致シテ

居リマシタ 私等ハ江戸引掛ヲ言ヒ付ケラレマ  
シテ泣ク<sup>ノ</sup>出立シマシタ丁デゴザリマス ナ  
ゼト申シマスト丹波大名ノ家来トハ申シマスモ  
ノ、先祖以来江戸ニバカリ居リマシタノデ親類  
モ江戸ニノミゴザリマスシ田舎へ下ルト申スノ  
デ別シテコンナ所テスノデ心淋シウ存シマシタ  
ノデ

藩士問答其ノ四

大名屋敷ノ立テ方ハ大抵同様ノモノデ霞ヶ関ノ  
安藝黒田ト申ス様ニ雙方花美ヲ競ヒ石垣デサハ  
絹ヲ拭クト申シマス位デムリマシタカ降ワテ吾  
ガ輩ノ郎ナドハ見榮ノナイモノデムリマス左様



門が真表ニアリ向ヒテ左ニ潜リ門ガアリ其所ニ  
門番所ガアリ足輕六七名替ハリ合ヒ詰メテ平マ  
ス表門ハ常ニノ切リテ潜リ往来デムリス足  
輕部屋ハ部内デ一番廣アムリマス壁一重ノ隣リ  
ガ大部屋テ謂ハ所ル部屋物カ居リマス之ニ居リ  
マスルモノヲ渡リトモ申シマシテ今日此ノ部屋  
ニ居ルカト思ハ明日ハ神田ノ酒井様ノ部屋ニ  
入り明日牛込輕子坂ノ大久保彦左衛門ノ草履取  
リヲシテ平ルカト思ハ明日ハ榊原式部大輔  
家ノ槍持ノ添人ニナツテ平ルト云フ渡リ物テ金  
カ博奕カ博奕カ命カト云フ塩梅式テ偶カ奇カノ  
聲ハ斷間ナシデムリマシタ足輕ハ身分ノ卑イ

モノデスガ博奕ハ禁ビラレテ居リマシタノデ將  
棋位カ慰ミテムリマシタ足輕ノ大役ト申シマ  
シテハ是ソド申ス程ノ下ハ無イデスガ宰領ハ隨  
分心配ラシウ見受ケマシタ宰領ト申シマス  
國元カテ將軍家ヘノ献上品ヲ毎年九月ニ運送致  
シマスノデ具ノ序ニ主人ノ物ヤ家中(家味)ノ物ヲ  
送りマスノデ長持ノ六人八人持モ行キマスシ輕  
尻ト申シマシテ荷物ヲ馬ノ左右ニ積ミ中ニ人ノ  
乗ルノヲ幾駄モ預カリマシテ參ルノテ宿驛毎ニ  
人馬ヲ雇ヒ入レテハ行クノデ夫レカ何ニカ六ヶ  
敷リカト御疑問ガアルデシヤウ例年九月ト申シ  
マスト秋季交代ノ出盛リトモ申ス時デ西國中國

町  
史  
志



ノ大キナ大名ノ往來ハ澤山アリマシテ大名毎ニ  
百駄以上ノ徵稅ガアリマスレバ夫數百人ノ需用  
ガアリマスノデ小藩ノ五駄ヤ十駄三荷ヤ七荷ハ  
面倒ガリマシテ後廻シニ致シマスノヲ問屋役人  
ニ懸合ヒ叱リ倒シ杯シテ送り出サセマスヤラ夜  
分ニ荷物ノ保護ヲセネバナリマセヌレ缺上岳ノ  
保護ハ殊ニ喧シウゴザマシタデナ一時ニヨリマ  
スト宿驛ノ問屋ガ戰場ノ如キ騷ヤラスルヲモア  
リ問屋ガ破レタト申シマシテ宿役人ガ皆逃ケラ  
空ニナルヲモムリマシタ併ナガラニ百年以上  
ノ手慣レデ以テ勤向ヲスルノデ自然ト出来マシ  
クガ元治萬延トナリ天下多事ヲ慣レヌ所ヲ勤メ

ネバナラヌトナリ問所番メケル事マデサレ  
ヨリマシタ御關所御番ト申シテ箱根ノ大久保様  
福島ノ松平様碓氷ノ板倉様ナド夫々極マツテア  
リマシタガ諸大名面々領分境々ヲ固メマスノデ  
足輕ガ働カネバナラヌトナリマシタ  
井伊御大老ガ櫻田デ慘イ目ニ御遇ヒナサレマシ  
タ時カラ浪人ノ往來ヲ吟味致スノトナリマシテ  
イヤ其ノ以前デス黒船渡來カラデムリマスガ其  
レハ外國相キノ御固メテシタガソレカラ以來  
ハ彼ノ勤王黨ノ浪士騷ヤテ私共モ足輕ヲ連レマ  
シテ所々ハ出張致シマシタ慶應二年七月ノ騷  
勤(長州人京都入り)以來ハ京都ノ四方處々ノ藩所ハ出張

京都府志



ノ事ガムリマシタガ程経マシテ鎮靜ニ向ヒマシ  
タノデ大半歸國致シマシテ ナンデモ根津能勢  
ノ旗本ノ能勢家ト相番ヲレテ居リマシタ 左様  
栗田口デムリマシタト思ヒマス 是ノ時ハ士分  
ノ一名徒士位ノモノ一ニ名足輕十四五名モ居残  
ツタト存ジマス 矢張其ノ以前通り兩カラ佩ビ  
クルモノハ一々所ト名トラ問ヒ糺シマス ガ形  
ハカリノ遣リ方デシタ 或ル日義經袴當時流行ノ半  
袴ニテ下ニハ脚  
着ノラニ武割羽織ノ出立デ大津泊リテ遣ツラ来タト  
見エマシラ番所前ノ来マシタノガ己ノ刻今ノ午前  
十時度  
頃デ往キ過ギントシマス故足輕ガ聲ヲ掛ケテ御  
姓名ヲト申スト一人ガ番所ニ向ヒマシラ天下ノ

浪人加藤虎之助ト云ヒ流シテ通り次ノ男ハ由井  
民部トカ丸橋忠彌トカ申シマスト又次ノ男ガ笑  
ヒナガテ後藤又兵衛トカ何トカ八九人各自ニ有  
名ナ古人ヲ偽稱シラ通りマシタ 孰レモ腕力逞  
シキ者デ足輕等モ之ニ吞マレラムガ 通シテ仕  
舞ヒマシタ 後ニ能勢家ノ物頭ガ大層立腹セラ  
レハ藩ト見テ通行人ニ輕蔑セラルハ残念デア  
ルト曰ハレマシタ 足輕共ハ自分等ガ御通りナ  
サレト許シモヒヌ内ニサツサト行き過ギタノヲ  
立腹シタト思フタツトデス 物頭ガ輕蔑セラレ  
タハ看ス 知レ切ツタ古人ノ偽稱ヲレテ天下  
ノ御番所ヲ輕蔑シタト怒ラレタニ氣カ付カ又位

町  
被  
志



不學ナモノデムリマシタ 左様足輕ハ全ク無教  
育デス學校ノ設ケアル番ニテモ足輕ハ町ヤ村ノ  
寺小屋ニテ通俗ノモノヲ替古スル位デムリマシ  
タ  
怪談 谷家ノ臣ニ楠果ナルモノアリテ妻ヲ喪ヒ  
後年他ヨリ妻ヲ迎ヘタルニ先妻ノ亡魂纏ヒ附キ  
怨念ヲ逞ラス記シテ位田ノ醫家(サワラ)ニアリト云  
フ今之ヲ畧ス 次ニ事實談一件ヲ出ス  
山家屋半兵衛ト云フ金穴家アリレガ青江村正ノ  
鍛ヒタル短刀ヲ買ヒ俄ニ驕心ヲ發シテ其家ヲ亡  
ホシタリ其ノ刀轉レテ京都ノ大丸屋彦右衛門ノ  
手ニ入り遂ニ大丸屋騷動ヲ惹引セリト云フ其ノ

話ニ云ヘリ山家屋ハ數世ノ金満家ニテ三千餘石  
ノ田畑ト五十七個ノ山林ヲ所有シ京都大阪ニモ  
三十餘ヶ所ノ所有家宅アリ牛馬三十餘頭婢僕四  
十餘人アリ常ニ十萬餘兩(今日相場數百萬圓)ヲ蓄  
ヘ領主ノ谷家ハ申ニ及バズ近國大名ノ身代ヲモ  
賄ナヒ居リレハ元祿ノ頃ニシテ當時ノ半兵衛ガ  
妻ハ大阪今橋筋ニ名高キ平野屋五兵衛ガ娘トス  
是モ二萬五千圓ノ用金ヲ幕府ニ出ス位ノ大家ナ  
リ半兵衛ハ本妻腹ニ三人ノ子アリ五人ノ妾腹ニ  
六人ノ子アリ半兵衛大阪ニ在ル時出入スル道具  
屋ヨリ買入レタル一刀ハ縁頭金無垢ノ鶴高彫リ  
目貫ハ三匹獅子徳象光次ノ作鐔ハ金ノ七贖人鮫



ハ阿蘭陀古渡ノ大粒揃ヒ白組鷹ノ羽糸畝織柄靴  
ハ葦色珊瑚珠ノ實ニ葉ハ金銀ノ研出シ光リ輝ク  
結構ノ拵ハ扱ケバ玉散ル氷ノ靱ヅツトスル程恐  
ロシキ亂レ燒ニテ壹尺五寸三分無銘ノ業物ナリ  
是ゾ慶安年中駿府ニテ自殺セシ天下ノ謀反人長  
孔堂由井民部之助正雪ガ所持ノ物ニテ作ハ青江  
十五郎村政ノ由如何ニシテ此ノ道具屋ノ手ニ入  
リシカ丹ハ詳ナラザルガ半兵衛ハ町人ナガラ刀  
靱ヲ好ム故金百七十兩ヲ出シ子孫ノ寶ニセント  
買求メタルカ是ゾ家ヲ潰スノ基トハ知ラレタリ  
此ノ脇指ヲ求メシヨリ自然ト氣性驕リ高ブリ生  
レ碁ハリシ如ク是ヨリ金銀ヲ惜シマズ京大阪大

津ナドハ出デ驕リニ耽リシガ此年自火ニテ本師  
燒失シ七十餘歳ニテ中風ヲ病ム母ハ臥シタレマ  
ハ燒死シタリ新ハト云ハル者ガ半兵衛ノ愛妾ト  
出火最中ニ出奔シタリ持山ノ内ナル藥師山ヨリ  
材木ヲ伐出シ切組ミ之ヲ運送スル所ハ長男ノ半  
次郎トテ十五歳ナルガ見物スル處ハ材木轉ガリ  
来リ助ニ當リ悶絶シテ即死シタリ重ネクノ不幸  
ニ半兵衛モ氣落チシタルヲ強ヒテ心ヲ持直シ普  
請ニケルニ棟梁一人屋根ヨリ落チテ死シ翌年疔  
瘡ノ流行ニ大人マデ子供ヲ失ヒ又一人ノ男子ヲ  
神隱シニセラレテ行衛知レズ今ハ十一歳ニナル  
男子一名ノミ残リタリ妻ハ引續キ葬禮ヲ家ヨリ

甲斐志



出スヲ嘆キノ餘リ狂乱シ居間ニ火ヲ付ケタルヨ  
リ新築ノ家又々全焼シタリシヨリ半兵衛モ心魂  
激動スルノ餘リ嶋原ノ太夫ヲ搦ケズニスルノ  
豪遊ヲ始メ角屋ト云フ場屋ヲモ丹波ノ良枝ニテ  
新築シ諸道具モ山家ヨリ取寄セ太夫乙女ト云フ  
ヲ側ニ侍ラセ廊ヲ己カ家トセリ其頃本願寺ノ家  
来ニテ家老ヲ勤ムル七里讚岐守ノ息子ノ帶刀ト  
云ハルト乙女ノ奪ヒ合ヒ行キ張リ嵐山花見ノ豪  
遊舟ト舟トノ喧嘩ニテ互ニ死傷ヲ出ス程ノ大騒  
キトナリ帶刀ハ場屋入りトテ今ノ未決囚ノ監  
ミク様ナ履ニ投ゼラレ半兵衛ハ入牢トナレリ然  
ルヲ大金ヲ要路ノ役人ニ贈リ嘆願シタル結果出

牢トナリ帶刀ハ京都御構ヒトテ京都住居ヲ禁セ  
ラレ半兵衛ハ丹波御構ヒ屋敷ハ關所トテ没收セ  
ラレ半兵衛ハ妾於關ノ故郷ナル近江ノ大津ニ移  
リ住ミ所有ノ別荘ニ未子半助ト住居シ所有物ノ  
賣喰ヒレテ世ヲ送り居タリ年終テ半兵衛病死ス  
ル今端ノ際ニ半助ヲ枕邊ニ呼ビ自分ノ失察ト家  
道再興ノ事ナド言聞カセ彼ノ村正ノ一刀ヲ與ヘ  
吾ガ死後モ大切ニシテ吳レト云フヲ息絶ヘケル半  
助ハ母於關ト共ニ於關ノ父關右衛門ノ世話ヲ受  
ケタル後生長モシタルトテ伏見ニ出デ或ル兩  
替屋ノ店ニ奉公シ其ノ一刀ハ祖父關右衛門ガ保  
管中三十五兩ノ價入ヲナシタルヲ大丸屋彦右衛

京都府立総合資料館所蔵



門を買入レ豪遊狂亂此ノ一カヲ振り舞ハシ三十  
有餘人ヲ殺傷シタル椿事アリ重長ク丹波ニ關係  
ナキテ故畧ス謂ハ所ル大丸驗動是ナリ  
慶應ニ年七月近畿戒嚴ノ令幕府ヨリ出ツ升ハ毛  
利大膳大夫同長門守カ其ノ臣益田右衛門助等ヲ  
シテ京都ニ入ラレメ政敵會津藩主松平肥後守容  
保ヲ攻メシメタル際禁闕ニ向フテ發砲シタルニ  
ヨリ幕府ハ近畿ノ諸藩ニ命シ脱走ノ敵ヲ捕縛セ  
シメンガ爲且ハ怪敷キモノヲシテ京都ニ立入ラ  
ガラシメシガ爲ニ丹波ノ八藩外五名ニ切所々々  
ニ番所ヲ設ケ非常線ヲ張レリ青山左京大夫朽木  
近江守織田英太郎松平又七郎小出伊勢守谷大膳

大夫九鬼大隅守松平伯耆守以下畧ス  
當藩士ニ限リ京都往來ノ際桂川ニテ橋銭ヲ要セ  
ガリレト而シテ其ノ理由ヲ問ハハ當藩ハ桂宮家  
ト御關係アルガ故ニ御遠慮申セシナリト其ノ御  
由結トハ細川幽齋ハ桂宮ノ先智仁親王ノ歌學ノ  
師ニシテ幽齋カ田邊麓城ノ際ニハ親王御心ヲ痛  
ノ玉ヒ家臣大石夏助ヲ丹後ニ下シ玉ヒシ程ナリ  
シ尤レバ衛友カ幽齋ヲ刺殺救ヒシヲ御源賞アリ  
テ永ク此ノ特權ヲ與ヘ玉ヘルナラシト云フ説  
アリ著者云フ幕制ニ於テ帶刀人ハ何方ニテモ橋  
銭ハ要求セテレザリシナリ  
藩師ヨリ所ハノ路ニ肥後ノ坂アリ谷家ノ存續ハ

母  
成  
志



細川父子辯護ノ恩ニ由ル勅額ヲ以テ深ク之ヲ徳トシ紀念ノ爲ニ名ヲ附シタルモノナラン 細川氏ガ此ノ沿道ノ普請ヲ負擔セシ故トノ説モアリ

中筋村 大字 大嶋 延岡 高津 安場

地勢東方ニ綾部ヲ控ヘ而レテ北方ニ以久田村アリ西方天田郡界ニ接ス古來大嶋八村ノ稱アリテ大島新庄安場平野談畑延岡高津ヲ連結セリ高并ニテ千六百二十六石領主綾部一郡山嶽多キ中ニ於テ平田平野アルハ綾部ニ亞バ 福知山綾部間ノ公道アリ鐵道アリ村内ヲ通過ス大嶋ニ岐路アリ柳部村ヲ經テ丹後ノ河守ニ至ルバシ高津ノ西ハ天田郡ニシテ石標立テ是尙鹿郡ノ刻字アリ綾部ハ一里十町

八幡山極樂寺正八幡宮 昔往八幡大神何處ヨリカ空中ヲ翔ケリ玉フト見奉ル内遂ニ此所ニ下リ

中筋村

中筋村 史記



給フ時人コノ由ヲ朝廷ニ奏セシカバ勅使トシテ  
橋良基朝臣下向ス御所坊ノ遺址アルハ是レニ由  
ルトカヤ當時建ツル所ノ宮殿五坊皆火ニ罹リ今  
其ノ一坊ノ姿ヲ存ス 華陽成天皇元慶五年ニ起  
コリ應仁ニ燬ケタリトモ云フ 豊臣秀吉境内ヲ  
除地トシ高地ヲ寄附ス但五段歩有馬云蕃頭ノ寄  
附ト共ニ寄進状存在ス寛文九年九鬼氏境内地及  
ビ寄附例ヲ襲グ代々黒印アリ  
城址 足利氏ノ郡領大槻將監居守シ勢威四外ニ  
振ヘリ同大學同左京天正十年迄居守シ遂ニ落去  
ス  
大嶋城址 大嶋少之内出城ナルモノヲ構ヘ内藤

備前守ノ兵之ヲ守レリ  
福田大明神 大嶋村民ノ氏神  
井倉神社ハ平享盛ノ勸請星霜四百餘回ニシテ燒  
失ス正八幡宮ノ額面ノミ災ヲ免レ今尚存ス九鬼  
氏ノ社領寄附アリ  
孝子嘉兵衛ハ大嶋ノ産寛政二年六十三齡ヲ以テ  
褒賞セラレヌ  
孝子源兵衛ハ高津ノ産天明五年三十七齡ヲ以テ  
褒賞セラレヌ  
平野一帶緩部ヨリ天田郡ニ涉リ兩郡ノ人家相連  
ナルハ幡山ノ杉檜ハ産出頗多ク村民ヲ益ス 安  
場梨ハ近年ノ産出ニシテ後年ノ増益ヲト知スベ

大嶋  
史  
志



安政五年大元井伊  
 部頭直弼が勤王  
 不敵名ヲ捕ハ獄ニ  
 シテ以テ高月  
 照ニ及ブヲ憐ニ送  
 衛左大臣ノ内命ニ  
 月照ヲ送陸奥ニ送  
 藩ニ送

安政五年十一月十五日

土人ノ口碑ニヨレバ岡ノ木祖殿神社ハ義仲ヲ祭  
 リ福田神社ハ祀ルト  
 忠僕大槻重助ハ天保元年十一月十七日ヲ以テ生  
 マル幼名音松農夫裕平ノ三男幼童ニシテ觀世喜  
 ラ信仰シ殺生ヲ好マズ着實剛毅十一歳ニシテ家  
 計ノ優ナラガルヲ以テ人ノ奴タラガルヲ得ズ然  
 レビ商工ノ肆辱ニ入ルヲ屑シトセズ幸ニシテ清  
 水寺ニ小奴ノ需メアルヲ聞キ父母ニ請ヒ自ラ出  
 テ、具ノ寺ニ入ル成就院住職月照ハ篤實有爲ノ  
 僧ニシテ西郷吉之助ト加頸ノ交ヲ結ビ又近衛家  
 出入シ陰ニ國事ニ奔走シ幕府ノ忌ル所トナル

安政五年幕探寺域ニ入ルヲ以テ重助獨力和尚ヲ  
 扶掖シテ西郷ト共ニ九州ニ走ルニ容ルベキ所無  
 ク二人相抱キ海ニ投ス重助茫然自失己ムヲ得ズ  
 京ニ歸リ潛居ス幕吏コレヲ知り捕鞠シテ獄ニ下  
 ス半歳餘ニシテ赦サレ時ニ年二十上人ノ墓ヲ築  
 キ毎日香火ヲ供スル三十年餘明治貳拾六年四月  
 六日没ス年五十六遺妻アリ茶店ヲ清水寺ノ公園  
 ニ設ケ茶菓ヲ賣ル人呼ンデ忠僕茶屋ト云フ明治  
 末期妻猶健在ス左ノ碑文ヲ看ヨ  
 大槻重助丹波國何鹿郡綾部村宇高津人自少  
 事清水寺月照上人ニシテ慶具忠實權直每奔走  
 王事出入措紳常從其後安政戊午上人與予及

丹波國志



西郷南洲俱走西國重助亦從焉時年二十及上人與南洲相抱投海重助歸京下千六角獄半歲餘見赦後居于上人碑側守香火者三十有餘年如一日以明治廿六年四月六日歿享年五十六越八年南洲弟西郷侯及予與同志謀建石於成龍院內以表其忠侯自書碑面字使予記于碑陰嗚呼重助一寺僕耳遭過變故大節毅然出入生死操持益固自小至老事死如生世所罕見可也大傳也當時同事之士前後凋落殆盡而予自首領然猶存于萬死之餘俯仰今昔不禁感慨涕零也乃畧叙事由諡後人

明治三十三年四月

樞密顧問官正三位勲一等子齋藤江田信義撰

大槻重助写真  
京都清水寺忠僕茶屋  
重助壽所藏複写



京都府立総合資料館所蔵



一説ニ曰フ西郷隆盛吉之助平野次郎用臣ト三人舟  
 ニアリ一方ニ幕府ノ捕吏アリ一方ニ薩藩ノ追究  
 アリ其ノ適ル可ラザルヲ知リ二人海ニ投ズ次郎  
 舟ニアリ至レバ重助ノミアリ怒リ重助ヲ斬リテ  
 自殺セントス重助曰ハク君モ死ナバ誰トガ今夜  
 ノトヲ世ニ知ラサン君死スル勿レト次郎怒解ケ  
 從容出テ、縛ニ就ク重助拷掠百端セラレタルモ  
 只唯々スル而已ニテ又縛セラレ京ニ送ラレ忠僕  
 茶屋ニ忠僕ノ寫真アリ碑石ハ月照南洲ト共ニ清  
 水ニアリ  
 役場員木村某曰ハク當地ハ比較的富優民ノ多キ  
 所ニテ遊樂ニ耽ル傾ガアリマス其ノ一例トシテ

西郷隆盛  
 平野次郎  
 薩藩ノ追究  
 幕府ノ捕吏  
 舟  
 海  
 投ズ  
 斬リテ  
 自殺  
 今夜  
 死スル  
 勿レト  
 怒解ケ  
 從容  
 縛ニ就ク  
 拷掠  
 百端  
 セラレ  
 タルモ  
 只唯々  
 而已ニテ  
 又縛  
 セラレ  
 京ニ送  
 ラレ  
 忠僕  
 茶屋  
 ニ忠僕  
 ノ寫真  
 アリ  
 碑石  
 ハ月照  
 南洲  
 ト共ニ  
 清水  
 ニアリ  
 役場員  
 木村某  
 曰ハク  
 當地ハ  
 比較的  
 富優民  
 ノ多キ  
 所ニテ  
 遊樂ニ  
 耽ル傾  
 ガアリ  
 マス其  
 ノ一例  
 トシテ



丹波  
村ノ集會ニハ夜ニ入ルヤ三味線ヲ用ルテス

過激派陰謀犯

丹波ハ安穩ナル國平靜ナル所トハ思ヒキヤ十數年前ニハ船井郡須知所ニ其ノ萌芽アリ今又此ノ所ニ其ノ擡頭者アリテ今ハ油斷ナラス形勢トハナレリ今其ノ顛末ヲ左ニ畧記セン 大正十一年

大正十一年 一月中旬新年ノ祝賀ニ今ヤ芽出度ク終局セントスル頃怪報頻々人耳ニ喧シキハ京都ニ過激主義者ノ陰謀露顯シタリトノ巷説ニテ其ノ實ハ久通宮賀陽宮ハ死テ在郷軍人革命團ト署名シ新年ヲ迎ヘダルト共ニ日本革命ノ第一歩ヲ出發セント欲スル旨ヲ書シ過激ナル文字ヲ羅列シタルモノナリ兩宮ヨリハ急劇報告マリテ所轄中立賣署ト協



カシ京都警察部ノ活動ハ開始セラレ犯人捜索ハ  
方ニ擴充シ該文書が大坂方面ヨリ發送セラレタル  
形迹アルヲ以テ大阪府警察部ニ移牒シ同部ノ特別  
高等課ニ於テ高芝警部コレガ主任トナリ難波署ト  
協カシ犯人捜査ニ努力シタル結果同ニ十六日大阪  
今宮共同宿泊所止宿中ノ大阪通信局練習生中嶋一  
夫<sup>十七歳</sup>ヲ逮捕シ更ニ同ニ二十八日朝大阪市立高等商  
業學校二年生森本武<sup>十七歳</sup>ニガ新瀉縣長岡市ニ逃走  
シ居ルヲ同地警察署ニ急電ヲ發シ逮捕スルヲ得テ  
ノ右兩名ガ此ノ真犯人ナルヲ探知セラレタル經  
過運路ハ左ノ如シ  
中嶋一夫ガ以前大阪ノ某會社主義者ノ容使トシテ

中筋村

東京ニ行ケル事實ヲ難波署ニテ探知シタル結果容  
易ナラヌ人物トシテ同人ノ舉動ヲ探知スルニ努メ  
タル所今回右両宮家ニ對スル事件ノ勃發シ夫レガ  
大阪ヨリ發送セラレタルヲ以テ或ハ同人等ノ所為  
ナラン歟ト二月二日一夫ヲ同署ニ引致シ一應調査  
シタルモ同人ガ執意ニ緘口シ發言セザルヲ以テ故  
意ニ之レヲ放還シ竊ニ其ノ行為ヲ探偵シタルニ高  
商主ナル武ガ下宿セル南區天王寺勝山通り三丁目  
森福太郎方ハ頻々出入スル故武ノ素性ヲ調査スル  
ニ京都府丹波國何鹿郡中筋村大字延小字弓場ノ  
資産家森本理一ノ第  
タルヲ知リ且又一夫トハ從兄弟ノ間柄ナルヲ



モ知リ得テ同人ガ社會主義ニ感染シ一夫モ乏レテ  
習得從事シタル所ヲモ知リ得テレタリ是レニ由リ  
武ニ對スル疑問ハ濃厚ト爲リ二十六日再度難波署  
ニ引致シテ逐一面詰セラレ遂ニ事實ノ白狀ト爲リ  
其ノ事ノ露顯シテ危險ノ各ガ身ニ及ブラ豫測シテ  
長岡市在住ノ義兄ガ許ニ身ヲ寄セタル旨ヲ叙ベシ  
リ此ノ義兄トハ長岡市商業學校教諭ニシテ森本晃  
十<sup>二</sup>年<sup>三</sup>月<sup>三</sup>日<sup>三</sup>云<sup>フ</sup>ナリ  
武ノ自白ニ由レバ昨年春以來極端ナル過激派社會  
主義者ナル三田村四郎ト文盟シ舉動ヲ共ニシテ今  
回ノ行爲ニ及ベル者而シテ其ノ不穩文書ヲ執筆シ  
タル所ハ郷里綾部ト大阪ノ寓處ニテ一天ヲ使啖シ

両宮家ヲ始メ東京方面ノ貴顯及ビ大坂京都ノ富豪  
有力者等ニモ發送シタル形迹アリ其ノ文書ノ大部  
分ハ半紙其ノ他種々ノ用紙ニ墨書シ革命主義ノ激  
越ナル文句ヲ羅列シ誅主義ガ正義ニシテ公道ナリ  
トノ主旨ヲ反覆論辯シアリタリト云フ  
武ノ寓所ヨリ得タル證據物件ハ書籍原稿往復書狀  
等ニシテ某々方面ヨリ共犯者ヲ出ダス可ク且又其  
ノ寓處ヲ時々訪問シタル數名アリ夜間密議ヲ疑テ  
セル形迹アリ其ノ出費ノ輕淺ナラザルニ堪エタル  
ハ兄理一ガ近頃死没シタルニ由リ其ノ資財ヲ幾分  
自由行使スルヲ得タルナリ其ノ學校ニ於ケル同人  
ノ舉動ハ始終觀席シ之レヲ責問スレバ三月三四日



ニハ帰校スベレ試験ノ方ハ宜敷ク頼ムトノ不得要  
領ノ書狀ヲ長岡郵便局消印ニテ到達セシメタリ  
二月二十八日午後二時長岡發同地警察署河野刑事  
附添一日午前十時(時大改着難波署ニ入りタル武ハ  
旅路ニ疲勞シタル容子ニテ野田署長横地高等コレ  
が主任ト為リ高芝刑部等午後二時ヨリ秘密訊問ヲ  
始メ  
其ノ自白ニ據レバ社會主義者ナル新社會派佐藤々々  
太ノ過激主義ヲ奉ジ東京ノ同志トノ連絡ヲ圖リ密  
使ト為リテ來往運籌セリ今回ハ一夫ト兩人ノ合議  
ニ出テ西宮家及び諸家ニ又京都第六師團長及ビ大  
阪市外平ノ郷青年團ソノ他三ヶ所ニ發送シテ主義

ノ宣傳ニ努力セリ官家ニ對スル文書ニハ皇室ノ尊  
嚴ヲ冒瀆スル字句少カラズ其ノ他ハ革命謳歌ノモ  
ノヲ多シトス  
三月九日午後二時難波署ヨリ大阪地方裁判所ニ送  
ラレタル武ト一夫ハ葛谷檢事ノ嚴重ナル取調ヲ受  
ケ五時半兩名共出版違法ニテ起訴セラレ豫審判事  
秋山ノ手ニテ收監セラレ武ハ秋山豫審判事ニ對シ  
豪語スルモ武ハ始終沉默シ其ノ收監セラレト聞  
クヤ泣啼シ大犯罪人トハ想ハレテ舉動ナリシト云  
フ

不穩學生判決印刷者 森本武 禁錮四月  
配布者 中嶋一天 同上

同志



吉見村

吉見村 大字 有岡 里 高倉 小呂 多田  
星原

地勢ハ大川ヲ間テ一里緩部アリ北ニ物部村ト西  
八田村トニ接シ西方ニ以久田村アリ而シテ東方  
大川ヲ越エテ西八田村ニ隣ル 吉見ノ幾見舊郷  
ハ和知川本系ト上杉川トニ狹マル故ヲ以テ緩部  
ノ部落タルベキモ有岡多田等ノ諸部カ最初幾見  
名稱ノ下ニアリタル關係モ廢格ス可ラザル事情  
ヲ以テ枉ゲテ不便ノ一村ヲ形造レリト云フ  
幾見高二千四百五石九升内六百九十七石二斗  
谷内藏亟知行千四百四十八石七斗山家藩領 有  
岡多田二村高百二十石小呂三百七十八石

吉見村  
支  
志



主基風土記ニ 吉見里 富緒川 長宮山 藤浪  
社 篠社 若槻村トアリ此處近キニアルベシ天  
乃下蜀の徳川乃未なれハ以つれの秋々るハさ  
るへきト榮花物語ニ在リ長和ノ大嘗會歌ニ  
高倉神社 主神高倉ノ宮又ハ三條ノ宮トモ申ス  
後白河天皇ノ皇子ニレテ京都市中三條ニ住マセ  
玉ハル御方ナルヲ以テ此ノニ稱アリ當時平家ノ  
勢盛シニレテ皇子ハ御運開カセラレズ御齡長ケ  
ルモ親王ノ宣下ナクニ無ク居常鬱々アラセラル、  
ヲ伺ヒ源三位頼政ガ智辯モテ説キ勸メ兵ヲ擧ゲ  
チ父帝ノ幽閉ヲ解キ平氏ニ向フテ日頃ノ鬱憤ヲ  
晴ラサントノ企ハ見事ニ失敗シ頼政及ヒ其ノ子

吉見村

郎黨以下多クハ宇治川ノ川霧ト消エ失セタルガ  
頼政ノ妻ナル菖蒲ノ前ト近士三名コレニ附キ隨  
フ十二人ノ侍ドモ王ヲ輔ケテ山城ヨリ遂ニ丹波  
ニ入り綾部ノ大塚ニ匿レ又此ノ地ニ移リ玉ヲ途  
中御腹ノ痛ニ御脚ノ腦ニ且ハ戰場ニテ負ヒ玉ハ  
ル矢創ノ漸劇シク今ハ一步カニ爲シ玉ヲ能ハズ  
荏苒日ヲ送り玉ヲ内ニ薨去アラセラレ又其ノ亡  
キ穢ヲ埋メタル所ハ今ノ御旅所トテ是レハ治承  
四年ノ丁ニテ翌年九月奥谷ノ森ニ一小祠ヲ構ヘ  
高倉天一明神ト崇メ齋キ奉リ爾後毎九月九日ニ  
祭式ヲ執行ス十二士ノ苗裔當時ノ風尚ヲ存シ甲  
冑ニテ神輿ヲ護シ村人ハ跣足ニテ隨行ス此ノ跣

吉見村志



且隨行ハ當時人氏ガ田ニ下リ居タルガ皆競フテ  
 来リ御夕抱ニタル仰ナリト云フ神輿ニ日月旗祠  
 官騎馬十二士騎馬隨行者武装或ハ禮装シテ供奉  
 ス後時日神ヲ中ニ立テ小兒裝束シテ其ノ周圍ヲ  
 舞踏ス御旅所ヨリ本社マデ五十町跣足シテ足跡  
 ノ石ニ觸ル、ヲ覺ズ假令ニ觸ル、モ疼痛頓ニ  
 止ム草鞋ヲ穿ツト異ナル無シトカヤ祭日ノ供物  
 ヲ保存シテ小兒ノ腹痛ニ際シ之ヲ食ハシムレバ  
 治ス脚疾モ亦治ス升ハ宮ガ途中ノ御惱ニヨリ此  
 ノニ患ヲ除カント御誓アリシニ由ルト言ヒ傳フ  
 十二士ノ家ハ長ク世ノ尊信ヲ受ケ家々古話ノ傳  
 承アリ懐古史談ノ料トスベシ今ハ畧ス十二士ト

ハ 能勢伊織 洲垣住居 佐々木次郎季産 真野住居 塩  
 見兵衛道貞 上杉住居 大槻權頭光頼 高津住居 渡邊  
 隱岐守俊久 十倉住居 坂田甲斐守産時 武吉住居 村  
 上判官秀行 高槻住居 上原豊後守忠將 物部住居 河  
 北石見守貞則 志賀住居 小野木馬之助 福知山住居 萩  
 田盛政 住田住居 碓井判官貞時 高倉住居  
 歴史傳フル所ハ以仁王兵ヲ攀ゲ宇治ニ敗レ逃ケ  
 テ井手ノ渡ニ至リ光明山ノ鳥居前ニテ流矢ニ中  
 タリ馬ヨリ落チテ薨ス從者皆後ル僧覺尊ト舎人  
 ノ黒丸ト二人相扶ケテ馬ニ上セ去ラントシ平景  
 高ケ從兵ニ首ヲ獲ラル時ニ王ノ年三十三條高倉  
 ノ宮ニ屏居セラル、丁久シキ故ニ王ヲ識ル者寡

史記  
 後  
 志



丹波 丹波 丹波  
シ平氏モ其ノ首ニ非ルカヲ疑ヒ玉ノ嘗テ竊幸セ  
ラレシ婦人ヲ召シ之ヲ見セシム婦人一見シテ涙  
ヲ揮フ乃ケソノ疑ヲ解クト云フ是ニ由リ之ヲ視  
レバ此ノ地マテ逃ゲ延ビ得ラレタリヤ否平氏ノ  
獲タル所ハ贖物ニテアリシカ彼レ真ニシテ是レ  
偽カ役レ贖ニシテ是レ信守  
真野八幡ハ前記ノ佐々木季重ヲ祀ルト云フ其ノ  
真野ト呼ブハ近江ノ地名ニシ佐々木ハ近江源氏  
ニシテ近江ノ真野ニ住シ其ノ裔季重ナルモノ此  
所ニ在住ニタルトカヤ  
塚三箇其ノ一ハ多田ニ在リ其ノニ箇ハ里ト高倉  
トノ間ナル石田神社ノ後方ニ在リ石田神社ハ清

和天皇ヲ齋キ奉リ塚トハ相関セ玉具ノ聖塚ト呼  
フモノヨリ葵振ニタルモノ小學校ニ保存セラル  
日ハク埴輪曰ハク漢式鏡曰ハク甲冑刀劔曰ハク  
圓筒形破片ノ土葺ニシテ口碑ニ以仁王ノ錦旗  
軍器ヲ埋メタル所ニテ觸犯スルモノ古來無カリ  
レナリ菖蒲塚ト呼ブモノハ頼政ノ妻菖蒲ノ前ヲ  
葬埋ニタル所ト云フ此ノ女ハ甲斐々々敷クモ始  
終王ヲ御分抱申レ上ゲタリトノ傳説アリ前記ヲ  
参着スベシ  
此所ノ三塚孰レモ方形塚方ニ十間高廿二十尺ア  
ヤメ塚亦同形ニシテ一マハリ小之方形ノモノ至  
リテ少シ用明天皇陵推古天皇陵ニ於テ之ヲ見ル

丹波 丹波 丹波

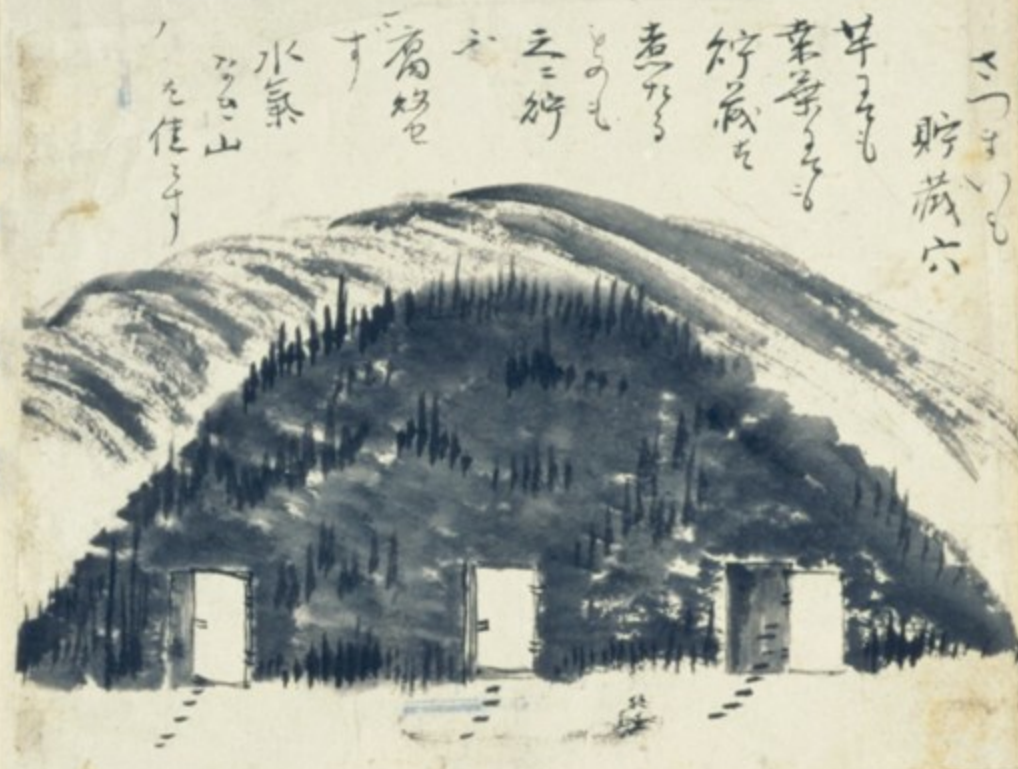


普通ノ方形式ノ内部ニ石室アリテ正南面スルモ  
此所ノモノハ四角カ各方位線ニ合フテ斗ル之ヲ  
異トストハ經驗家有識者ノ唱道スル所  
日誌 高倉ハ日誌ヲ善ク造リ出シ又善ク貯フ山  
ニ倚リ諸藏ヲ作り其ノ内ニ收ム夏天ノ炎蒸ニモ  
其ノ内部ノ涼氣ニヨリ腐蝕ノ虞無カラシメ長ク  
其ノ形色味ヲ三具スルヲ得シム穴高サ四尺斗幅  
九尺許奥行ニ間餘入口ヨリ一間許ニシテ分カレ  
又一間ノ奥行ヲ有ス  
里ノ五石南面ス 右梅迫 左志加 むくしどト  
刺ス  
奇特者 我見ノ百姓清兵衛ノ祖父全了 褒美ヲ

受ク 寶曆五年  
人家多ク新崖岸邊ニ設建セラルハ何故ゾト尋  
ネタルニ普通ノ屋敷地ハ年貢重クシテ所狭キカ  
故ニ不便ヲ思ビテ斯カル所ニ任ムモノト答フ今  
ヤ田舎ニモ單獨生活ノ非ナルヲ感ゼレニヤ明治  
ノ末年著者ガ再遊ノ時ニハ便地ニ移住群居スル  
ノ傾キヲ見ヌ

京都府志





貯蔵穴

早も

葉葉

貯蔵

老

之

行

不

高塔

す

水氣

山

を住

京都府立総合資料館所蔵



吉見報徳同志會記事

明治二十年同志相謀り、靜岡縣ノ報徳結社ニ習ヒ  
一致團結シテ、村是方針ヲ定メントセシニ恰好シニ  
十一年二月、遠江國報徳社副社長伊藤七郎平本府  
ノ聘ニ應ジ、巡迴スルノ時、村内同志社舉リテ、其ノ  
教旨ヲ親受スルヲ得タリ、其ノ時會員タルモノ僅  
ニ九名ナリシガ、其ノ積立金ノ内ヨリ、創立費ヲ義  
捐シ、特志者ニ託テ入社ヲ勸誘シテ、二十五名ノ會  
員ヲ得タリシカバ、七月十五日ヲ以テ、創立總會ヲ  
開キ、定款ヲ議定シ、役員ヲ選舉シ、報徳社監督ノ下  
ニ立ツテ、乞ヒ社長ノ印可ヲ得タリ

明治三十一年民法ノ發布アリテ、法人會社ノ區別



立チシカバ本社ハ營利ヲ目的トセザル社團法人  
トシテ定款認可ノ申請ヲ爲シ爾來講話會ヲ設ケ  
道德經濟殖産ニ關スル演說講話ヲ聞キ月ニ年ニ  
益スル所アリ人氣頗ニ勃慶シ日露戰役中ニ在リ  
テハ國債應募血兵事業軍資獻納軍人遺族救護等  
ニ關スル努力ヲ爲シ風俗ノ改良ヲ企テ篤行勲業  
者ヲ表彰シ身體脆弱又ハ疾病ニテ勤勞ニ耐エガ  
ルモノ及ビ天災不幸ニ遭過セルモノ若クハ資力  
欠乏者ニハ金品ヲ贈與シ或ハ資本ヲ貸與シ以テ  
報徳社ノ主旨ヲ實行シ著々其ノ歩ヲ進メ其ノ效  
ヲ著ハセリ京都府下ニ宮尊徳報徳事業ノ成立ハ  
目下只コレアルノミ

然然居梅原半之助ハ高人ナリ農家ニ生マレテ農  
人ト伍スルヲ好マズ早ニ禪味ヲ解シ法律ヲモ窺  
ヒ新聞紙雜誌等ニ由リテ知識ヲ益蓄シ助役ニ公  
選セラレ村會議員ニ舉ケラレ報徳事業ニハ殊ニ  
力ヲ戮キ副社長トナリテ夜學會青年會ニ參與シ  
眞摯ニシテ粉飾スル所無ク演說スル毎ニ自己ノ  
經歷ヨリ社會ノ開發ニ説キ及ボシ言々肺腑ヨリ  
出デ常ニ青年ノ誘導率先ヲ以テ自任シ勤儉是レ  
行ヒ其ノ他出スルヤ色褪セタル黒紋付羽織ニ古  
袴ヲ穿テ手ニ古靴ヲ携ノ頭髮ハ其ノ妻ヲシテ草  
川鎌モヲ削リ取ラセ自身牛ヲ逐フテ綾部町ニ行  
キ山産野産ノ物件ヲ賣リ歸途牛背ニ跨カリ駄菓

京都府立総合資料館所蔵



子果物ヲ嚙ル等大ニ人ニ異ナル行爲アル皆自然ニ出テ村人ハ言フニ及バズ鄰村ノモノヲシテ崇尊敬慕セシムルニ至ル吉見ノ奇人トハ是レナリ

小畑村

小畑村 大字 鍛冶屋 小西 中  
村ハ郡ノ北西部ニ位シ東北ハ物部村ニ南方ハ佐賀村ニ西方ハ丹後國ニ隣ル山間ノ僻地トス  
鍛冶屋村高 元祿定七百二十六石 文久改八升三合増内十四石七斗二升ヲ 新田高トス 緩部領中村高 元祿千四百四十五石 文久千四百五十三石九斗六升五合内十八石八斗五升 新田高 局小西村高 舊高 栗村ノ内ニ合ム 文久高六百十二石八斗四合内八石二斗四合 新田高 同  
寛永羊度小畑四ヶ四百十二戸 千七百二十七人 牛馬百三十一頭  
古城跡 小幡ニアリ 中村ニモアリ 波々伯部源内

小幡 波々 志



左衛門義信ノ住居ト云フ  
 枿實 此ノ邊ニ多キハ善左衛門ト呼ブモノニシ  
 テ久保枿ニ似テ味好シ一株ヨリ十五圓バカリノ  
 金高アルヲ珍ラシカテ天<sub>二</sub>明<sub>一</sub>治<sub>四</sub>十<sub>一</sub>外國輸出品トナ  
 リヌ  
 鍛冶屋ニ山下甚右衛門ト云フ家アリキ舊家ナル  
 ニ何故カ破風ヲ造ラズ今ハ其ノ故ヲ詳ニセズ物  
 部村ニアル城山ハ上原豊後守カ住シタル所ニシ  
 テ其ノ落去ニ際シ豊後ノ妻園中ヲ脱シテ山下ノ  
 家ニ逃ル山下ノ族ツノ後難ヲ怕レテ容レズ妻憑  
 ル所無ク三坂峠ヨリ落テ延ビントス所ヲ敵ノ追  
 兵ニ殺害セラル追兵具ノ又ヲ池ニ洗フ具ノ池水

俄ニ血色トナリ波卷ク赤シ今ニ至ル迄澄メル時  
 トテハ無シ御太刀池ト呼ブモノ是レナリ具ノ水  
 ヲ飲ムモノ眼ヲ患フト云フ是所ヨリ流レ出ツル  
 一筋ノ溝渠水質殊ニ善カラズ  
 孝子 鍛冶屋村ノ百姓喜平次 寛政ニ年慶美セラ  
 ル時ニ六十二歳  
 著者ハ此ノ村ヲ尋ヌベク途中ニアリ折善クモ道  
 伴ト爲リタル者能ク此ノ邊ノ下ヲ知レリ舊時茲  
 處ノ代官カ又ハ其ノ手代カヲ勤メタルモノト想  
 ハル著者ノ問ニ答フル所次ノ如シ日ハク庄屋給  
 料ハ石高五升トシ租米一石ニ付キ五升ヲ取ル過  
 産ノ取個ノ如ク聞コエルモ左ニアラズ年寄以下

小畑村  
 鍛冶屋  
 志



ノ集會ハ庄屋ノ家ニ於テスルニヨリ損ジ物ヤラ  
飲食ヤラ皆ソノ内ヨリ支辨セガル可ラズ年寄ノ  
給料ハ三人ニ一石トス年寄ノ役ハ庄屋カ計算シ  
タル所ヨ調査スルニアリ計算上毛數ヲ厘數ニ繰  
リ上ヤル丁ハ許シアルナリ是レハ庄屋ノ役得ト  
ナルナリ庄屋ニ正直ニシテ能ク勤ムレバ年寄ハ  
爲スベキ丁無シ給料ノ少キ譯ナリ 村々ニ旅人  
ヲ一宿セシムル家アリ庄屋ノ差圖ニテ農業ノ餘  
暇ニ之ヲ爲ス僻地故イフモ旅人アルニ非ズ時季  
ヲ見計ラヒ商人ノ来ルアリ雇無僧愛宕坊又ハ無  
宿ノモノガ旅路ヲ行キ暮ラシ食ナク銭ナキ徒輩  
カ村役人ノ許ニ来リ一宿一飯ヲ乞ハバ已ムヲ得

ズ飲食セシメ宿泊セシメタルガ庄屋ニテモ面倒  
手數ナルモノカラ相當ナモノニ具ノ營業ヲ爲サ  
シメ之ニ一任シ其ノ煩ヲ避ク無宿投宿ノモノハ  
夕飯朝飯ヲ與フ此ノ入費ハ村費トス一宿ニ五米  
ニ升ヲ給ス繪符持ト稱スル者即チ菊ノ紋ヲ附ケ  
又ハ右ノ愛宕山以外諸寺社ノ印鑑ヤラ官方撰家  
ナドノ印鑑繪符ヲ持チ兩掛ヲ荷ハテ神符寺符ヲ  
配ルモノ等ハ村々ノ厄介者ナレドモ幕府ノ公許  
ニ罹カルヲ以テ已ムヲ得ズ村町ノ贖目ニ計上ス  
ルナリ 通用貨幣ノ繁雜ナルハ想像外ナリ慣レ  
又者ハ是數キ損失ヲ蒙リ迷惑シカラズ例ハバ村  
人足トシテ小前ノモノガ一日働クニ五米ニ升ヲ

丹波  
志



給セラル、トセヨ之ヲ銀札ニテ渡セバ貳匁ト定  
ムモ辨當ハ持參スルモノトス白フ銀ナレバ一  
匁トス是レハ上々ノ人足ナルガ職人ナレバ三匁  
トス金相場銀相場ノ差異アリ高下アレバ日々夜  
々ノ変動アリ當所ハ綾部領デアリナガラ綾部藩  
札銀百二十匁位ニテ金壹兩換テ園部札福知山札  
モ亦同シ柏原札ハ二百匁龜山藩ノ黒井水上新黒井  
村部ヲ看ヨ札ハ同シク山家藩札ハ七十匁位トス山家札ハ低イ  
ト云フテ却ツテ歡迎セラル信用薄キ丈銀相場モ  
其レ相應ノ呼價トス而シテ得ル札數ガ多キ故却  
ツテ人氣ニ投スルハ妙ナル作用ナリ右石高ノ内  
ニ銀納モアリテ都度々々諸札一覽表トモ云フべ

キモノヲ作り彼此ノ差ヲ立テ數種ノ札ラ一纏メ  
ニシテ上納ス優長ナル時節ナレバコソ出来ル丁  
ナレ云々  
米相場 享保初年 壹石銀二十七匁ヨリ二十八匁  
ノ間ヲ上下ス 金相場壹兩ニ付銀九十匁位 享保  
六年ノ不作ニハ壹石ニ代銀二百十匁トナリ七年  
ニハ四十匁マテトナリ又元ノ二十匁マテ漸次下  
レリ  
一村數領施沼煩雜ナルニ引換ハ此ノ邊ハ數村一  
領且又領主ノ近傍ナルヨリ轉々便利ナリ左屋三  
代續カスト云フ誘ハ非ナリ當所ノ如キハ數世持  
切リノ家アリ其ノ家ノ子供ハ庄屋ヲ自分ノ内ノ

町  
坡  
志



仕事ト思フテ幼年ヨリ仕境レテ親助ケラスル封  
 連ノ領主ヲ止ニ戴キ封建ノ村役ソノ下ニアリ庄  
 屋ニ代續カヌト云フ語ハ種々ノ解釋トナレリ

佐賀村 大字 報恩寺 私市 印内 山野口 小  
 貝 石原

地勢南方大川ニ臨ミ北方物部村ニ接シ丹後國ニ  
 疆ニ西方天田郡ニ交ハリ東方屏川ヲ間テ、以久  
 田村ニ隣ル鬼ヶ城山脈西北境ニ連ナリ二川東岸  
 ニ流ル而シテ平坦ノ地ケカラス村名ヲ佐須賀ノ  
 社名ニ取ル

大字私市元高千五十七石 文久改九百三十八石九斗一  
 升九合三勺 内三百六十三石三斗九升二合三勺 杉浦出雲  
 守四百石 川窪佐太夫 百七十五石五斗二升七合  
 内藤播磨守等知行

和名鈔ノ私市郷 私市トハ本来后部ノ謂ナレバ

佐賀村

山  
 野  
 口  
 志



キサイツト謂フベキヲ畧轉シタルモノトカヤ  
 而シテ私市ノ二字モテ當ラタルナリト云フ  
 佐須賀神社 素盞雄尊ヲ祀ル數村落ノ氏神トシ  
 テ社領ニ富ミタルガ戰國ノ時ニ没收セラレ今ヨ  
 リ明治三十四百三十年前燒燬ノ厄ニ遭遇シ記文ノ徴  
 スベキ莫シ加茂社領タリシ  
 丹波國私市(四十一所) 壽永三年四月壬辰加茂社領四十  
 貳箇所院廳御下文可止武家狼藉之由有御沙汰  
 下諸國早可仕院廳御下文停止方々狼藉備進神事  
 用途加茂別當御領莊園事  
 高龍寺山 私市ヨリ西望スレバ芝山アリ是レヨ  
 リ登ル古迹アリ今ハ只山ノ名トナル西北方ヲ圍

佐賀村

繞シテ烏ヶ嶽及ビ鬼ヶ城山對峙ス  
 小貝村 栗村ノ内ナリシヲ栗村大羊以久田村ニ  
 編入セラレタル時此ノ一小村ハ石原村ト共ニ佐  
 賀村ニ入ル  
 小貝城主川北石見守天正年中ニ落去  
 孝子 百姓與兵衛娘さつ三十七歳安永ニ年廢美  
 テラレヌ  
 石原村  
 牛頭天王社 二間ニ一間半ノ社地及ビ墜十八間  
 幅十六間ノ境内除地  
 印内 古高二百八十石 文久高三百石七斗三升二合  
 御代官所

丹波志



山野口 百九十一石 文久高二百四石 九斗一合

御代官所

大字報恩寺村 此ノ村西ニ二丹村アリ古采合併ノ姿ナリ高モニ村ヲ合ハセ元祿高千三百八石文久高千三百三十九石一斗八合ニ勺 内七百二十一石一斗九合 御代官所 三百六十六石四斗九升五合ニ勺 杉浦出雲守知符 二百五十一石五斗四合 柏原藩領

福性寺 葛尾谷ニ在リ 真言宗ニシテ殆ヒト千有餘年ノ舊刹 空也上人ガ京都ノ六波羅密寺創建後二年ニシテ来リ衆生ヲ濟度スルノ次デ此ノ地ヲ相シ堂塔門廡并ビ建テラレシモ災厄ニ遭ヒ廢絶シ三百年ヲ經テ良阿闍梨コレヲ再興ス

報恩寺管 天保年間ニ於ケルニ三竿ノ竹ガ今日

ニテ二十四町歩マデノ竹林トナリ今後尚々豫想ノ出来兼ヌル迄蠱々トシテ殖工行ク新産物アリ抑々誰レカ此ノ新産物モテ後世ヲ益シタル升ハ當地ノ人四方仁左衛門ヲノ仁ナリ此ノ仁ハ深慮遠謀アルニ非ズ仁心義行アルニモ非ズ偶然試植ノ結果ニシテ自分ナカテ不思議ニ思フモ理ナリ左ニ其ノ梗概ヲ示サシ 天保七年仁左衛門ガ買得シタル隣地ノ服部某ノ宅中ニ江南竹ニ三竿アリ其ノ山間不毛ノ地ナリヲ以テニヤ生育ノ勢モ無ク見スホラシク立テルノニ試ニ之ヲ宅後山麓向陽ノ場ニ移植シタルニ地味適レ培養應ジ筍生

竹 成 志



ジテ竹トナリ竹茂リテ林トナル一年ノ筍ヲ掘  
リ自コレヲ食フニ味美リ之ヲ人ニ食ハシムルニ  
其ノ美ヲ賞ス試ニ之ヲ福知山青物市場ニ携ヘ夕  
ルニ一莖銀札數及ノ價ヲ附セラル乃コレヲ賣リ  
此ノ奇利アルヲ認メ益々コレヲ増作セント企テ  
鑿斷獨占スルニ忍ビテ隣保ヲ誘ヒ勸メラ自圃ノ  
竹根ヲ分與シ其ノ經驗厚利ノ事共ヲ示レタレバ  
之ニ應ズルモノ属出シ謂ハ所ル雨後ノ竹ノ子ト  
シテ自利々他シ本年<sup>明治三十</sup>三萬千二百貫<sup>此ノ</sup>  
價三十七百五十圓ノ産額金額ヲ算スルニ至リ仁  
右衛門偶然ノ功一村ニ及ビ又他村ニマデ及ブ  
トハナレリ

仁右衛門ノ事業壹ニ一筍ニ止マラズ森林ノ經營  
ニ志ヲ用ヒ杉檜杉ノ類ヲ選植シ薪炭用ノ樹苗ヲ  
栽植シ山林ノ輪伐法ノ歐米ニ行ハルト聞キ之  
ヲ實行シテ其ノ有効有利ナルヲ知ルヤ村人ヲ勸  
メ導キ村是永久ノ方途ヲ講シ幸福ヲ後昆ニ垂ル  
、<sup>ト</sup>是レ勉メタリ而シテ今ヤ其ノ人無シ仁右衛  
門ノ如キハ農中ノ農ナリ知ラズ此ノ人ニ亞ギ此  
ノ業ヲ續ゲハ誰ヲ著者ハ領ヲ引キ之ヲ望ム







杜氏話 此ノ村ノモノデスガ古杜氏デス左  
様デス御一新前カラ遣ツテ并マスノデ五十年ニ  
ナリマス元来此ノ倉男ト申シマスノハ但馬ガ丸  
分九厘デシタノデ牛ト倉男ハ但馬デ買ハト申シ  
タ位デスガ今テハ此ノ邊カラ多ク出マス 篠山  
アタリハ掛ケテ大層出マス一度出マスト其味が  
忘レラレマセヌ ナニ私バカリデハ無イ誰レデ  
モ左様申シマレテ毎年冬ノ時候ヲ待ツノデス  
是レサヘ遣レバ農業ノ不作位ハソシテ杜氏ニハ百  
云ヒマセ又今デハ金高カ殖ハマシテ杜氏ニハ百  
日間ニ二百圓ト心附ガアリマス倉男デ半直ヨリ  
ドント下リマス 飯焚テハ百日間八圓位シカ取レ



マセス 左様デス米ヲ受取りマシテ自分ヲ焚キ  
マセ 酒造藏ニ小屋ガアリマスヲ部屋ニ致シ  
マス菜ハ皆貫ヒマス 何分用事ノ無イ時分ニ餘  
所ハ出テ百日稼シテ儲ケルノデス故有リ難イ仕  
事ナシデス ソトデス八圓位デハ旅費ニモ足り  
マセヌガ家ニ居テ味無イモノ計リ喰フテ酒モ飲  
メヌモノガ米ノ飯ハ喰ヘル酒ハ飲メル菜ハ看モ  
アルト云フノデ出懸ケルノデス其上辛抱シテ見  
習ヒマスルト何時ノ程ニカ手カ上がりマシラ杜  
氏ニナリマス故ソレヲ樂ニモ致シマス 杜氏ニ  
ナリマスト眠ル間ナドハアリヤシマセヌ 瓶ヲ  
半切ニ入レテ撥キ廻ス時カラ三尺ニ分ケテ沸キ

付カセル愈々森桶ニ入レタ後マデ醪ノ沸キ短合  
ヤ泡ノ立テ塩梅ヲ晝夜氣ヲ注ケネバナリマセヌ  
温ク過ギテモ五液ナ酒ハ出来ヌガ去リトテ寒ム  
過ギテモ醪ノ沸カ悪ルシ其ノ寒ム過ギル時ハ夜  
中ニ起キテ炭火ヲ焚キ釜中ヲ煖メマス赤兒ヲ育  
テル氣ヲ造ルノデス 大桶一本腐ラレマスト三  
十石ハ舞ヒ附ケテ十圓餘ヲ損トナルノデス五十  
仕込ニテ千五百石此ノ價五六萬圓コレヲ上等ニ  
仕揚ケマスト氣分ノ宜イノガ儲ケ物ト云フ位デ  
ス心配丈ノ値打ハ無イ様デス 杜氏ノ次ガ代仕  
テ是ハ産ニ麹室ヲ預カル役目テス酒ノ善レ悪シ  
ハ麹ノ出来不出来ニヨリマス故是レモ中々大役



ナシデス朝カラ夜マテ蒸サル様ナ室ノ中テ息苦  
シイノヲ辛抱シテ働キ頼リト翻ノ花カ咲ク矩合  
ヲ考ヘネバナリマセヌ 私等ト代仕ノ外ニモソ  
レ 後ニヨツテ位ト金ハ違ヒマスカ身ノ働キハ  
平等デス夜ノ十二時迄クマデモ酖ヲ羊切ニ入レ  
テ掛聲勇マシク搔キ廻シ十二時過ニ部屋へ這入  
リ炭火ヲ取巻イテ狗ノ兒ノ様ニゴロ寐ヲヤリマ  
スノビヤ寐ルガ早イト三時ニハ起キニヤナリマ  
セヌニ十石餘モ入ツタ大釜ノ下ヲ焚キ付ケル  
ソノ蒸レガ揚ガルト素裸ニナリ蒸シ立テノ熱飯  
ヲ手桶テハ運ンデ細桶ノ中へブチ込ム ソレニ  
翻ト酖ト水トヲ一フニシ三間モアル大キナ椀デ

ヨツシト搔キ廻スノデ一段仕込ガ濟ムノハ  
朝ノ八九時頃デス 夫カラ飯ヲ喰ヒ直ニ禪一ツ  
デ水場へ行キ井戸カラ三斗モ入ル大釣籠デ水ヲ  
汲ミ揚ゲテ米ヲ洗ヒカヲ入レテ磨キマス ソレ  
モ五斗位ヲ一度ニ磨クノデアル故手デハ追ヒ付  
キマセヌ 兩足ヲ米ノ中へ踏ミ込シテ斯ク云フ  
様ニ踏ムノデス(任方畧ス)其ノ歌ガアリマスト云フテ  
調子ヲ兩足ニ合ハセ謡フ(歌調子畧ス)火燵ニ寐テハ  
サハ寒イ時テス故コノ調子ガナケレバ水仕事ガ  
出来マシヨウカ 是ガ濟ムト晝ニナリマスノデ  
飯ヲ喰フテ二時計リ午寐ヲヤリマス 又起キテ  
仕込水ヲ汲ミ具ノ間デモ隙ヲ見テハ酒槽ノ袋ヲ

京都府立総合資料館所蔵



換へ満足ニ五時間ハ寐ラレマセ又上ハ近來ハ例  
ノ検査役ノ検査役人カ時刻嫌ハ不遣ツラ来テ午  
寐シテ升テモ叩キ起コシテ泡醪ヲ検査スルカラ  
權ヲ入レヨトカ搾リ中ノ酒カ足ラ又トカ石ヲ卸  
シテ半分搾レタ醪ヲ搾濟ノ酒ニ入レテ元ノ醪ニ  
返ヘセトカ難題ヲ申シ込ムナドノ苦イトガアリ  
マス 是モ旨イ飯ガ喰ヘルノト好ナ酒ガ十分飲  
メルノトノ行ケルノデス併シ酒倉ノ中デハ平生  
一升飲ムモノモ五合位シカ迄入りマセ又ソレハ  
酒ノ香ガ鼻ニ附ク加減ト申シマス以前ハ酒造家  
カラ隨分ト善カラ又目ニ逢ハセヨリマシタガ近  
頃ハドコモ善ク扱ヒマスル左様デス酷イ目ニ逢

ハセルトラ別段苦シノ様モ無イデスガ給金ヲ頼  
シデモ中途ニハ渡サヌトカ飲ミ喰ヒノケチヲツ  
ケル位ナラデス 左様ヲノ意趣晴ラシニハ一二  
本腐ラスノデス是デ酒造家カ大損ニナルノデ近  
頃ハ氣カ附キ中々大切ニ取扱ヒマス 左様首尾  
能ク仕揚ケテ主人ノ笑顔デ私等ノ出立ヲ見送ッ  
テ呉レマスノガ愉快デスレ本山ハ參詣モ出来マ  
スレ京土産ヲ持ッテ歸ッテ内ノモノヤ親類ノモ  
ノヤヲ喜バセマスナドガ愉快ナノデス孫等カ今  
年ノ冬モ又杜氏ニ行キヤナド申シマスアハハ、

支志



志賀郷村 一ウサとむら 大字 向ノ田 今河内 屋岫  
をそり 西方 兩河内かりやう 別所 内久井 民家  
くき 八百戸餘 明治十年 (屋河内 金河内 坊河内アリ 下二河内)  
ヲ以テ兩河内トス  
 志賀ノ名ニ付キテハ史書口碑トモニ徴スベキモ  
 ノ無シ其ノ七不思アルヨリシテ名ヲ四方ニ馳セ  
 タルノミ古ノ吾菴あさき郷あさきニシテ深山。屋岫。向田。  
 別所。中村。長尾。井岡。岡村。奥村。宮奥。味噌尾。屋河内。坊  
 河内。遠ヲシ志賀リノ中央ニアリタルガ今ハ七大  
 字トナル 地勢南方物部村ニ接シ東方東八田村  
 ニ續キ西方物部村ト丹後國ニ連ナリ北方連山ニ  
 シテ丹後ニ接ス 犀川ノ源コ、ヨリ出テ滴々ノ  
 溜ハ別所西坂物部ノ小派ヲ容レ小貝ニ下リ和知

支 志

丹 洲 言



川ニ入ル 郡内山村多シ田野少シト雖、ノ村ノ  
 如キハ田多キ部ニ入ルヲ得 山家藩領ヲ多シト  
 ス元禄高三千九百六十二石  
 文久年間 志賀村二千九百九十八石二斗〇四合  
 内百四十二石一斗四合ヲ相原藩領トス 坊河内  
 村八百三十石内二百九十石ヲ同領トシ残五百四  
 十石ヲ山家藩分家谷内藏丞知行トス今河内村三  
 百石内久井村三百三十石西方村五百石五斗六升  
 相原藩領同村内東ノ西方四百二十石綾部領 西  
 方ヨリ丹後加佐郡市原谷、三十町同郡久田美迄  
 兩河内ヨリ一里半西方兩河内ヨリ北隣ナル丹後  
 加佐郡、往來センニハ山路崎嶇トシテ迂回ニ違

志賀郷村

岫ヨリ東北行シテ黒谷ニ通スル一里半程モ亦前  
 阪後坂相重ナリ行キ易カラズ  
 案内者志賀村ノ壽八翁ノ七不思議話節略  
 丹波ハ古イ國ト申ス、トデスガ此處ハ其ノ古イ國  
 ノ中デノ古イ村デ外ノ村ニ無イモノガ昔カラ七  
 ツ迄揃フテ出マシタ第一藤ノ森明神デス是レガ  
 舊曆正月元日ノ朝ツノ花ヲバ咲カセマス年々ニ  
 斯様ニ咲キマスノデ人々不思議ニ思ヒ是レハ天  
 子様ニ獻上スルガ好カロト申シ高イ松ノ木カラ  
 之ヲ切り却シ遙々奈良ノ都、指テ上リマスノニ  
 鷲ニナリテ飛ンデ仕舞フタノヲ途中カラ歸ツテ  
 来マシタ時ノ領主ガ之ヲ聞キ拵テ參レトノ、トデ

支 志



又高イ處カラ切り却シ持チ参リタルニ今度ハ鬼  
ニナリ跳リ逃ゲタ故是レ亦途中カラ歸リマシタ  
其ノ後ハ此ノ花ヲ他所ハ持チ去ルノハ明神ノ嫁  
ハセ玉ヲナラントテ一切外ハ出エマセヌトニ  
致シタサウデスガ矢張り明神ハ此ノ二度迄持チ  
出シタノヲ嫌ハセラレタカ怒ラセラレタカ其ノ  
後次第ニ憂カ弱ハリ花ガ咲カヌ様ニナリ今日ノ  
如ク一本モ育タヌ様ニナリマシタ  
須波神社デス今茲ニ明治二十八年デ一千百八年  
ニ當リマス昔ニ於テ此ノ宮ガ出来タノデス是レ  
正月ニナルト枚ノ實カ出来マスノデ不思議ノ一  
ツニナルノデス御用枚トモ申シマスノハ天子様

カラ御所望アツテ御用ヅト仰セラレマスト直ニ  
實ノリマシタソウデ名ガ附イタト申スノデス  
一説ニハ領主カラノ差屬デ實ノワタトモ申シマ  
スガ矢張り天子様ノ仰セガ本當デアルト申シマ  
ス是レモ今ハ枯レマシタ惜イデス  
此處ガ向フ田ノ宮梨デコ、ニ栗枹ガアツタノデ  
ス不思議ナ枹デ一年中イッデモ雨ノ如クポトリ  
ノト滴リマスノデ名ヅケタリウデス領主ガ領地  
ヲ巡回セラレシニ炎天デ暑サヲ避ケンガ爲ニ此  
ノ木蔭ニ立寄り露滴リテ涼シサ限リナカリシカ  
バ此ノ名ヲ附ケタリトモ申シマス幾抱ハモアル  
大木デ明智光秀ノ目ニ止マリ福知山城ヲ築クノ

伊賀志



虎形のすし  
琴心

用杖ニセラレ惜シイトニハ斬ラレマシタ併シ天  
守ノ棟梁ニ用イタ丈ハ不幸ナカラ明ラメラレマ  
揺<sup>キ</sup>ス<sup>ス</sup>リ松コ、ラデハユスアルトヲユブルト云フ  
タノデス風ノ有ル無シニ拘ハラズ勤イテ耳タノ  
デス是レモ中々ナ大木デ名物デシタノニ明智ニ  
造ラレテ迹形モ無シニナリマシタ明智ト云ノ奴  
ハナンタラ情無イ奴デシヨウ  
阿須々岐神社 式内 天御中主尊高皇彦靈尊神  
皇靈尊ヲ合齋ス両側内ノ金ガ内ニアリ山ニ倚リ  
テ建テラレ一千又餘年前ノ古祠ナルト棟札コレ  
ヲ證徴スト云フ文ニ何鹿郡吾雀庄ノ文字アリ吾

雀ハアサ、キト訓ス然レバ延喜式ノアス、キハ  
是レカ上林村ノ室尾明神ヲ阿須々岐ト云フ知ラ  
ズ孰カ是孰カ非 森林密樹ノ下木柵モテ環ラセ  
衡門アリ鎖サル清泉滾々トシテ流過シ其ノ中ニ  
茗荷叢生ス 案内者曰ハク毎年舊曆正月三日ノ  
曉天ニ神官来ツテ門ノ錠ヲ外ツシテ入り流水ヲ  
涉リツ、之ヲ探レバ必茗荷ノ子アリテ生ズルヲ  
見ル他人ハ之ヲ見ズ ナント不思議デシヨウ  
先ヅ之ヲ本社壇上ニ采リ進ムルヤ之ヲ相圖ニ群集  
参詣人找レ一ニト競ヒ視ル平年ニ百人ハアリマ  
ス大晦日カラ来テ居ル皆々農事熱心ノ者バカリ  
中ニハ具ノ話ヲ聞キ物好キニ采ルモアル 早稻

阿須々岐志



内 部  
 茗荷 水 中 叢 生



茗荷

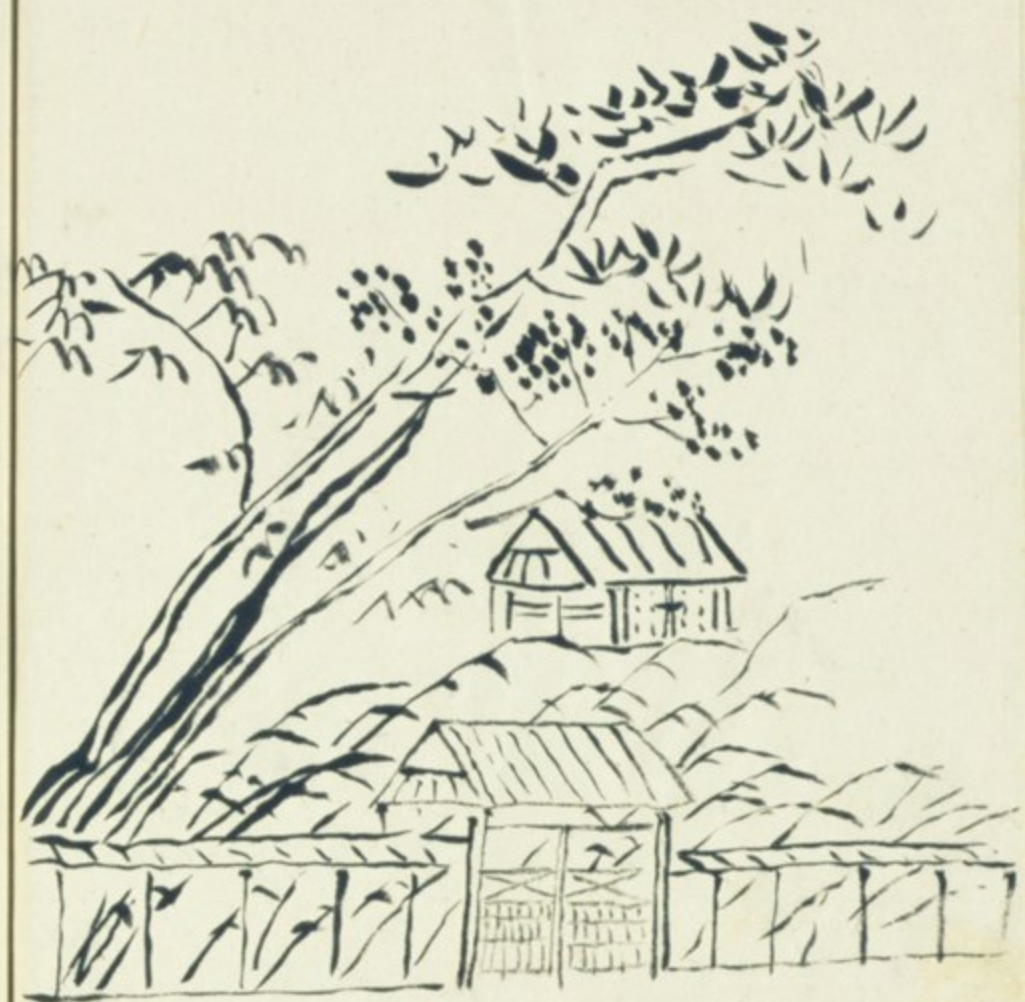
外 部



ヲ作ルガ好イトカ否アレテハ中手ジヤトカ扱  
 ハ晩稻ヲ好イト思フトカ 社壇ニ供ヘラレタル  
 茗荷ノ形相ヲ判断ラシマスノジヤ中々當リマス  
 ノジヤ田リテ百姓カラ尊シテ御茗荷サンナド稱  
 ハマス



か  
い  
ふ



篠田明神産ノ岫ニアリ周圍五間四面シノベ竹其  
ノ中ニ茂生ス本社舞殿末社鳥居アリ 案内者曰  
ハク此ノ御社ハ一番古イノデス年代ハ判リマセ  
又麻呂子親王サレノ御作りナサレタト云フヲ  
傳ハマス元慶三年十一月九日ノ甲子ノ朝ニ當リ  
慶雲ト云フ目出度イ雲ガ此ノ御宮ノ上ニ見エマ  
シタ歴史ニモ出テ丹マスデレヨウカナ 神サシ  
テスカ大己貴サシデス毎年正月ノ四日ニハ朝マ  
ダ暗イ内ニ御祭ノ式ガアリ神官ガ箒ヲ探シマス  
茗荷サント同シ様ニ採レマス三本取レマス第一  
ニ采レタノヲ供ヘテ衆人ニ見セマス是レガ早稲  
ノヨシアシヲ示シ第一ニガ中手ノヨシアシヲ示シ

野  
岐  
志



第三カ與年ノヨシアシヲ示シマス  
ソレハ小  
サイモノデス故ニオシノベサント云フノデス筈  
サントモ申シマスガ 前ノ御社モ此ノ御社モ最  
家ニ取リテ大切ノ神サシナノテ大切ニ致シマス  
前ノ方ノハ正月二日カラ泊マリ掛ケデ百姓ガ来  
マスシ此ノ社ノハ三日カラ詰メカケマス 左様  
年々大抵ニ百人位ト申シマス 左様宿屋トラハ  
無イノダ家々悉ク貸シ宿ヲ致シマス勿論夜通シ  
デス夜具ナド足りマセ又故焚火シテ温マリマス  
ノシヤ 左様辨當持参デスガ大根汁位ハ家々デ  
拵ハテ食ハセマス 宿賃トテハ取リマセ又皆心  
持ラシマスノシヤ 宿デスカ小指位ノ大サデス

之ヲ取リマスト筈サシノ御掃ガリト申シマス時  
トシテハ親指位ノモ出マス 見事ナ筈サシヤ  
ト喜ビマス 以上  
城址 小北石見守ノ居所 小北北川兩氏ハ高倉  
宮以仁親王ノ臣隸ナリ(吉見村高倉神祀記事参看)  
王ガ平家ヲ伐タントシテ成ラズ遁逃匿スルヤ  
二氏僂從扶持之ヲ助ケ以テ時ノ至ルヲ待ツ志成  
ラズ時機會セズレテ王ノ薨スルニ會フニ氏亦此  
ノ地ニ没ス後世高倉宮ノ祭式ニ二家ノ子孫禮装  
シ跣足ニシテ奔ルノ儀ヲ行フハ二家ノ人士拵  
袂シテ田ニアリ宮ヲ奉シテ宗家ノ二士及ビ士卒  
ノ来奔ヲ聞キ跣足ノマ、出デ迎ハ甲斐々々敷ク

母  
城  
志



モ王ヲ勞リ傳キ王ヲ慰メ奉リタル由緒ト云フ今  
ニ祭式ニハニ家ヨリ鏡餅ヲ供ス  
安永年間在屋十右衛門奇持者トシテ褒賞セラレ  
年齒五十三  
大字西方ニ牛疫起コリ數日ニシテ四方ニ蔓延シ  
百餘頭病ニ斃ル、モノ過半今明治四十二年ヨリ  
九十年前ニ當ル  
遲ノ岫ハ郡内ノ極寒園内ニアリ四尺ノ雪ヲ見ル  
丁往々コレアリ  
龍昌寺 曹洞宗 三百餘年前行脚僧宗休ナルモ  
ノ来リ古キ觀音堂ニ掛錫シタルカ道行堅固ナル  
ヨリ村氏ノ景慕スル所トナリ三十年後下町ト云

ハル所ニ一字ヲ創建シテ移住セシメ又其ノ後火  
災ニ罹レリ今ノモノハ百八十年明治二十八年宗瑞ナル  
僧ノ再建シタルモノ  
興隆寺 真言宗今ヨリ前ニ九百四十年前ニ空也  
上人来リテ宇寺尾ニ一寺ヲ設ケ堂宇棟ヲ連ネ覺  
ヲ竝バタルモ今ハ一字ノ藥師堂存在スルノミ  
慶長ノ頃ニ當リ田中石見守家次アリ武勇ノ譽高  
カリシ士ナルガ關東大坂ノ間ニ干戈起コラント  
スルヤ徳川氏ノ招ニ應セントシテ此ノ寺ニ詣テ  
武運ヲ祈リ不思議ノ勲功ヲ立テ褒賞ヲ得タルニ  
由リ全ク伊徳ノ加護トシ歸邑ノ後益々信仰ヲ厚  
クシ喜捨シテ以テ今ノ處ニ移シ増葺シタリト云フ



寶満寺 真言密教也上人開基 前寺ニ先ダツ一  
 年宇吉祥ガ平ニアリ村ノ北方ニアリ本尊毘沙門  
 ハ惠心ノ作ト云フ四百五十年前ヨリ衰運ニ墮シ  
 ニ百年前僧ノ英俊ニ由リテ再興ス  
 長松寺 大字兩側内ニアリ由緒詳ナラズ今ハ曹  
 洞宗タリ丹後ヨリ移シ僧元達ヲ中興トス

西八田村 大字 洲垣 下八田 上八田 岡安

七百石 古ノ八田郷

洲垣村ハ下八田下村等ヲ合セテ千三百四十九石  
 ナルガ下村ハ於與岐村二百石ノ内ニ屬ス而シテ  
 其ノ於與岐ハ町村制施行前ニ東八田ニ編入セラ  
 レタリ 岡安ハ大石共合セテ百九十一石 七百  
 石ハ讀シテ字ノ如シ皆元祿年間ニ定マリシ高ナ  
 リ 寛政地圖ニヨレバ此ノ地ヲ西股村トシ勢期  
 寺垣福田大日岩王寺左里平山等ヲ含有セリ西股  
 ト云フ字ヨリ出テタル名ナリ西股枝郷勢期トカ  
 西股内岩王寺ナド稱ヘタリ勢期高三百八十一石  
 寺垣西屋大安嶋間大日ヲ合セ百八十三石 福田

西八田村

西八田村志



ハ志賀村三千九百六十三石ノ内ナリシ而レテ平  
 山モ西股村千百六十五石ノ内ニアリシ  
 岡安ニ尋常高等小學校 村役場 生産株式会社  
 アリ 舞鶴要塞區域標アリ  
 式内郷社 嶋端神社 中筋ニアリ  
 勢期ノ岐路ニ西向ヒテ石路標立リ  
 右のぬくうち道  
 左むうの田んぼ  
 岩王寺ノ岐路ニ西向ヒテ石路標立ツ  
 右京山家下八田  
 左上林田邊  
 岩王寺 シヤクワウジト訓ム七百石ノ内ノ小字  
 トナレリ一寒村ノミ寺アルト石アルトヲ以テ人  
 ニ知ラレタリ而レテ寺ハ廢タレテ見ル影ナク石  
 ハ出テズシテ古ノ形ヲ存スルノミ  
 古刹岩王寺ハ岩王寺山ノ中腹ニアリ寺域千坪計

西八田村

本堂 仁王門 庫裡アリ 真言宗 本尊薬師如来  
 岩王寺石ハ硯材トレテ有名ナリ雍州府志ニモ之  
 ヲ嘉稱シテ出ツル少キヲ嘆ゼリ石坑ハ寺ノ後方  
 三町許谷底ニアリ久敷ノ廢坑トナリ居シヲ本年  
 四十二年 船井部八木村ノモノ再掘セシモ又休業セ  
 リ坑ノ深カ九二町ニレテ石脈ヲ失フ今一層深掘  
 セバ或ハ之ヲ得ルナラシト云フ石質堅緻ナルガ  
 黒色ノモノナラサレバ往々 靱脆ナリ一二分ヨリ  
 ニ寸三寸ヲ隔テ、白筋ヲ見ル是レ此ノ石ノ特色  
 ナリ製研家セ戸アリシモ只今一戸諏訪春吉ナル  
 モノアルノミソレサハ石屑ヲ拾撥シテ之ヲ製ス  
 ルニ過ギス坑脈ハ岩王寺村有ナリシヲ一個人ニ

西八田村 志



賣却シ其ノ一個人モ今ハ持業ナルノ様子ナリ  
評者曰ハノ銀紋アルヲ特色トスウルニ易キハ新  
坑ノモノニシテ佳ナラズ長門下ノ関若狹宮川最  
上甲斐兩畑辺江高嶋中品山城嵯峨肥前天草下品  
一説第一若狹ノ宮川肥前ノ田浦次ニ長門赤門山城ノ嶋  
川高尾鳴瀧高野川 愛宕 三河鳳鳴石 丹波石王寺 紀伊  
ノ琴浦 那知ノ黒石 白旗土佐ノ西寺衣石 島石 美作ノ高田石  
甲斐ノ兩端石 上野ノ櫻川石 下野ノ日光石 近江ノ高嶋石 常陸  
ノ小久慈石 豊甲石 河内ノ馬蹄石  
西八田ノ能勢傳石衛門ハ古來財産家トテ有名ナ  
リシケ領主山家藩ヨリ用金ヲ命セラル、時ハ之ヲ  
否マズシテ意シ村ニ課セラル、時ハ進ンデ調達

シ之ヲ村民ニ負ハシメガルヨリ領主ヨリハ年一  
年多額ノ課賦アリ而シテ能勢ノ實カヲ問ハバニ  
百石ノ米ヲ得ルニ過キ加フルニ維新前後不作  
歩續キタル時又モヤ用金ノ沙汰アリ遂ニ家ヲ滅  
スニ至リ又心アルモノハ領主ノ刻剥ヲ痛嘆セリ  
當時ニ百石位ヲ有スルノ家ハ郡中ニ一アリテ二  
無シト云ヒ財産家トシ云ハバ八田傳トカ能勢傳  
トカ云ヒテ指ヲ屈セリ領主ヨリハ献金毎ニ優待  
セラレ旅幣刀ヨリ常帶刀トナリ門玄關マデモ許  
容セラレタリキ  
をちリ ヲ麦粉ニ熟煮ヲ和シテ煉リタルモノヲ  
客ニ晋ム其ノ味佳ナリ中ニハ砂糖ヲ和シタルモ



アリ 往古ノ遺味ナリト云フ  
此ノ邊ハ諸大名諸旗下ノ領分入交リノ處ナノデ  
ス困難モ相應ニ多ク手数モ多ク掛カリマシツガ  
又ソレ相應ニ鉄儲モアリマシタ少々資本ガアツ  
テ領主ヨリ信用セラレテ居マシヨウナラ隨分ト  
旨イフガマリマシタ其ノ一例ヲ申シマシヨウナ  
ラバ先フ銀札ヲ領主ハ貸借シマスニ百匁二百匁  
一貫匁ナド自分相應ニ願ヒ出シマスト直ニ銀札  
場カラ貸シ出シテ呉レマス其ノ約束ニ九十匁替  
乃至九十四五匁替ト申シマシテ正金壹兩ニ對ス  
ル相場ヲ五テマシテ借り入レ夫レニテ商賣ヲモ  
爲シ融通ヲモ爲シ限月ニ至リマシテ正金ヲ以テ

西八田村

返金致シマス領主ノ役人ハ正金ノ額サハ見レバ  
免雨リトシテ無利子ニテ受取り證文ヲ返シテ呉  
レマス是レガ度々ニナリマスト先方カラ借ラン  
カト申ス位ニマデ信用シマス福知山札が此ノ  
邊ノ相場ガ下リマシテ百四十匁一兩替位ニナリ  
マス時ニ九十匁替ニテ借り入レタル札ニ引替ハ  
福知山札ヲ以テ福知山市場ハ参リマスルト矢張  
リ善キ相場ニテ九十匁ヨリ百匁或ハ百有餘匁ノ  
價値ガアリマスル故ツレ文ノ物品ヲ購入スルト  
ガ出来ルト云フ塩梅デ儲カルノデス今カラ想ヘ  
バ夫レ位ノ丁ハ小供デモ考ヘルト思シ召サウデ  
スガ昔ノ様ニ人知幼稚ニシテ金融ガ出来カネ福

丹波志



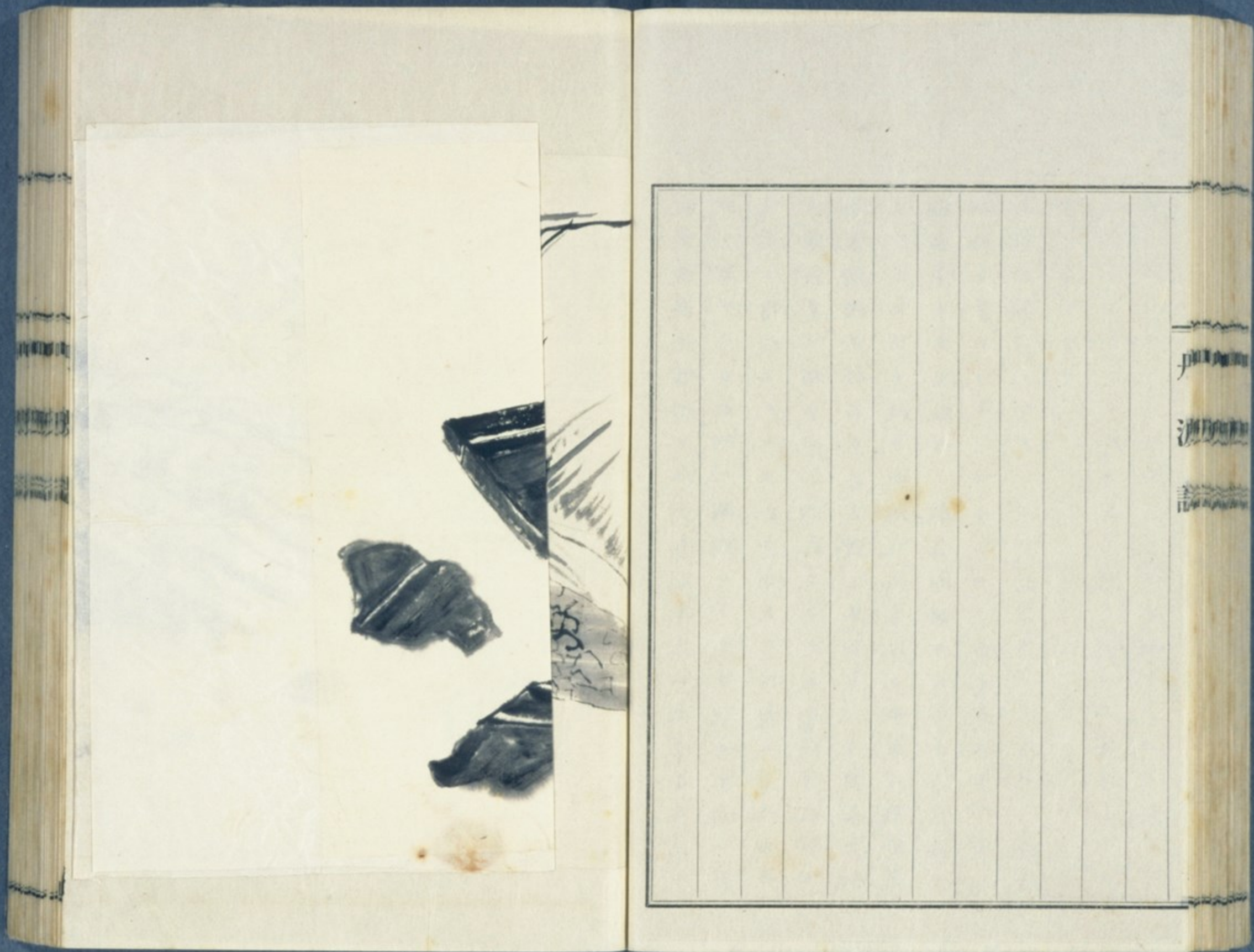
知山へ行くノハ外國へデモ出掛ケル如キ大ソ一  
ナ時ハマアコンナモノデシ夕序ニ年貢ノ一ヲモ  
申レマシヨウ  
年貢ヲ調進シマスルニハ道米ガ下リマス 道米  
デスカ是ハ一里一石ニ付ニ升ア、領主ヨリ下ル  
運送費ナシデス其ノ故ニ園部マデ持参リマスル  
ト一石ニ付キニ斗六升ヲ得マスル譯デスカラ當  
所ヲ采無シテ出カケ園部デ采ヲ買フカ又其ノ上  
ノ輕便方デ采手形ヲ采屋デ買ヒ之ヲ代官へ納メ  
ルノデス スルト具ノ道采丈ノ利得トナツテ百  
姓ノ懐ニ入ルノデス否出サズニ濟ムノデス 左  
様幾分ノ園部邊ガ高價デスカ夫ハ僅計リノ差デ

桃ノ成熟ハ當村ヲ以テ當郡中第一位ヲ占ムルモ  
ノト云フベシ太郎右衛門ナルモノ數十年前ニ大  
阪ヨリ移植シタルヲ初トシタルガ是ハ東八田ニ  
テノ一是ノ村ニテハ明治二十九年當村ノ佐古田  
卷太郎楯ヲ什シテ之ヲ栽ハ不利ノ地ヲ有利ノ地  
タラシメント謀リ數百株ノ苗木ヲ四方ニ勸誘栽  
植セシメタル效カハ數年ヲ出デズシテ各戸具ノ  
利味ヲ嘗ノツ、アリ主トシテ水蜜桃ナリ

西八田村

丹波志





京都府立総合資料館所蔵





京都府立総合資料館所蔵



東八田村 大字 梅迫 中山 上杉 安國寺  
於興岐 黒谷 眞黒谷 八田郷 東西ノ上下八  
田 和名鈔

上杉ハ上杉久保施寺福延近ノ舊四村ヲ合ハセ元祿  
高九百三十八石氏家三百石文久高九百六十石幕  
府直轄地謂ハ所ル天領ナリキ村内ニ四達ノ岐アリ  
北スレバ舞鶴ニ西南スレバ綾部ニ至ルベシ黒  
岩ヨリヒテ口上林ニ至ルベク於興岐ニ至ルベシ  
綾部新道明治二十九年ニ成ル行程ニ里ニ十四町  
城址五所ニアリ皆山ニ據ル  
小字高槻高三百八十一石三升一合六勺内百八十  
石山家藩領二百石柏原藩領別ニ一石三升一合六



夕同領

後嵯峨院第一ノ皇子宗尊親王征夷大將軍ノ宣蒙  
ラレ給ヒ録倉御下向ノ時御少錯ノ夕ノ内大臣高  
藤公ノ御末ナル勸修寺修理大夫重房御供ニ候シ  
上杉ノ莊ヲ賜ハリ左衛門督ニ任ズ子孫關東ニ住  
シ武家トナル元弘建武ノ後ニ至リ尊氏ノ三男左  
馬頭基氏録倉管領トナレル時上杉家其ノ外戚ノ  
故ヲ以テ世々其ノ政ヲ執レリ此ノ地ニ足利氏ノ  
故蹟アルハ之ニ由ル  
於奥岐ニ小字下村大脇村野脇村市瀬村見内村大  
股村ナドアリテ高二百石谷継殿助知行所ナリキ  
上杉ヨリ一里アリテ山間ノ僻邑ナリ 於奥岐ノ

東八田村

太平次ガ妻孝行ヲ以テ賞セラル寛政三年 稲仙  
嶽 於奥岐ノ東北ニ聳ユ頂上ノ一社ハ木花咲耶  
姫ヲ祭レリ一千餘年前ノ鎮座ニシテ神徳山勢ト  
共ニ高シ元明天皇和銅年間ノ創立火災ニ過ヒ嘉  
吉年間吉田義績ナルモノニ由リ經營セラレ陰曆  
四月八日ヲ入山ノ期トス登臨者ハ數日前ヨリ齋  
戒シ婦人ハ禁セラレタリ今ハ然ラズ福知山ヨリ  
緩部ニ赴ク途上又ヒ和知川沿道到ル處仰キ見ル  
ベシ  
八代神社 主神宗任 奥黒谷ニアリ 黒谷ニ産紙アリ  
石標二個并立ツ (從是南丹波國何鹿郡) (田邊橋アリ二里)  
安國寺ニ安國寺アリ此ノ寺アルヲ以テ此ノ村ノ

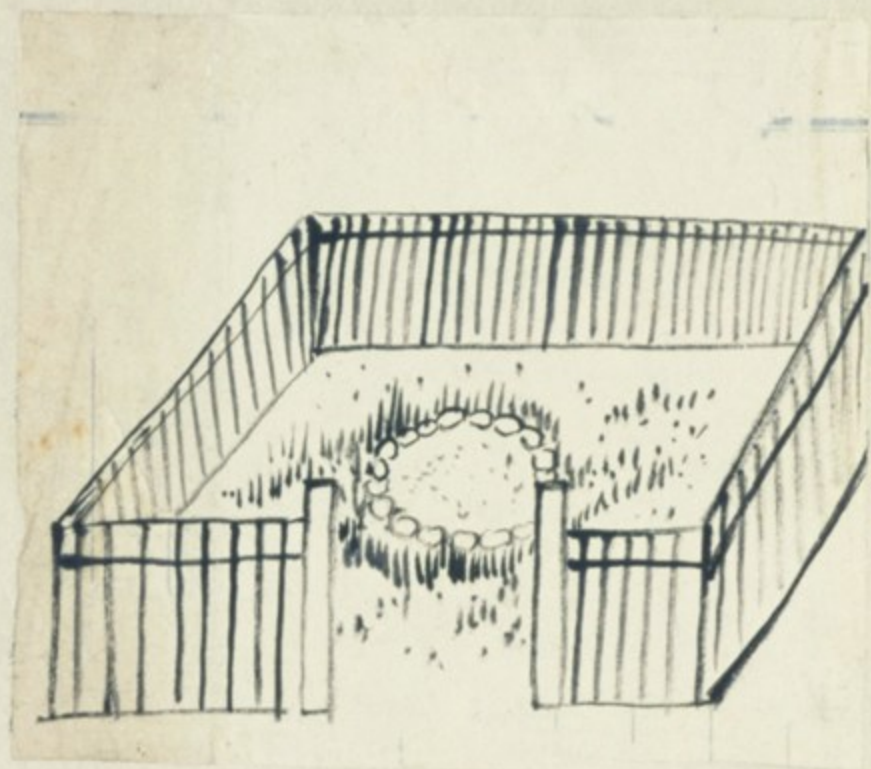
丹波志



名アリ寶物ニ富ム山号景法併殿七間四面 本尊  
釋迦脇立文珠普賢而シテ地藏具ノ右ニアリ天菴  
禪師ノ像足利十二代ノ位牌ヲ安ス  
鹿苑院殿准三宮大相國天山大禪定門名靈（等持  
院殿贈一品大相國仁山妙義大禪定門名靈以下畧  
ス右ハ室所將軍初代二代ト云フ五輪塔本堂ノ側  
ニアリ尊氏ヲ中トシ義滿ヲ左トシ清子ヲ右トス  
合シテ三基ナリ開山堂ニ間半ニ二間天菴ハ此ノ  
開山ニシテ鎌倉建長寺ノ住僧ナリ此ノ寺が國々  
ニアル衆多安國寺ノ首位タルヲ以テ高德ノ聞エ  
アル禪師ヲ屈指シタルナリ 本尊三佛ハ八百年  
以上ノ古作ニシテ文一文四尺五寸アリ 地藏ハ尊

氏ノ母ガ懐胎ニ際シ武勇ノ名譽アラシ男兒ヲ授  
ケ給ハト一心ニ起請セシモノト云フ百六十年前  
明治二十九年ノ秋  
著者訪問ノ時ヨリ流失シテ行衛不明ナリシヲ後日土中  
ヨリ偶然ニモ掘出シタリ是亦希代ノ名作ト云フ  
清子ト云フハ尊氏ノ母ニシテ上杉村ノ領主藤原  
頼重ノ女ナリ足利氏ニ嫁シテノ後モ尊崇セシ所  
當時ハ光福寺ト稱シ此ノ地藏ヲ祭レリ尊氏ノ志  
ヲ得ルニ及ビ改造シテ安國光福寺ト稱ス後年衰  
頹シタルヲ京都東福寺ノ桂岩和尚再造シ又洪水  
ニテ流セス今ヤ一字存スルノニ曩ニ安國寺ノ建  
設アルヤ大概右馬頭奉行トナリテ之ヲ建設シ曆  
應四年ニハ全國ニ及ビ寺數六十四アリテ日々護





摩ヲ焚キ國家ノ安平ヲ祈ラシム大院小院堂塔相  
 摩シ庫裏浴室相並ビテ壯觀ヲ極メ讀經ノ聲ハ鐘  
 磬ト和シ佛法中興ノ時ニシテ聖武天皇ノ勅願ナ  
 ル國今寺ヲ模造シタルノ觀アリシトカヤ  
 門前向フテノ右手ニ尊氏生母ノ邸地ト云フガア  
 ル初湯井ノ右ニ當ル井ハ民家ノ軒端ニアリ木柵  
 コレヲ環ル水常ニ盈テ濁ル鍋ル、モノアレバ  
 榮ルトテ掃除スル人サ、無ク荒レニ荒レタリ



安國寺村中村ヲ合セ高千六百七十石山家藩領ナ  
リキ代官ヲ置キ政刑ヲ處セシメタリ  
停車場前ニ舞鶴要塞區域表アリ許可無クシテ  
要塞地帯内及ビ其外方三千五百尺以内ニ於テ水  
陸ノ形状ヲ測量撮影模寫スルヲ禁ズ犯シタル  
モノハ法律ニ依リ處分セラルベシ陸軍省  
梅迫ハ本郡ノ中部ニ位置シ停車場アリ郵便局アリ  
物質運送會社アリ旅店高店畧具ハル古時ハ本  
陣モアリテ大名旗下ノ往還ニ便シ問屋ト稱スル  
モノアリテ馬夫荷下ノ取扱モナセリ當時丹後ノ  
田邊藩侯ノ參觀交代スルヤ當所ニテ中食シ山家  
ニテ一宿シ草尾峠ヲ經テ檜山ニ出デタリ



石田神社ハ當地ノ主神トスル清和天皇ヲ齋キ奉  
レリ舊曆九月五日ヲ祭期トス高森ト呼ブ森アリ  
高倉神社ノ寶物ヲ埋メタルニ塚ヲ存ス 吉見村  
ノ石田神社參者  
愛宕神社ハ街道ヨリ五町ノ山中ニアリ祭日ハ舊  
曆六月廿三日ナリ  
舞鶴街道ハ於興岐川ニ沿フテ舞鶴ニ至ル迄相離  
シズ一名伊佐津川ト呼ブ  
於興岐ノ下村高千二百四十一石九斗八升ニテ山  
家領ナリキ黒谷村ハ高二十五石ニテ谷縫殿助知  
行ナリキ  
施福寺 東勝寺西勝寺ノ古名刹廢絶ニ歸シテ集

寶山施福寺興コル開山ヲ空也上人トス 本尊觀  
音ニレテ作佛ナリ山門ノ仁王ハ左甚五郎ノ作ト  
テ今ニ保存セラル其ノ門ナキヲ以テ本堂ノ内ニ  
容ル釋猛ノ相ハ看ルモノヲシテ覺エズ聳然タテ  
ニム荒廢ソノ極ニ達シ住僧ヲシテ堂後ノ一隅ニ  
寢食セシム數家ノ檀越協議シテ僅ニ一僧ニ供養  
セシム真言宗ニシテ本山ハ高野山ナリ覺鑊ノ畫  
ケル不動尊一軸智證大師及ビ惠心僧都ノ書畫ヲ  
貯フ覺鑊ハ崇徳天皇ノ大治四年ニ真言新義ヲ創  
議シタル名僧ニシテ姓ハ平氏將門ノ族姻ナリ康  
治二年年四十九ニシテ逝ス京都智積院ニ五大尊  
ノ繪幅アリ名手ナレド遺品少シ

叫皮志







此ノ林ニ農林學校アリ村民ニ種苗ノ分與ヲナス  
特産物試作場モアリ蠶種ノ改良ヲ爲シ之ヲ村民  
ニ分ツ造林業ヲ興レ農談會品評會等具ハル  
ハ村長山室龜太郎ノ經營ナリ  
八田梨 其ノ沿革ヲ繹スルニ小宇高槻山室龜太  
郎ノ父某園藝ヲ好ミ常ニ果物蔬菜ノ珍奇ナルヲ  
集メテ之ヲ栽培シタルガ龜太郎其ノ家庭ニ生育  
シテ父ト愛好ノ趣味ヲ同フシ共ニ其ノ蒐輯ニ勉  
メ從フテ得レハ隨テ栽培シ梨樹ノ如キハ日本  
種ノミニテモ百七十餘種ヲ有ス事殆レト好奇ニ  
類スルモ其ノ目的タルヤ一優良種ヲ得テ弘ク之  
ヲ栽培シ之ヲ獎勵シ地方ノ特産物タラシメント



欲スルニ在リ其效明治二十六年ニ顕ハレ一佳品  
ヲ得コレニ八田梨ノ名ヲ附シラ世ニ公ニスルニ  
至リ今ヤ四十二年一地方ノ一大特産ナリ形扁圓ニ  
シテ一個ノ重量二百及以上ノモノアリ肉ハ白色  
緻密ニシテ多漿ナレヒ日味ノ濃厚ヲ欠ク仁果甚  
微小ニシテ痕跡ヲ止ムルノニ酸味無ク貯ヘテ六  
七月ニ至ルベシ  
高槻蘿蔔  
梅迫  
古墳多數アリ前方後園ノモノ皆小塚ナリ石室ア  
リ祀部土器ヲ藏セシガ今具ノ多クヲ小學校ニ保  
存ス

上杉家ノ事トモ  
上杉ハ山間ノ僻邑ナルガ鎌倉ノ管領ノ所領トナ  
リ且ツノ苗氏トナリタルヲ以テ名ヲ知ラル由リ  
テ其ノ概畧ヲ左ニ叙ス  
源頼朝霸府ヲ鎌倉ニ設ケ幾許モ無クシテ其ノ裔  
絶エ北條氏代リテ天下軍國ノ事ヲ掌リ攝家ノ子  
ヲ京都ヨリ申シ下シテ主將トシ表面コレニ倚事シ  
其ノ實權ハ自家掌中ニ收メ主將ニシテ已レカ意  
ニ叶ハザレバ之ヲ去ル弊履ノ如シ時頼ノ如キ公  
正ヲ以テ天下ニ稱譽セラル者猶且ツ毎カリ建  
長四年二月征夷大將軍藤原頼嗣ヲ廢シ後嵯峨天  
皇ノ御ニ男宗尊親王ヲ迎ヘ主トス親王御下向ノ

母皮志

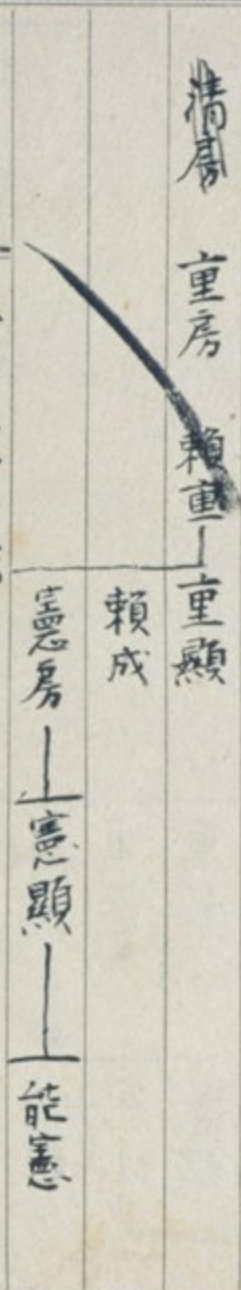


時御々錯トシテ内大臣高藤ノ末裔勸修寺重房御  
 供ニ候又上杉ノ庄ヲ賜ハリ修理大夫上杉重房ト  
 名乗リ後左衛門督トナル姓ハ藤原贈太政大臣高  
 藤ニ十二世ノ裔(初式乾門院裁トナリ)子孫関東ニ住シ  
 武家トナル元弘建武ヲ経テ尊氏ノ三男左馬頭基  
 氏管領トナルヤ上杉家其ノ外戚ヲ以テ世々其ノ  
 政ヲ執ル此ノ地ニ足利氏ノ由緒故蹟アルハ之ニ  
 由ル

上杉教朝ハ氏憲入道禪秀ノ第四子ナリ禪秀初名  
 氏憲朝宗ノ子右衛門佐ニ任テ鎌倉管領滿兼薨ジ  
 子持氏襲グ氏憲執事タリ志ヲ得テ職ヲ退ク上杉  
 憲基代リテ執事タリ氏憲兵ヲ募リ足利滿隆ト足

利持仲ヲ擁立ス應永二十三年十一月京都室町ノ  
 御啟書到リ持氏ヲ援ケシム持仲氏憲ノ矢離散ス  
 氏憲及リ鎌倉ニ入ル十二月十日氏憲滿隆持仲雪  
 下僧舎ニ自殺ス教朝ハ父禪秀自殺スルヤ潛ニ逃  
 レ京都ニ入り康正二年丹波ヨリ出テ十二月鎌倉  
 ニ入り足利政知ノ執事トナル寛正二年疫病天下  
 ニ流行ス救朝亦感染シ心身爲ニ悩悶シ遂ニ狂乱  
 シ自ラ刀ヲ拔キ腹ヲ割キ死ス

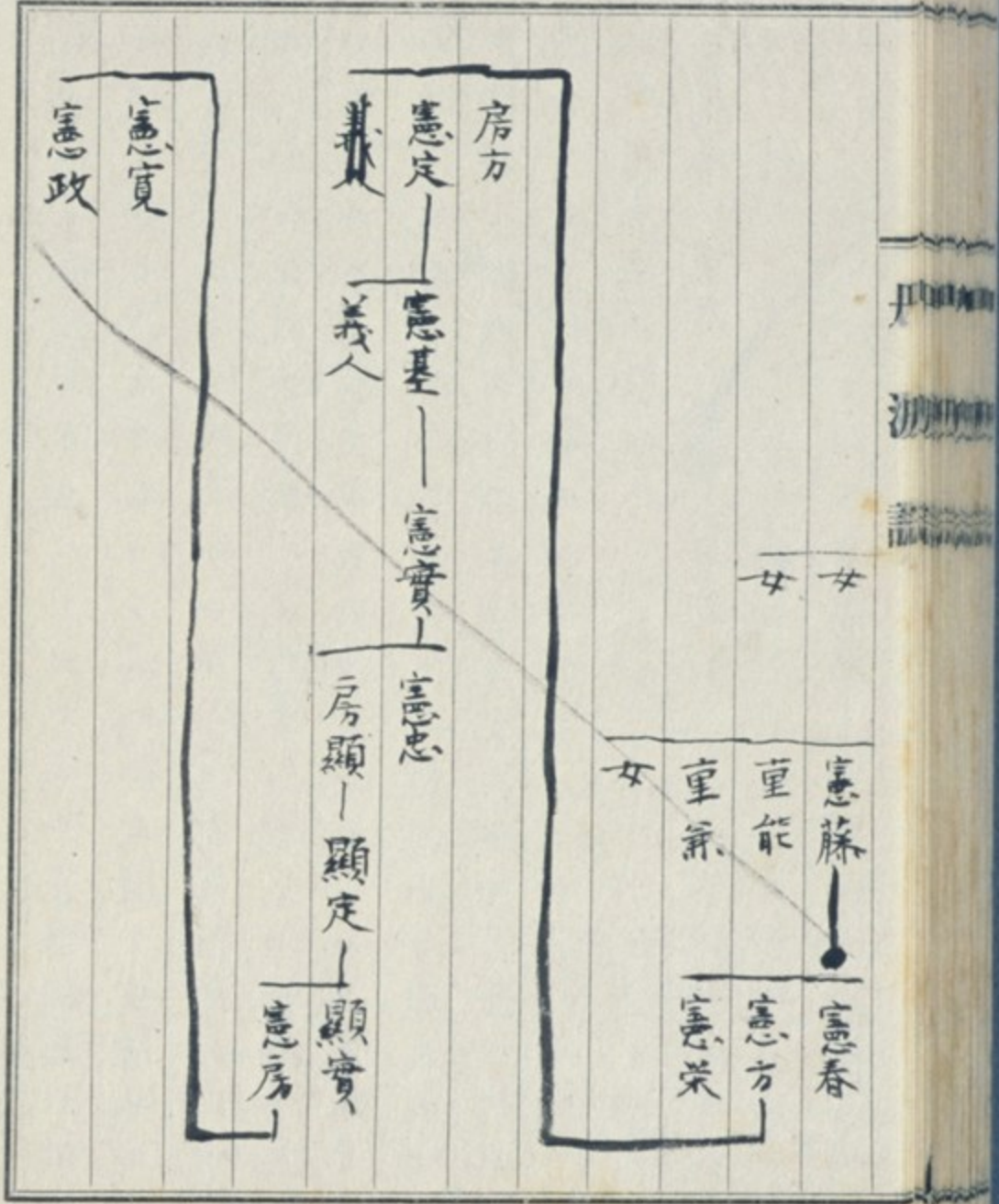
上杉藤原氏系圖



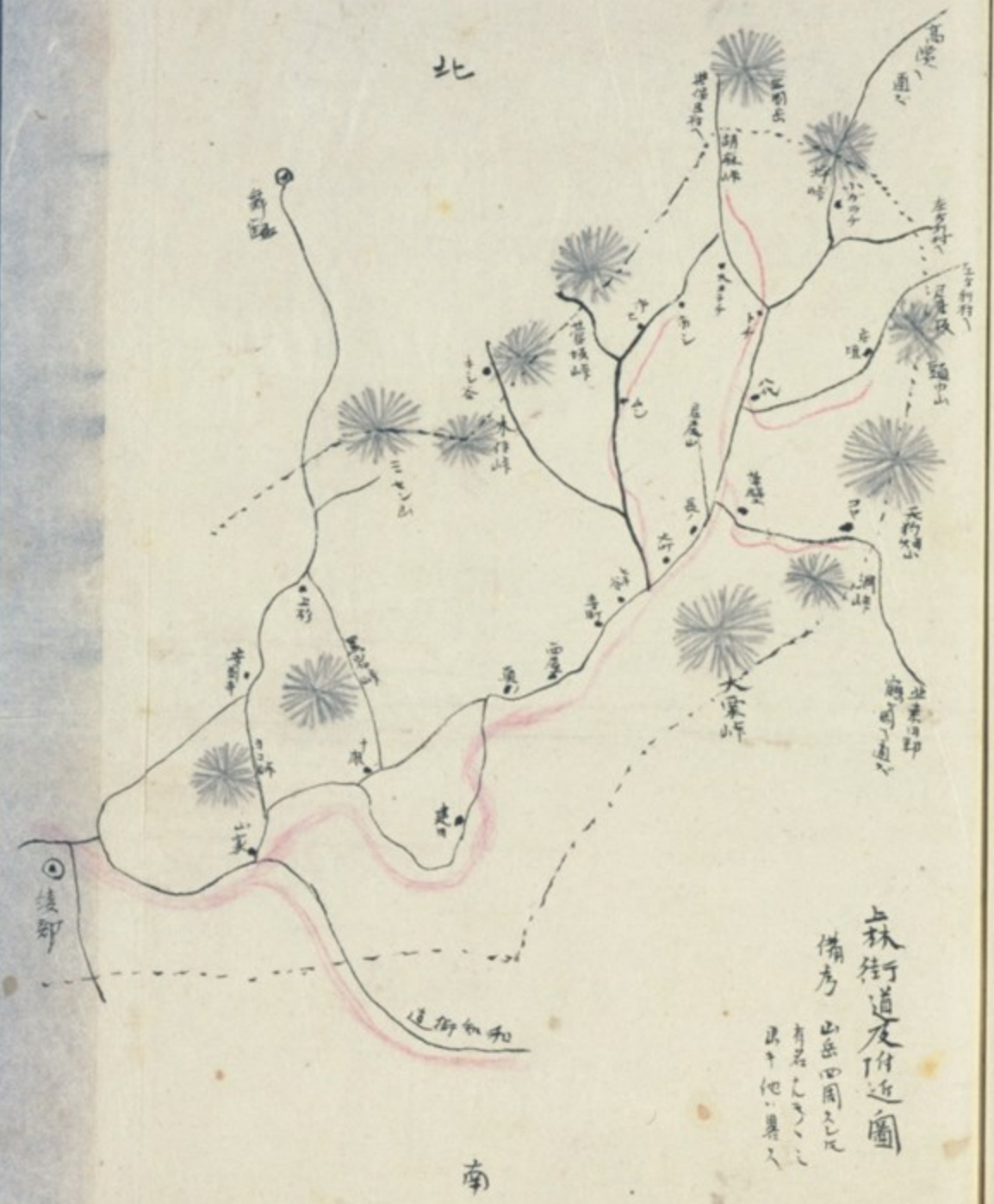
子  
 史  
 志



手紙  
 宗木三上







京都府立総合資料館所蔵



上林村

部落無レ此ノ外ニ小部落舊アリ下文高帳ニ出ス	十倉伊根ノ合併ニタルモノニテ此ノ二個部ハ小	口上林 建田部落アリ 十根部落アリ 十根ハ	部落ヲ合ム 睦合部落アリ 真野小部落ヲ合ム	合ム 八津合部落アリ 日置谷 寺町西屋ノ小	落ヲ合ム 五津合部落アリ 睦志大町ノ小部落ヲ	中上林ノ内 五泉部落アリ 市志市ノ瀬ノ小部	ム	小部落ヲ合ム 睦寄アリ 草壁長野ノ小部落ヲ合	ノ小部落ヲ合ム 故屋岡部落アリ 古和木八代ノ	奥上林ノ内 老富部落アリ 市茅 朽 大唐内	上林村 大字 奥上林 中上林 口上林
-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	------------------------	-----------------------	---	------------------------	------------------------	-----------------------	--------------------

丹波志



一村ニシテ五十一部落ヲ有スルモノ恐クハ全國  
 ニ於テ此稀ナルベシ  
 古來此ノ一帯ノ地域ヲ上林谷ト稱シ郡ノ東北部  
 ナル三國嶽養老山脈蜿蜒トシテ西南山家ニ至ル  
 ノ間ニ存在スル長斜面ノ區分トス其ノ大サ殆ン  
 ト郡ノ三分一ヲ占領シ延長九里ノ路程アリ山家  
 ヨリ口上林ニ至ルノ細口地ハ路狹クシテ下ル坂  
 ナリ古來七里谷ト稱スルハ調査未了ナリシナラ  
 シ山又山谷更ニ谷上林川コレヲ貫流ス  
 上林川 其ノ源養老山中瀟々ノ泉谷間々々ヨリ  
 集合シ老富森林中ヲ穿テ幅一二間トナリ五六間  
 トナリ遂ニ六十間ノモノトナリ八九里ノ長流ト

上林村

ナリ灌溉養田ノ便トナリ又大災害ノ根トモ爲ル  
 明治二十九年ノ慘狀ハ著者ノ目睹ニタルモノ流  
 失家屋數十百戸田畑ノ上沙磧モレ不毛ノ地トナ  
 ル福知山ノ洪水實ニ其ノ慘原ヲ爲セリ  
 全谷高七千零七十三石ナリレ 現今地價二十七  
 萬三千二百圓  
 産物 米麦大豆 蕎麥 甘藷 馬鈴薯 綿 烟草 藍 栗  
 椎茸 筍 竹 木材  
 土根ハ土地平衍ニシテ米穀ノ産裕ナリ山家藩主  
 ノ分家谷主計ノ知行ナリキ之ヲ除ケバ中上林ノ  
 部落ニ小々ノ田野アルノミ

上林村  
 上林村  
 上林村



上林村

谷主計家祿二千石定府トシテ江戸ハ參觀交代セ  
 不常ニ江戸ニアリ知行所ノ租稅ニ食ニ幕府ニ仕  
 フコハニ陣屋ヲ置ケリ人家百七十餘戸アリ古稅  
 法ニテ免六々ナリ製絲場アリ人カ車一輛アリ衆  
 人ノ少ナキニ因リ(明治十八年)上杉ニ赴ク途中ニ黒  
 石峠アリ峠ノ中程ニ要塞區域表アリ製絲場ハ宇  
 建田ニアリ資本金貳千四百圓ヲ以テ明治二十九  
 年六月ニ創立ス 宇十倉ニ四通ノ岐路アリ東南ス  
 レバ和知ニ南行スレバ山家ニ北行スレバ施福寺  
 ニ東北スレバ上林谷ニ赴クベシ十倉ニ長者ガ垣  
 アリ山家ノ山家屋ガ別荘ニテモアリシモノカ又  
 ハヨリ古キモノカ 村役場アリ巡査派出所アリ

上林村志





小學校アリ小商店アリ 上林谷ノ口ニシテ物品ノ  
 小集散地ナリ山家ハ西南ニ面シテ行ク  
 式内郷社 阿牟奈備神社ハ路傍森林中ニ鎮座ア  
 リ社殿ノ彫刻古雅ニシテ持瓢ノ仙人ヤ象鯨ノ仙  
 人アリ未社三棟コレニ添フ 或人ノ云フニハ阿  
 牟奈備ハ珂牟奈備ニテ神南備トモ書ケルモノナ  
 ルベシ千載集主基萬神樂歌ニみしまゆふ肩よと  
 リウケ沐念ひ乃山の神をうさしをそするトアリ  
 丹波国名所歌トシテ出デタルモノニ首アリ柏原  
 町ノ小南山ヲレナルカ氷上郡柏原町ノ部ニ出ケ  
 ス就キテ見ヨ 本社主神天下春神 小字ヲ大宮  
 ト云フ昔ノ仰テ地名ニ遺セリ

上林村

中照山日圓寺 一才八分ノ聖觀音ヲ本尊トス一  
 千年前ノモノト云フ丹波三十三所ノ一ナリ  
 和知街道ヨリヨリ岐レ武吉福田多田ヲ經テ行ク  
 ベシ 赤坂ヲ越エ安國寺ニ達スルモノハ北行ス上  
 杉ニ往クノ道ナリ 八津合ニ福知山區裁判所出  
 張所アリ 小學高等小學校アリ明治三十年以前  
 ニハ上林三村ノ高等小學生束集セリ今ハ孰レモ  
 併置スルヨリ當村ノ生徒ノミトナレリ 村役場  
 アリ駐在所アリ旅亭休亭商店アリ小山ニ陣所迹  
 アリ旗士藤懸伊織ノ居所ニキ  
 古城跡アリ上林下慈守ト高田豊後守等前後居住  
 シタリト云フ 石橋城址ハ風景佳シ 小字寺町

丹波 史 志



ハ君尾山ノ末坊多カリシ所 宇西屋ニ八幡宮アリ  
 明智光秀ノ臣ナル仁木久兵衛郡代トシテ来リ  
 社壇ヲシテ荒廢ニ歸セシメタリ今ハ小寺ニ移ス  
 宇睦志ニ鎌倉權五郎景政ノ墓アリ其ノ家モアリ  
 テ系圖ト強弓ヲ傳フ 八津合睦志ノ間二十餘町  
 平野ニテ穀菜ニ豊ナリ女子能ク勞動ス 五合ノ  
 大町ニ畑川橋ヲ架ス十六間 中上林ノ枝谷ナル  
 市ノ瀬ヤ睦志山間ノ水ヲ併セテ畑口川トナル是  
 ノ橋ハ其ノ末流ニ架セラレタルモノ橋ヨリ一町  
 下ニシテ上林川ニ入ル橋端ニ君尾山道ノ左石アリ  
 裏坂ニテ狹斜行キ易カラズ表坂ヨリスルノ易  
 クシテ樂ナルニ如カズ表坂ハ故屋岡ニアリ

五合距 京都元標二十四里二十六町十八間八  
 分 奥上林故屋岡一里二十町五十間

上林谷惣高七千七十三石 文久年産

馬場村二百二十七石一斗八升 藤懸監物知行

山田村百十三石六斗九合 舊百四十石 同

石橋村百八十五石六斗二升 同

瀬尾谷村六十石八斗七升 同

日置殿村二百七十五石一斗五升八合 同

西屋神谷村二百六十石八斗七合 同

朝原村七十七石三斗七升一合 内 藤懸伊織知行

三十九石 三十八石三斗七升一合 藤懸監物知行

弓削村百九十八石八斗 藤懸監物知行

上林村



上林村

市野瀬村	百石	舊百二十石	同
水梨村	五十七石	市志村夫	同
辻村	五十二石二斗四升		同
虫村	五十六石八斗六分七合	藤懸監物知行	
清水村	百一十一石七斗四升	園部領	
遊里村	百三十九石九斗五升五合	同	
真野村	百五十五石九斗六分	同	
小田村	九十六石八斗八分	同	
引地村	百三十三石七斗七分二合	同	
小山村	二百六十一石	藤懸伊織知行	
井脇村	百三十三石六斗三分	同	
細田村	百三十一石九斗一合		

志古田村	百二十九石七斗一分	藤懸監物知行	
鳥埴村	百五十八石二斗二分五合	同	
有安村	三百四石	同	
大町村	三百三十三石三斗三分	同	
長野村	百三十九石二斗一分一合	園部領	
山内村	百五十四石一斗	同	
河原村	百三十七石八斗五分	藤懸伊織知行	
小中村	百三十七石五斗五分	山家領	
八代村	九十九石三斗七分五合	藤懸監物知行	
強木村	二百六十一石二斗一分	同	
於見谷村	二百三十五石一斗五分	山家領	
枋村	七十二石三斗二分	同	



内 五十五石二斗  
七十六石七斗一合

念道村百二十五石七斗三合

藤懸御所  
藤懸監物知行所

武吉村百六十二石三斗四分九合

同

忠村百五十五石四斗二分八合

同

十倉村五百八十六石三斗八分三合

共 境村中村

谷内藏丞知行

賀新村百七十石

權現谷村光野村市茅野村大唐村合

大唐内小唐内  
二百三十六石

畑村百三十四石

伴肺村同

北嶋村百四十一石

藤懸家臣ノ昔新

私ハ御見懸ノ通り老體ヲ以前ノ事ハ何モ角モ忘  
 レマレタテスカ御領主様ノ御親類様著者云フト承リ  
 マシテハ内部モ能ク御承知ト存ジマス故別段申  
 上ケマス丁モ御坐リマセヌガ御尋ノ丁文ハ申シ  
 上ゲマシヨウ 御家ハ矢張り赤目坂様赤目坂ノ藤懸ヲ云  
 不御尋ノ部ニ出ス  
 ト御同様ヲ大藤懸様ノ中上林村  
 ノ部ニ出ス御分家ヲ赤目坂様  
 ト御高ガ五百石デゴザリマス カ赤目坂ヨリ此  
 ノ小山ノ方ガ土地ノ亘敷キ文此ノ御家ノ方ガ御  
 實入ガ宜シウゴザリマス赤目坂ノ土地デハ四掛  
 ケ位デシタガ此ノ小山ノ方デハ六掛ケ位ニハナ  
 リマレタ様ニ覺ヘテオリマス 左様デス御主人

上林村

上林村志



仔織様ハ赤目坂様ノ御勤メデ御本家様ト早フカ  
ラ官軍方幕府ヨリ朝廷方ニナルヲ勤メト唱  
タルヲ誤ラテ官軍方ト云ヒシナリニ御爲リナサレマシ  
タノデ本領安堵ニナリマレテ此ノ所ニアノ通り  
御屋敷ガ出来マシタガ間モ無ク京都ノ御引越シ  
ニナリマシタ仔織様ハ御勤メ嫌ヒノ御遊ヒ好キ  
ナノデ御身代ガ持ラマセマ 江戸ノ御旗本時代  
デモ始終小普請入り計リナサレマシテ御勤メ一  
分ノ御遊ビ九分ト云フ情ケ無イ御士様デゴザリ  
マシタ其ノ譯デ此ノ處ノ百姓カラ納メマスル御  
年貢ハ代官ガ賣拂ヒマレテ代金ヲ江戸ニ送りマ  
スルト其ノ過半ガ小普請金ト云フモノナリマシ  
テ御勘定奉行ノ手ノ廻ハリマスルト夫レガ公儀

上林村

幕府ノ諸造作ニ使用セラレテ仕舞ヒ殿様ト遊ンデ  
バカリ居ラツシヤルノデス左様御勤メ一今ト申  
シマスノハ大禮ノ時ニ登城ナサルノト小普請奉  
行ト云フ支配役人方ハ年頭暑寒ノ見舞ヤ所届ケ  
デアツタ様ニ存ジマス 本供ト申しマシタ所ガ  
馬ノ口取ガ一人ニ侍ガ二人ト槍持一人挾箱持一  
人袋持一人デス袋持デスカ夫レハ布ノ大袋ヲ後  
ノ方カラ背負フテ行クノデス御大名デハ合羽籠  
ニスル所デス殿様ノ百番ナドハ挾箱ニ入ツテ居  
マスカ供人ノ小荷物ハ入レラレマセヌ故此ノ袋  
持ガ持チマス袋ノ着サツタ杖ヲ持ツモノガ一人  
居ルノモゴザリマスガ小身ノ御方々ハ此ノ袋持

上林村  
史



ニ持タセマス 杖デスカ是レハ御目見、以上ト  
 ムフ丁ノ別カル目印シデアルソトデス 奥様デ  
 スカ何シデモ番町アメリノ小サナ旗本ノ娘サン  
 テシタト承ワテキマス 此ノ邊デ思フテ耳マシ  
 タノトハ大層ナ相違デ御本家ヤ赤目坂様トハ大  
 違ヒデ夫レハ下品ナモノデ茶屋(座所)仲居ミタ  
 様デス ナセカト申シマスト具ノ遊ヒ九分トナ  
 リマスノデ遊ヒ仲間ノ御附合デ自然トソノナル  
 ノデゴザリマスソノ只今ハ京都ニ御夫婦様ト  
 モ御住居デスカ女髪結ヲナサレテ夫レデ生活ヲ  
 シテゴザルソトデス

壹鞍神社 主神此花咲耶姫 昔年上林川ノ上流

鞍岩ナル所ニ夜々光明ヲ放ツヲ以テ斯ハ神明ノ  
 所爲ナリトシ其所ニ一社ヲ建テ之ヲ壹鞍明神  
 ト名ヅケテ齋キ祭レルヲ三百年後渡邊九郎左衛  
 門ナルモノ夢想ニヨリ之ヲ今ノ地ニ移轉シ茲ニ  
 初メテ一村ノ氏神トハナレルナリ

永祿六年和久左衛門ノ領知トナル 山家ノ部ト

天田郡福知山ノ部ニ出ス

中上林 眞野ノ八幡神社 以仁親王從者十二士  
 中ノ佐々木次郎季重ハ近江國眞野莊ノ者ナルガ  
 親王ニ隨ヒ敗軍ノ後コノ地ニ僻居シタリシガ軍  
 中ニ在リテ守護神トシテ身ヲ離サバリシ八幡大  
 神ノ小像アリシヲ其ノ裔孫ナル福井某ガ新ニ宮



ヲ築キ奉祀シタルモノ  
 八津合ノ西屋ニ八幡神社アリ 五百四十年前ノ  
 創立ニミテ名高キモノナリシヲ明智光秀ノ臣ナ  
 ル仁木久兵衛ノ敗壞スル所トナリタルヲ二百三  
 十年前近江國八個村ノ人民ノ醸金集力ニヨリ今  
 ノモノ成レリト云フ  
 日置谷ノ神明宮ハ具ノ元始ヲ詳ニセズ此ノ地方  
 人民相議シテ五穀ノ豊穰ヲ伊勢ニ祈願シテ遂ニ  
 上林谷ノ中央ヲトシ茲ニ皇太神ヲ奉賽セルナリ  
 ト云フ  
 大栗峠ハ八津合ヨリ東南ニ方リテ見エ上林谷ヲ  
 横キル道ニシテ之ヲ越エテ船井郡北桑田郡ニ行

上林村

五泉ノ谷一名畑川谷コノ谷ヨリ流ル、畑口川ハ  
 五津合ニテ上林川ニ入ル  
 木住峠ハ丹後加佐郡岸谷、通スル山路ナリ中上  
 林ノ人ニシテ舞鶴、行クハ此所ヨリス  
 若宮神社 睦志ニアリ今ヨリ八百年前ノ創建ニ  
 ニシテ鎌倉権五郎平景政ヲ祀ル景政ノ義家ニ從  
 フテ奥羽ヲ征スルヤ勝利ノ後ニ當地ニ来リ遂ニ  
 死ス人之ヲ崇メテ神トセシナリ子孫農民トナリ  
 テ相續キ其ノ系譜ト強弓ヲ藏ス  
 谷ノ口マデ凡一里十町  
 加佐郡界菅坂峠マデ十町

加佐郡界菅坂峠マデ十町  
 志



大唐内マデ凡二里  
睦寄ノ長野ノ五標

君尾山ノ本堂ハ三十町

中上林ハ幕府ノ旗士藤懸氏ノ治所ニシテ戸數七  
百七十餘人口三千九百餘ヲ容レ田地三百六十六  
町歩畑地百六十町ヲ有ス人民農重ニ衣食シ收穫  
米平年八千餘石アリ兼業トシテハ養蚕薪炭菜園  
ニ従事ス二十九年ノ洪水ト三十年ノ大火ニテ字

上林村

城下ハ舊觀ヲ失ヘリ古城アリタルヲ以テ今ニ城  
下ノ名アリ

銀札九百五十三圓〇七錢八厘ノ藩債ハ明治初年  
京都府ヨリ太政官札ニ交換セリ龜山藩札ノ發行  
額九萬七千餘圓ヲ最多トシ當藩及ビ摩栗田郡河  
原尻藩ノモノヲ以テ小額トス

領主藤懸氏ハ三藤懸ノ一ニシテ其ノ本宗ナリ五  
千石ヲ領シテ當府トハ常ニ江府ニアルノ謂ナリ  
其ノ系織田氏ヨリ出テ土佐守永春ハ豊臣氏ニ臣  
事シテ其ノ評定衆タリ千疊敷寄合衆タリ朝鮮ノ  
役ニ二百人ヲ引率シテ國都ヲ守リ百二十人ヲ引  
率シテ晋州城ヲ圍ミ攻ム歸朝ニテ物頭役トナリ

上林村志



大坂冬陣ニ本丸ヲ守レリ永春一名定方ト云フ次  
ヲ三河守永勝トス一萬五千石ノ封地ヲ得テ石田  
三成ニ黨ニ徳川前將軍家康公ノ東北ニ軍ヲ進ム  
ルヤ其ノ敵上杉景勝ト睨ジ合ヒ徳川勢ヲ夾攻ス  
ルノ策ニ同ジ小野木勝重谷衛友ナドノ丹波大名  
ト進退ヲ共ニヒ一萬五千ノ兵ヲ合セテ東軍方ナ  
ル細中幽齋ヲ丹波田邊城ニ攻ム勝敗決セザル所  
ニ京都ヨリ勅使ノ下降アリテ扱トナリ軍勢ヲ撤  
スルニ因リ北方少ク寧シ永勝機ヲ昏テ東軍ニ就  
キ長ク徳川ノ臣隷ヲシテ願フ公ソノ名家ナ  
ルヲ知り其ノ家ノ絶エルヲ慙ニ許シテ五千石ヲ  
給ヒ旗下ノ士トス後ニ子孫繁衍シ五百石ヲ分封

上林村

シテ一家ヲ立テ後又同高モテ一家ヲ分封シ高目  
坂小山ニ家トシ本家ノ祿ハ減ジテ四千石トナル  
日置殿 地名珍シシ日置ハ大和尾張安房能登越  
後丹後但馬因幡出雲周防長門肥後ニアリ丹波ニ  
ハ船井郡ニアリヒキヘキヒカキナド呼稱別カル  
此所ハヒカキト呼ブ人ノ代々住居シタルナラシ  
殿ト云フハ其ノ祖神ノ社殿ニテモアリシモノカ  
此ノ姓ハ應神天皇ノ皇子大山守ノ子孫ニ賜ハリ  
シ所ノ尸ナリ  
室尾谷神社ハ五十鈴依姫尊ヲ祀ル阿須岐ト云フ  
地ニアリキ一十又餘年間阿須岐神社ト呼ヒ来レ  
リ今ヨリ七百四十有餘年前ニ領主藏持丹波守ナ

阿須岐志



ルモノ奉事レテ守護神トナセリ後兵火ニ罹リ地  
名モ二分セラレ東ニ分カレタニヲうすきト呼ビ  
西ニ分カレタルヲあすきト呼ビリ阿須岐コレナ  
リ神庫ニ保元ノ記録ナドアリタルガ今ハ其ノ如  
何ヲ知ラズ  
大唐内小唐内ノ二部落ハ深山幽谷ノ間ニアリテ  
常ニ外人ト接ラズ明治四五年ノ頃ニ當リ此ノ部  
落ノ人数名飄然トシテ下リ来リタルヨリ人口ニ  
上リ甲ヨリ乙ヘト相傳ハ遠ニ所屬問題トナリ其  
ノ地ノ三國ニ跨レルヨリ京都滋賀福井ノ一府二  
縣相推讓シ久敷ク無籍ニテアリシヲ終ニ京都府  
ニ編入スベキモノトナリ上林村ノ一部トハナレ

僧惠瓊

上林村

リ 北束田郡ノ明治村ト相伯仲スルノ話ト云フ  
ベシ 知井村ノ部ニ出ス  
睦志ノ隣部ニ水梨アリ僧ノ惠瓊此ノ地ニ生マル  
一説安藝沼田郡ノ人此ノ僧ハ太閤記中ノ大産者  
トミラレ小説メケル史傳アルトハ世ノ知ル所今  
コ、ニ縷記セス其ノ生家波多野與兵衛方ニテハ  
今以テ長老ト云フテ其ノ名ヲ呼ブト無シ與兵衛  
日ハク長老ハ吾ガ家ニテ産レ幼少ヨリ奥上林ノ  
禪宗金剛寺ニ入りテ得度シ本山ナル京都ノ東福  
寺ニテ修業シ安藝ノ國ノ安國寺ノ住職トナリタ  
ルナリ安藝ノ生産トスルハ誤リナリ當郡ニモ安  
國寺ノアルヨリ之ニ因縁アル様ニ言フモ誤リナ

上林村  
史記



リト其ノ家ニ納ムル所ノ位牌多キ中ヨリ持出シ  
 来ツテ示スモノハ惠瓊ノ父母ノ戒名ヲ刻シタル  
 ニテ惠瓊ノ死ニ後レタル丁十六七年ニシテ死セ  
 シナリ惠瓊ハ慶長五年十月朔日小西行長等ト京  
 都ノ六條河原ニ斬ラレシナリ此ノ父母ハ利發ナ  
 ル子ヲ僧ニシ長老ニマデ爲上ゲサセ乍ラ斯ク迄  
 憂ヤ目ヲ見ルノ心ニ如何ナリケン中上林宇市志  
 ノ森本文藏ノ家ニハ惠瓊ノ書キタル  
 三社詭宜アリ  
 升ハ此ノ家ヨ  
 月峰宗清禪定門 元和辰年八月五日  
 心月妙圓禪定尼 元和元年八月九日  
 リ贈リタルモ  
 ノト云ニ傳フム

上林村

水梨ヨリ菅坂ヲ越ヘテ新舞鶴ニ達スベシニ里弱  
 ニシテ難路ナリ頂上ニ標柱アリ  
 鎮守府街道ト  
 從是南 丹波國何鹿郡  
 呼バドモ今ノ所ハ小選ナリ  
 波多野鶴吉 綾部ノ羽室家ニ生レ中上林波多野  
 ヲ嗣グ養蚕家ノ巨鎮ナリ郡是製絲場ヲ起シ製絲  
 ノ模範ヲ公示ス明治二十九年緑綾褒章ノ下賜ア  
 リ 十九年京都府蚕絲取締所ノ組織ニ盡力シ推  
 サレテ副頭取トナリ 京都府蚕絲同業組合聯合  
 會々長トナリ爾来斯業ノ爲ニ悉ス所極メテ多シ  
 綾部ノ部ニ出タス参看スベシ  
 僧惠瓊 字ハ瑤甫小字ハ竹若年十一京師東福寺

上林村  
 志



徳本平記  
 隆徳元年七月十六日  
 天正元年七月十六日  
 日知何ハル日ニ  
 大納言軍式卿  
 以東天下ノ武將シ  
 ヲシ今十四代ニ  
 送リテ遠新解地  
 間ノ相ニ轉蓬洋洋  
 ノ身トナリ給フ事  
 悲ムベシ噴クノ  
 公方義昭御信  
 長巳ニ牙音ニ及  
 ノ由具ノ有エ有  
 ル間

入リ頃哉主ト呼ブ學ヲ好ミ禪ヲ習ヒ衆群ニ起  
 出ス長老トナリ南禪寺ニ遷リ祿司トナル紫衣ノ  
 勅許アリ安藝ニ往キ安國寺ヲ造ル武事ヲ好ムヲ  
 以テ遂ニ世相ヲ逐ヒ東西ニ奔馳ス毛利輝元ノ眷  
 遇ヲ受ケ領邑ヲ興ハラレ遂ニ其ノ國事ニ參預ス  
 羽柴秀吉ノ毛利氏ヲ伐ツニ會シ兩陣ノ間ニ來往  
 シ輝光ヲシテ之レト和ヒシノ自今秀吉ニ識拔セ  
 テレ暇餘之レカ爲ニ儒佛兩道ヲ説キ往々弓馬ノ  
 談ニ及ブ由リテ頗ル其ノ寵眷ヲ蒙ル諸將群侯惠  
 瓊ニ由リ事狀ヲ達スルノ捷徑ヲ開キ瓊ノ門前常  
 ニ市ノ如ク贈賄山積ス是レニ由リ僧道ニ及スル  
 ノ行爲多ク安國寺ノ經營堂ニ輪奐ノ美ヲ極ムル

上林村

ノミナラズ寺祿十八石ヲ賜ハリ自家ノ邸第大藩  
 侯ヲ駕ス慶長庚子東西相戦ハントスルヤ首トシ  
 テ石田方ニ黨ヒテ其ノ軍事ニ參謀シ九月初旬兵  
 ヲ率ヒ三成ト共ニ美濃ニ出デ南宮山ニ陣ス其ノ  
 戦起リ鼓螺ノ音矢丸ノ響ヲ聞クヤ恐懼戰慄茫然  
 自矢シ一鞭シテ馬ヲ驅リ一駛シテ磨針峠ニ至リ  
 書ヲ裁シ毛利秀元ニ贈リ曰ハク愚僧運窮マル將  
 ニ自殺セントス然ルニ閣下護衛ス今閣下内府ト  
 和ヲ講ス愚僧尚ホ從行セズ必閣下ノ煩ヲ爲サシ  
 故ニ永訣スベシト秀元人ヲシテ之ヲ追尋セシム  
 ルニ早ヤ其ノ跡ヲ見ズ瓊遁レテ朽木谷ノ逕ヲ取  
 リ小原ヨリ鞍馬ニ登リ月性院ニ入り潛匿旬餘ニ

上林村  
 史記



シテ東軍ノ追捕急ナリト聞キ輪ニ衆リ鞍馬ヲ下  
リ七條道場ニ潛居ス近江ノ僧樂鎮ハ其ノ舊怨ナ  
リ之ヲ聞知シテ所司代ニ訴出ス與平信昌人ヲシ  
テ捕ヘシム瓊ガ本願寺端坊ニ遁レントシテ出ツ  
ルニ逢フ解夫捕吏ヲ視テ輪キ置キ逃奔ス瓊ノ嬖  
童平井藤九郎長坂長七郎輪ヲ搦ケ東寺ニ解送ス  
捕夫迹シテ鑿ルニ童免レサルヲ察シ謂フテ曰ハ  
ク運命迫マル和尚敵手ニ辱シメラレシヨリハ寧  
口臣等ガ手ニ掛カリテ死ネト瓊輿窓ヨリ顧ヲ出  
タス之ヲ刺ス瓊首ヲ縮メ頬ヲ傷フク藤ハ十六長  
ハ十九瓊ヲ死セリトシ相貫キ斃ル瓊捕ヘラレ大  
津ニ傳ヘ東軍ノ本陣ニ達ス徳川氏コレヲ村越直

上林村

吉ニ係管セシム徳川前將軍平素瓊ガ信ニシテ奸  
ナルヲ惡ム是ニ於テ京師ニ徇ヘシメ十月朔六條  
河原ニ刑シ首ヲ三條川原ニ梟ス  
豊公ノ日吉丸假稱藤吉タル時ニ矢矧ノ橋ヲ渡  
ルヤ達磨臺ニ免レル賣ト者か見テ於前ハ三光  
ノ官位ヲ履ム相ガアル一僕ニコシナ相ガアル  
ト云フヲ相學ハ信スベキモノナラズトテ其ノ  
算木筮竹天眼鏡ヲ橋下ニ投ゼリ是レガ遂ニ出  
家シテ秀吉ニ再會シ夕惠瓊ナリ  
石井ノ復讐美談  
篠山城主青山因幡守宗俊ハ忠臣忠俊ノ子ニシテ  
孝人ナリ元祿年間ニハ龜山城主ナリ寛延元年青

上林村志



山因幡守忠朝篠山ニ移封ス多紀郡篠山藩此ノ志孝ノ君ニシテ又忠孝ノ臣ヲ出カシ赤穂義士復仇ノ美談ニ先ダツ一年ニシテ龜山讎打ノ美談アルゾ快ケレ道中龜山斬ト云ヒ又ハ往昔模様龜山漆ト云フ淨瑠璃アリ其ノ實ハ著聞集ニアル此ノ美談デアル

石井宇右衛門ハ青山家ノ士臣ニシテ文武ノ道ニ厚ク忠義一途ニ心ヲ固メタル者ナルガ故上ハ主君ヨリ下ハ足輕小者ニ至ル迄之ヲ重シゼザルハ無カリシ時ニ宇右衛門ハ主君が大坂城代トシテノ勤役中隨行シテ居タル所ハ赤坂源五右衛門ト名乗リ年齢二十許ノモノ宇右衛門ガ親戚某ノ

上林村

書面ヲ携へ來リ一身ノ寄セ方ヲ慝ミ越シタリ宇右衛門ハ情アル人連之ヲ養ヒ置キ後ニハ國元ノ息子ニ之正方ハ遣ハシ良キ折見テ當藩カ又ハ他藩ハ世話ニ遣ハサントスル内ニ公役ノ年限モ満チ歸國シ共々一家ニ起臥飲食ニ身内同様隔意無ク暮ラレタル源五右衛門モ久敷ク居馴染ミ且ハ評判善キ石井家ノ客人トテ同藩ノ若士トモ交ハリ遂ニハ武藝ノ仕合ニモ出席スルトナリ源五右衛門ハ鑑ノ名人トマデ名ヲ取り一日宇右衛門ハ源五右衛門ヲ坐側ニ招キ曰ハル様其ノ方ノ鑑ノ使ヒ方ヲ傍看シタルガ甚赤熟ナレバ今後ハ人前ニテ勝負スルヲハ思ヒ止メヨ拙者ハ

上林村  
上林村  
上林村



其ノ方ニ知ル如ク君侯ノ鑑師範ナレバ其ノ道ニ  
ハ聊心得居ル者ナレバ其ノ家ニ未熟ナル其ノ方  
事カ心得顔ニモ若者ヲ教エル杯ハ杖ニ於テ快カ  
ラホバ一段上達スル迄必ス差出ル可ラズト懇ナ  
ル教訓ヲ下シタルモ恩ヲ讎ニ受ケルノ愼人ハ已  
ガ藝ニ自負心ヲ添ヘ謙遜自強ノ恩人ニサラバ一  
勝負願ハント面相替ヘテ迫ルニゾ宇右衛門モ是  
ハ此レ客氣ニ驅ラレテノ口上ナリト程能差レ止  
メヌレバ是非御指南ト早ソコヘ面小手誓古槍ヲ  
モ取揃ヘ運ビタレバ今ハ否ムモ詮無シト初ノ手  
合セニ掛聲スルカト思ヘバ源五右衛門ノ胸ノ下  
ニ宇右衛門ガ穂先ハ衝キ入りタリ今一合ハセト

二林村

乞フテ押シ止メタレド聞キ入ル、面拵ナケレバ  
又一槍合ハセ源右衛門辛ツテ繰リ出ス長柄ハ哀  
レ両手ヨリ方墮サレヌ心愼キカ自慢ノ而モ剛  
捷ナル源右衛門無念遣ル方無ク具ノ場ハ式代シ  
テ別レタルモ何ントカ爲テ此ノ憤ヲ齎ラシ矣レ  
シト考ヘタルゾ恐ロシキ宇右衛門ニ於テハ斯  
ク懲ラシメ置キナバ自省ミテ行爲ヲ革ムルナラ  
シト望ミ防衛セザルゾ運ノ果ラナル一日宇右  
衛門當番ノ役ヲ勤メ春雨ヲホ降ル夕マダ城ノ外  
ナル吾ガ家ニ戻ラント迎ヒノ一僕百連レ城壕ノ  
傍傳ヒニ歩ニ進ムル折シモアレ小笹ノムククト  
勤キ出セシハ正シク人影一聲聞コエ鑑ノ意趣

二林村  
二林村  
二林村



思に知レ 小繼ノ徳先ハ宇右衛門ノ胴ヲ衝キ洞  
ス 宇右衛門ハ應ト答ヘテ刀ヲ抜キ放シタルガ  
木履折ケテ倒ル 僕ハ怕ク奔リ歸ツテ告ケ知  
ラス 家内ハ聞キテ大騒ギ三之丞刀オツ取り僕  
ヲ案内ニ驅ケ附ケタレト相手ハ見ヘズ 頗テ追  
走セニ来レル家人ト共々疵ヲ付抱シ家ニハ入レ  
タレド致命ノ槍痕 若シキ聲シテ遺言スラク三  
之丞ハ十八歳搜シ出シテ讎ヲオラ次男羊藏(五歳)  
ト源藏(三歳男)ハ幼稚ナレバ母コレヲ養育セヨ三之  
丞ハ腕ニ實ノ入りタルト覺エルグ努コノ遺言ヲ  
忘レソト其ノ夜五十歳ヲ一期トシ怨ヲ含ミテ氣  
息ヲ絶チヌ 死去ノ届書檢屍ノ處分 絶家ノ申

上林村

渡 密葬ノ一 吊祭ノ一ヲモ終リ 復讐ノ出願  
書ニ添ヘ永ノ暇ヲ乞ヒ多年召シ使フタル若黨ノ  
事慣レタルヲ携ヘ何處ヲ目當トモ無ク親類朋友  
同勤ノ相別ヲ機トシ其ノ席ヨリ丹波路ヲ南ニ取  
リ更ニ東山ニ出デ又北國ニ向ヒ西南ニ轉ゼシ内  
早クモ四年ヲ經過シタレバ心ノ矢竹ニ早ルヲ止  
メ得ズ 茲ニ一策ヲ案ジ出カシ 敵ヲ引出サシ  
手立ニト 源五右衛門ノ継父ナル赤坂遊齋ト云  
フ醫者が大肆ニ在ルヲ嘗テヨリ聞キ居タレバ之  
ヲ尋ネ出シテ一刀ニ斬リ殺シ 其ノ家ニ一紙ヲ  
張り左ノ文白ヲゾ書キ附ケタル 料無キ遊齋ヲ  
殺害シタルハ石井三之丞ナリ其ノ意趣ハ汝コレ

上林村  
史記



ヲ知ルベシ親ノ讎ヲ打シトナラバ其國某所ニ  
 来レ相待ツベシ赤城源五右衛門殿參ル石井三之  
 丞ト鳴所此ノ計策 昇壇未練ナル敵手ニ對シ  
 效果如何ニ 三之丞倦怠ノ窮計 前途ヲ急ゲル  
 無謀 其ノ危キヲ岌々守タリ 時是レ元祿九年  
 ノ夏三之丞美濃ニ在リ知人某氏ノ家ニテ庭行水  
 ヲ處シ斗タル 此所ゾ大津ノ張札ニ示シタル地  
 ニテ裏ハ一面ノ竹林ナリ ガサリト物音サセ  
 テ忍ビ寄リタル一人ノ田者 親ノ敵覺エタカト  
 孰レカ真ノ親ノ敵 三之丞ヨリ言フベキ辞ヲ敵  
 ヨリ受ケ 心得タリト行水盥ノ傍ニ置ケル一刀  
 抜カントスル一刹那 肩先深ク切り込マレタレ

上林村

ドタドトハ爲タレドモ抜チニシテ曲者ノ背  
 ヲ拂ヒタリ 三之丞ノ疵ハ深手ナレバ即坐ニ命  
 ヲ衰ヒ遺恨ハ亡キ骸ト共ニ異郷ノ土ニ葬ラレタ  
 リケル 若黨怪シキ物音ニ驚キ走り来レバ 是  
 ハ如何ニ 主人ノ體ハ裸ノマ、血潮ニ染マリテ  
 沙上ニアリ ナンボウ口惜シキ丁ニ思ハドモ又  
 是非モ無キ次第ナレバ 畧葬モソコトニシテ左  
 歸ハリ主家ノ未亡人ト三之丞ノ弟二人ニ辛苦艱  
 難ノ伺察ヨリ大津ニテノ殺害事件等逐一ニ陳メ  
 ケルニゾ一家産ネテノ不幸ニ一夜袖ヲ涙ニ濕シ  
 ケル 弟兩人モ其ノ下手人ハ全ク源五右衛門ニ  
 相違無シ父兄ノ仇積モル怨恨晴ラサデハ置カジ

上林村  
 志



ト晝夜武術ニ心ヲ委ネ源藏二十三歳ノ時少シク  
 仇ノ消息ヲ耳ニシタルヨリ兄半藏ニ計リテ願書  
 ヲ差出シ父兄ノ復讐ニト出テ立ケル其ノ消息  
 トハ何ニ 伊勢國龜山藩中ニ近頃槍術師範役ニ  
 召シ抱ヘラレタル浪人アリテ相貌骨柄兄ト僕ト  
 ヨリ聞キ居タル仇ニ髣髴タルヨリ一日千秋ノ思  
 ヲ爲シ急キ其ノ地ニ赴キ源藏名ヲ森平ト改メ龜  
 山城主板倉周防守家臣二百五十石知行ニテ旗奉  
 行役下村孫左衛門方ノ僕トナル 志アル者ノ働  
 振ハ尋常一様ノ僕ナラズ諸事ニ忠々數ク仕フル  
 モノカラ主人ノ氣ニ投ズルハ言フニ及バズ同家  
 中ノ者ニマデ森平ニト愛セラレ 中ニモ赤堀

上林村

水右衛門トテ百五十石取ノ士方ハ森平ノ口入ニ  
 テ若黨一名抱ヘタルヨリ森平モ時々出入シ心安  
 キ中トハナリヌ 或ル日孫左衛門方ヨリ水右衛  
 門方ハ用事ノアリテ森平行ク 水右衛門ハ裏瀬  
 戸ニテ行水ス 三之丞ノ害セラレタルモ行水ノ  
 折柄 水右衛門ノ消息ヲ探ル機會モ亦現ニ此ノ  
 行水ノ折 ヲ一森平カ何構アトガアル遠慮ニ及  
 バヌ使ノ趣ハ何シジヤ行水シテカラ緩々聞カウ  
 幸ジヤ肩一ツコスツテ吳レ 御易イトト背ハ廻  
 ハリ手拭受取り脊ニ湯ヲ掛ケツ、見テ喫驚 擅  
 那此ノ御輕儀ノ迹ハ如何ナサレマシタノデスカ  
 サレバ物語リシテ聞カサシ其ノ方ハ深切ニシテ

叫  
 坡  
 志



情深キモノナレバ言フテモ外ハ漏ラサバ  
シ 問フニ落キズ語ルニ落ツル涼五右衛門ノ水  
石衛門ハ 士ノ意趣ヨリ説キ初メ石井守右衛門  
ト云フ同藩士ヲ斬殺シテ逐電シタルが其ノ青二  
歳ノ悴メガ敵呼バ、リスル片腹痛カ 是レモ我  
ガ謀ニテ今我が行水スルト同ジ様ナ廣庭ニテ一  
刀ニ切殺シタト油断シタルが我が不覺 青二歳  
ト思フ外ナル手並 盟ノ横ニアル脇指抜ク手モ  
見セズ一掛シタルガ正シク此ノ疵ト右ノ手モテ  
撫デツ示シツ且言フ様 三之丞ニハ二人ノ第ア  
レド其ノ時ハ幼稚ノ水兒ナレバ今ハ其ノ生死ノ  
丁モ定カナラズ繼ヤ生き存ラハアランニモセヨ

上杯村

今ハヨモ附ケ狙フベクモアラジ殿ニモ薄々聞カ  
セラレ隨分ト圍ヒ玉フ丁ニナド調子ニ乗ツテ語  
ルヲ聞キ是レゾ平生信仰シ立願ヒタル結果八百  
萬神ノ助力又ハ佛陀ノ冥加カト湧キ出ヅル心  
血ヲ押シ鎮メ行水終リテ主用ヲ叙ベ立歸ヘル  
時ニ兄ノ半藏ハ江戸ニ在ワテ敵ノ所在ヲ探リ居  
ルニ付キ兼テ示シ合ハセシ答際モテ文認メ至  
急此ノ地ニ来レト言ヒ遣ハス 半藏取ルモノモ  
取り敢へズ伊勢へ来リ同藩中ノ扶持人ニ鼓吹ノ  
役ナル棗八兵衛方ニ奉公有リ附キ翌年三月ノ出  
替ハリニ違テノ申立ニテ暇取り森平ノ口入ニテ  
近習役鈴木芝右衛門ノ抱へ人トナル是レハ相談

上杯村  
近習役鈴木芝右衛門ノ抱へ人トナル是レハ相談



ノ便ヲ測ツテノカトヨ 詰轉リテ水右衛門方  
ニ近頃一人ノ若黨ヲ石シ抱ヘタリ 森平ノ周旋  
ニテ 其ノ者誰レ 其レゾ三之丞ガ最後マテ附  
キ添ヒ其ノ死状ヲ篠山ハ報告ノ爲ニ戻リタル石  
井家普代ノ僕某ノ息子ニテ父ノ志ヲ継ギ復讐ノ  
助太刀セシト望ミ始終兄弟ノ耳目トナリ手足ト  
ナレルモノ 此ニ於テ三人草野ニ密議シ龜山侯  
ガ本年江戸參觀アル前ニ本望ヲ遂ゲント決ス  
僕ハ助太刀セント乞ヘヒ兄弟許サズ 亡父ノ願  
ナリト言ヘヒ他人ノ手ヲ借ルハ本意ナラズトテ  
許サズ 遂テト請ヘバ七生迄ノ勲當ト云フ左ア  
ラバ此所ヨリ一里許彼方ナル松林ノ中ニ糧ノ用

上林村

意シテ待テ奉ラシ本望遂ゲ玉ハバ疾ク来リ玉ヘ  
ト指シ示ス 此ノ事善カラシト諸事打合ハセ僕  
ハ水右衛門ニ乞ヒ兩三日ノ暇ヲ得 半藏ノ吉助  
モ四月九日ノ早朝ニ轄ノ暇ヲ乞ヒ國元ノ者此ノ  
驛路ヲ通行スルニ由リ懇懇致シ度シト言フ 主  
人曰ハク然ラバ我が髪月代ヲ濟マセラノ後ニセ  
ヨ遅クモアルマジト言フ 急ガ心ヲ取鎮メ主用  
ヲ終リ 約束ノ如ク城ノ裏手ナル堀端ニアル一  
本柘ノ蔭ニ佇ム 紺色ノ單衣帯アルハ一長刀  
水右衛門遅シト待テ懸ケタリ 森平ハ主人ヨリ  
若黨ニ取リ立テント言ハルハヲ受ケザリシニ今  
度ハ有リ難キ旨ヲ叙バ一カヲ授ケリ名ヲ津右衛

上林村  
志



門ト改メラル 此ノ事伯父ニ聞カセタレバ大ニ  
 喜ビ童代ノ一振ヲ祝ノ印ニ吳レタリトテ主人ニ  
 示ス 鞘ヲ拵ヘバニ尺三寸氷ノ刃 銘ニハ閑和  
 泉守 主人ハ一目見テ其ノ業物ニ驚キ下賤ノ者  
 ニハ不似合ナルトヨト訝リマ 八日ニハ水右衛  
 門許赴キ下婢ニ白キ下帯ニ筋ノ端縫ヲ委ネ九日  
 ノ早朝主人ノ用ニテ伽羅ノ油元結等ヲ買求メン  
 ト言ヒ出デ、行ク 圖ヲザルニ大手ノ向フヨリ  
 水右衛門ハ野郎一名具シテ下ガリノ途中 ハ野  
 郎ノ御供ニテ御下ガリトハ心元無シト問ヘバ  
 サレバ今朝俄ニ頭痛スルヲ以テ五ツ今ノ午前ノ番  
 代リヲ待テ兼テ同役ニ断リ野郎ガ藥ヲ指テ来ル

上林村

ヲ幸ニ共々下城スルナリト言フ 然ラバ私が操  
 療治ニテモ致シ参ラセント常談一番ス 其ノ方  
 口入ニテ芝石衛門方ニ居ル吉助ハ何共合照ノ行  
 カ又頼魂ナリ慮外アラバ打ツテ捨ルゾヨ 下々  
 ノモノハ皆同ジ事只大目ニ見道ガシト 言葉ノ  
 未終ラヌ處 柘樹ノ蔭ヨリ踊リ出デタルハ誰ゾ  
 吉助ノ半藏 石升宇右衛門ガ悴半藏父兄ノ敵ヲ  
 折ツナリト 頭ヨリ鼻ノ下ハ斬リ附ケタリ 身  
 源藏ナリ思ヒ知レト森平ハ肩先ヨリ大袈裟ニ切  
 リ離ス 之ヲ元禄十四年四月九日廿八年目ノ仇  
 討 兄ハ三十三歳第ハ三十歳 神ニ伏シ併ニ緝  
 シ嬉シ涙ニ咽ビ泣キ 書面一封水右衛門ガ袴ノ

上林村  
 史  
 記



腰ニ結ビ附ケ足早ニ城外遠ク出デ去ル之ヲ見  
聞シタル供ノ小野郎恐怖ニ打タレ堀ノ中程迄  
轉ビ落チシガ這ヒ搦リ其ノ事共ヲ留守人ニ告  
グ上役へ届書上役ノ檢視形ノ如ク相濟ミ  
タルガ書面ニ記載シタルヲ見テ君臣共ニ其ノ  
苦辛ノ程ヲ感シ常法トシテ追手ヲ出セ誰レ  
ヤ好キ是レヤ好キト大廣間ニテノ評定ニ時ヲ  
移シ其ノ利ヲ整へテ城ヲ出デタルハ夕景ナリ  
之ヲ聞キタル人々ハ情籠メタル追手ナリト感ゼ  
シトカヤ志ヲ遂ゲタル兩人ハ兼テ言ヒ合ハセ  
レ松山ノ内ニテ糧ヲ用ヒ三日猶豫ニ僕シテ往還  
ノ取沙汰聞カセシニ今ハ追手ノ心支ハ無シ

上林村

先ツ若黨ノ僕ヲ本國へ歸シ事ノ始末ヲ報告セシ  
メ二人ハ上方ノ御帳面ヲ消サント自首シテ無罪トナル申立  
東海道へ出デ誰カアルト相待ツ所へ來掛リ夕  
ルハ西方大名ノ藩士五六百石モ知行スル人體ト  
見テ無心ノ申シ條アリ聞キ取り給ハレ疲勞極  
マル暫時圍ヒ給ハレト歎願ス侍ハ五ノ下ヨ  
トテ旅亭ノ一室ヲ假リノ宿リニ半日間勞ハリ臥  
サシメ目醒ムレバ料理ヲ進メ金一封ヲ引出モ  
ノトス飲食ヲ濟マセ贈金ヲ返シ名乗リテ  
東西ニ別カル舊君因幡守ノ子下野守當時遠州  
濱松ニアリト聞キ僕ヲモ召シ連レ登城シ一伍  
一什ヲ届ケタレバ兄半藏ニ親ノ本知ニ百五十石

上林村志



第源藏ニ新知二百石賜ハリ城内ニ郊地ヲ石ノサ  
セ番兵ヲ置キ非常ヲ誠メシメヌ 後數年藝州候  
ノ藩ニ入ル 升ハ兄弟ノ幼時 父ヲ喪ハル時藝  
藩ノ姻戚ニ養ハレタル因アルニ由ル 後ニ浪華  
ニ出テ其ノ子正衆ヲシテ藤懸氏ノ邑宰タラシム  
此ノ地ノ石井世々半藏ト稱シ子アレバ源藏トス  
ルハ是レガ爲ナリ 大阪谷町大仙寺ニ宇右衛門  
ノ墓アリ

歸真性海以得居士靈位 表面ノ文字

延寶元癸丑年十月十八日 裏面ノ文字

半藏ノ没セシハ寶曆四年甲戌十二月十二日ナリ  
是ヨリ先キ浪華ヨリ丹波ニ移リ八十二歳ノ長壽

上林村

ヲ得テリ源藏ノ下評ナラズ後日ノ調査ニ讓ル  
之ヲ龜山ノ復讎ト云フハ備人復讎人共ニ丹波龜  
山藩士ニシテ復讎ノ地ハ伊勢ノ龜山ナレバナリ  
丹波龜山城外士族郊地域内ニ水右衛門屋敷ノ名  
稱存ス 石井家ノ墓地亦在リ  
次ニ出ダス所ノ石碑ハ上林村永勝寺ニアルモノ  
野史ニ記載スル所ト裨官小説又ハ講談師ノ讀本  
スル所ノモノハ左記ノモノヲ采リ用ニ故ニ繁瑣  
ヲ顧ミズ之ヲ録ス  
石井兵右衛門ハ美濃大垣ノ人ナリ幼ヨリ加藤清  
正ニ事ヘテ戰功數多シ清正ノ肥後ニ封セラル、  
ニ從テ徒リ祿二百石ヲ受ク寶永中清正歿後其ノ

丹波 志



子封地ヲ統ハル兵右衛門妻孥ヲ携ヘテ大坂ニ客  
居ス其ノ釵法ニ善キヲ以テ徒ニ授ケ生計ニ資ス  
正保元年生玉ノ酒樓ニ三人ノ士アリ乱醉シテ樓  
主ヲ殺シ樓丁數人亦傷創セラル由民走り之ヲ奉  
行所ニ告グ吏卒来リ驗シ樓ニ上リントスレバ下  
瞰シテ之ヲ斬ル殺傷徒ラニ多クシテ獲ルヲ能ハ  
ズ兵右衛門コレヲ聞キ子兵助ヲ伴ヒ之ヲ弑タシ  
ト請フ吏之ヲ許シ成ル可クンバ之ヲ生禽セヨト  
云フ曰ハク三名ヲ生擒スルハ難シ其ノ一人ハ之  
ヲ殺サバ爾可ラズ如何ト吏コレヲ許ス乃チ兵助  
ニ命ジテ曰ハク我ハ樓上ニ於テ投下セン汝樓下  
ニ居テ之ヲ縛ヒヨト兵助曰ハク大人ヲシテ危害

上林村

アラシム可ラズ請フ兒樓上ニ關ハント聽カズ鎖  
衣ヲ衷ニシ左手ニ炬火ヲ持シ大ニ呼ンデ登ル三  
人鋒ヲ揃ヘテ之ヲ迎フ炬火具ノ鼻頭ヲ衝キ六眼  
共ニ瞑ス三人覺ヘズ退縮ス乃チ突進シ一人ヲ刺  
シ二人ヲ樓下ニ投ズ兵助直ニ之ヲ縛ス事城代ニ  
聞ス城代太田資宗米二十苞銀二十錠ヲ賞賜ス兵  
右衛門命ヲ辨シテ賜ヲ辞ス使者之ヲ強フ兵右衛  
門曰ハク世間ノ人予等ヲ以テ利ノ爲ニ働クモノ  
トセシト資宗大ニ感ジ酒肴ト名刀ヲ與ヘ延キ客  
臣トシ廩米ニ百石ヲ給シ領地濱柘城内ニ住セシ  
ム後年資宗在城ノ時其ノ舅某アリト聞キ兵右衛  
門ヲシテ之ヲ聘セシム偶々嵯峨野ニ於テ同僚赤

上林村志



堀源右衛門ニ邂逅ス源右衛門名ヲ松軒ト改メ子  
源藏ト流離艱辛スルノ故ヲ告ケ父子共ニ槍術ニ  
長ズ兵右衛門大ニ之レヲ憫ミ源藏ヲ携ヘ濱柁ニ  
歸リ徒ヲ集メ共ニ槍法ヲ授ク時ニ宮本武藏ノ徒  
高坂無一ナルモノ諸國ニ武者修行ニ履柁ニ来リ  
寓所ノ門ニ牌シ槍術家ノ仕合ヲ挑ミ自以テ天下  
ニ敵無シトス兵右衛門源藏ヲレテ往キ仕合セシ  
ム觀者堵ヲ爲ス無一ハ木釵ヲ持シ源藏ハ木槍ヲ  
持レテ相支フ源藏棧ヲ昏テ一衝シ之ニ中タル無  
一進ミ已マズ源藏叫ンデ曰ハク勝負已ニ決スル  
ニ猶来ル乎ト頸ヲ攫ミ之ヲ投ズ衆齊シク呼ヒ感  
賞ス無一羞テ退ク城主コレヲ聞キ擧ゲテ槍術師

上林村

範役トス業ヲ受クルモノ日ニ多シ一夜大ニ雪降  
四外闇黒ナリ衆集リ百物語リヲ爲シ百筋ノ燈心  
ニ火ヲ點シ一柱談終ル毎ニ一穗燈ヲ滅ズ談半ニ  
シテ燈火滅シ中庭ニ一物アリ動搖廻轉ス衆心悸  
ス源藏槍ヲ提ゲ往キ之ヲ刺ス衆燭火モテ之ヲ照  
スニ家大ナリ遂ニ一藩ノ話頭ニ上リ嘲笑スル所  
トナリ曰ハク狗ヲ殺スハ源藏ニ學習スルブ善キ  
ト兵右衛門之ヲ病ミ源藏ヲ呼ビ之ヲ誡ム源藏改  
ムル色無ク剃サハ技ヲ較マント乞フ兵右衛門其  
ノ傲岸ナルヲ視テ涙ヲ流シ杖ヲ執リテ起ツ源藏  
槍ヲ以テ突ク兵右衛門杖ヲ揮フテ其ノ槍ヲ迎ヘ  
直ニ入り其ノ頭ヲ連打ス曰ハク汝ノ父ノ杖ナリ

母  
枝  
志



宜レク心ニ銘シ骨ニ鑿シテ忘ル、勿レト源藏地  
ニ伏シ罪ヲ謝ス乃チ酒ヲ命ジ慰勉シ之ヲ遣ル家  
僕他日此ノ事ヲ世間ニ公言シ主公ノ堪能ヲ誇張  
シ源藏ノ敗缺ヲ嘲笑ス言源藏ニ聞コユ源藏以爲  
ハラク是レ兵右衛門ガ流布セシメ以テ我ヲ辱シ  
ムルモノト惡意ヲ抱キ夜見ユ兵右衛門快語シ又  
暴ヲ圍ニ止メテ宿セシム人定ノ後源藏潛ニ寢室  
ニ入り之ヲ刺シ逃レ去ル兵助宿直之レヲ知ラズ  
城門夜鎖レ消息無シ翌朝報ニ接シ歸宅シ屍ヲ抱  
キ慟哭シ復讎ノ心ヲ城主ニ告ケ且ツ暇ヲ乞フ城  
主コレヲ許シ兼高作ノ一刀ヲ賜フテ鼓舞ス兵助  
拜謝レ去リ家事ヲ人ニ托シ先ツ嵯峨ニ往キ松軒

上林村

ニ見エテ曰ハク汝ノ子我が父ヲ殺シテ去ル必ス  
汝ガ家ニ在ラン汝速ニ之ヲ出ダセ答ヘテ曰ハク  
源藏我ガ許ニアリ然レ兵汝ノ父ノ相手ナリ汝ノ  
敵ニ非ズ汝疾ク歸レ兵助大ニ怒リ刀ヲ以テ之ヲ  
切ル將ニ絶エントシ哀告シテ曰ハク不肖ノ子恩  
ニ背キ義ヲ忘レテ汝ノ父ヲ殺ス予汝ノ爲ニ殺  
サルト聞カバ彼レ將ニ自ラ出テ汝志ヲ遂ク  
可シ汝ヲ怒ラサニガ爲ニ伴リテ源藏在リト云ハ  
ルノミ汝ソレ之ヲ勉メヨト言終リ命絶ユ兵助大  
ニ其ノ義烈ヲ感ジ一揖シテ謝意ヲ表シ木札ヲ左  
外ニ懸ケ書シテ曰ハク松軒ヲ殺スモノハ石井兵  
助ナリ汝父ノ讎ヲ報セガレバ天地ノ間ニ在ル可

上林村  
史記



ラズ我レ美濃國谷汲ニ行キ汝ヲ待ツ寛文七年七月日赤堀源藏ニ示スト往キ濃州ニ於テ之ヲ待ツ久シキニ涉リ旅費ニ乏シ仍リテ僕常右衛門ヲ遣シ濱松ニ歸ラシム是ヨリ先キ常右衛門ノ兵助ニ隨フテ國ヲ出ヅルヤ兵助ノ妻身メルヲ以テ之ヲ省慰ス家道困乏ナリ常右衛門ニ妹アリ未ダ嫁セズ之ニ告ゲ且ツ請フテ曰ハク仇未タ報セズシテ資ニ乏シ汝コレガ爲ニカヲ出サン歟ト妹許諾ス乃テ之ヲ京都ヨリ来リ驛舎ニ宿スル娼家主人アルヲ聞キ身ヲ賣ラセ八十金ヲ得コレヲ懐ニシ復タ谷汲ニ到ル此ノ時ニ源藏ハ大坂ニ在リテ悪少年ト交遊ス或ル人告ゲテ曰ハク頃日京都ノ西

上林村

郊ニ人ヲ殺スモノアリ榜シテ石井兵助ト自稱ス云々源藏聞キテ大ニ驚キ走リ赴ケバ果シテ父ノ屍ニシテ村人ノ爲ニ草野ニ棄テラル、所トナリ日己ニ久シ乃チ悪少年三人ヲ率ヒ三絃ヲ致シ歌舞シテ賣藝師ニ扮シ乞丐ノ姿ヲ表シ谷汲ニ至ル兵助一日出デ、里中ノ稱名寺ニ遊ビ夜更ケテ旅舎ニ返ル源藏以下南陽院ノ側ニ伏シ之ヲ待ツ偶々雨降ル兵助傘ヲ傾ケ之ヲ過グ其ノ夾撃スル所トナル叱咤シテ曰ハク無禮モノメト刀ヲ揮フテ相撃ツ衆寡敵セズ其ノ刺殺スル所トナル常右衛門切齒スレドモ及ハズ其ノ屍ヲ假葬シ又濱松ニ歸リ之ヲ告ゲ妻悲慟シ啼哭シテ曰ハク一家ヲ擧

丹波志



ゲテ此ノ大福ニ罹ル皆彼レ一源藏ノ所爲ニ出ツ  
ニ孤ヲ長養シテ此ノ雛ヲ教ヒデヤハアルト乃チ  
三歳ノ兒ト初生ノ孤トヲ懐抱シ途ニ乳ヲ乞ヒツ  
、大阪ニ至ル時ニ妹ノ妓トナリ新田ノ娼家ニア  
ルモノ狭衣ト名ノルヲ尋ネ故ヲ告ゲニ孤ヲ托セ  
シトス狭衣慨然トシテ許諾シ且ツノ資ヲモ給與  
ス常右衛門乃チ股ヲ慶ジ筵ヲ負ヒ諸国ヲ遍歴シ  
源藏ヲ物色シテ過ハズ憐ムマシ志ヲ齎シ海西ニ  
死スト云フ狭衣自ラ遺孤ヲ撫養シ其ノ成人ヲ待  
ツ其ノ客ニ接スルヤ義氣アリト見レバ情ヲ竭シ  
歎ヲ迎ヘ以テ他日ノ資助ニセントス其ノ客中ニ  
九亀ノ士人三井十左衛門ナルアリ情交親密ナリ

上林村

一夕ニ兒ヲ拉シテ其ノ側ニ置ク三井着テ之ヲ異  
トス狭衣曰ハク是レ妾が主ノ遺兒ナリト三井ソ  
ノ来歴ヲ問フ對フルニ實ヲ以テシ一伍一竹ヲ語  
リ之ニ次グニ涙ヲ以テス三井聞キテ其ノ節義ニ  
感シ携ヘ歸リテ養育スルヲ十有餘年兄半三郎年  
十七第ニハ父祖ノ仇アリ報セザル可ラズ我レ狭衣  
ノ託ヲ受ケテ汝等ノ成長ヲ<sup>後</sup>族ヲ仇ヲ打ツノ謀ヲ  
立テ以テ父祖ノ靈ヲ慰メヨ其ノ謀ヲ成スト成サ  
ハルト一ニ汝等ノ方寸ニ在リ必ス努メ以テ孝道  
ヲ完フセヨト且ツ語リ且ツ勵メ二十金ヲ贖ス兄  
弟深泣シ恩ヲ謝シ出デ、征金ニ上リ遂ニ信濃ニ

母  
史  
志



出デ小諸藩鳥井元右衛門ノ家ニ童僕ノ需アルヲ  
聞キ往キ面シ仕ヘント請フ鳥井具ノ請ヲ容レ之  
ヲ家ニ居キ使役ス兄弟能ク務メ其ノ愛顧スル所  
トナル一日兄弟ノ相對シテ悲泣スルヲ見ソノ故  
ヲ問フ兄弟告グルニ實ヲ以テス主人歎シテ曰ハ  
ク汝等年少ニシテ其ノ志アリ深ク察スル所ナリ  
此ノ地僻遠ニシテ便ナラズ吾ガ兄東都ニアリ汝  
等コレニ倚レト三々直ニ往カント乞フ主人憫ミ  
テ之ヲ止メ諸藩士ニ逢フ毎ニ語りテ曰ハク吾ガ  
藩ニ捨テ善クスルモノヲ抱ヘントノ議アリ有ラ  
バ教ヘラレヨト龜山ノ行人曰ハク吾ガ藩ニ赤堀  
ナルモノアリ管槍ヲ善クス管テ人ヲ殺シ又具ノ

上林村

子ヲモ殺スヲ以テ猥ニ人ニ遇フヲ避ク寡君具ノ  
勇ヲ嘉シ延キ師トス貴藩ノ素ムル所ニ適スト主  
人コレヲ三々ニ告グ三々大ニ喜ビ之ヲ具ノ兄ニ  
告ゲントス兄時ニ小諸ニアリ三々晝夜兼行シ兄  
ニ遭ヒ之ヲ告ゲ相共ニ龜山ニ奔リ讎人ヲ窺フ一  
日コレニ途ニ逢フ兄半三郎其ノ後ヨリ呼ンテ曰  
ハク赤堀氏ニ非ザル乎ト顧ミテ曰ハク汝ハ誰レ  
ゾ曰ハク石井氏ノ子父祖ノ爲ニ仇ヲ復セント欲  
スト奮撃シテ肩ニ中フ源藏怒リカヲ抜ク三助一  
躍シテ額ヲ伐フ仇斃ル半三吭ヲ刺ス兄弟其ノ志  
ヲ遂ケルヲ得テ相看テ満面ニ喜色ヲ呈ス事龜山  
城主板倉氏ニ聞ス板倉氏具ノ孝義ニ感シ厚ク之

上林村志





ヲ待シ使ヲ遣シテ状ヲ太田氏ニ告グ太田氏嘉賞  
 シテ其ノ秩禄ヲ復シ又命ジテ金ヲ出ダシテ袷衣  
 ヲ贖ハシム兄弟コレヲ母トシ養フ復讎ノトハ  
 實ニ元禄四年五月二十日ナリ三人壽ヲ以テ終ル  
 ト云フ



勢

徒  
徒

上  
林  
村

石井氏久亮其先播州三木人世冒石井氏考正春寬  
 文之頃仕浪華處守青山家為其姻族赤堀氏見殺久  
 亮兄房尚弱養藝州之親族日夜感激未嘗忘復讎之  
 志稍長共兄出藝而周流其際或往來京師或滯於武  
 城遂聞赤堀氏在巽州龜山鎮兄弟欲一心而討之若  
 多日方勞擾煩劇不可勝言遂至彼地手刃赤堀氏雪  
 不共戴天之讎於是兄弟同歸于舊主家分食父之邑  
 頃之久亮更適藝州仕于淺野家後遂辭仕屏居于浪  
 華使其子正乘為藤懸氏邑宰乃從於今地而養老焉  
 嗚呼久亮之為人剛毅不屈兼善武技少而能勉老而  
 能壯處困厄之際而全孝子之志今茲寶曆四年甲戌  
 十二月十二日終于家享年八十有二葬藤掛山永勝

丹波志



寺云予自少與男正衆相善於是正衆具其狀請銘於  
予々不文不不朽其功哉特爲感情有餘不敢辭遂係  
此銘云

孝乎維孝 竭カ致身 厄不換節 危不忘親  
壯志耿光 雪耻一新 濟々多士 何具特真

正五位下 伴産威撰

明治四十一年七月二十三日丹波ノ名物ト呼バル  
、大椽見ントテ君尾山寺ヲ出ヅ前夜ヨリ寺ノ下  
男ニ就キ案内者ヲ得シヲ乞ヒタレバ下男ハ寺  
ノ境内ニ住メル誰レ彼レ頼ミ呉レタルニ應ズル  
者無シ因ツテ二町計リ下ニ住メル木挽ノ若者ヲ  
頼ミ呉レタリ一旦ハ諾ヒシニ来リ云フ様春秋ノ

上林村

頃ナラバ見エ行ク人モチヨイ〜アリテ道モ開  
キアレド此ノ頃ハ生ヒ繁レル最中ニテ連モ行カ  
レズ良シヤ行クニシテモ手袋脚半ニ身ヲ固メザ  
レバ到底行ケストテ吾ガ行ヲ止ム尚行キ度キ心  
地スルニグ賃銭ハ如何程ニテモ出スベケレバ是  
非ニモ頼ム左ラバ賃金ニ十五銭貰ヒタシト云フ  
ニブ三十銭與ヘント云フ若者諾シテ身仕度ヲ爲  
シ録ヲ手ニシテ先導ス便浴衣一枚ニテ具ノ後ニ  
隨行ス五六町行ケバ舞鶴灣見エ漸ク進ニ漸ク因  
難ナリ熊罴蛇菴ナド掩ヒ茂レル中僅ニ狐兔ノ来  
往スベキアルノ三十町許リ進ミタル處枯ノ切株  
アリ又ニ町許右ヘ行ケバ芝生山アリ若者言フ是

丹波志



ハ高雄山ナリ舞鶴及ビ松尾山ヲ俯見ス切株ノ上  
ヲ左ハ十町許荊棘樸檜ヲ推別ケ切り開キ或ハ落  
行シ或ハ枝ニ縋リテ跳行スルトニ町許下リ卒  
シテ大椽ノ下ニ達ス手モ足モ刺痕針迹ナリ漸ク  
心ヲ静メ身ヲ休メテ熟視スルニ此ノ樹ニシテ是  
丈ノ大ナルハ又ト有ルマシ記念ニセバヤト案内  
ノ若者シテ葛ヲ斬リ其ノ蔓モテ繩ニ換ヘ周圍ヲ  
度ラシムルニ優ニ七尋ハアリ一尋ヲ五尺五寸ト  
ス故ニ此ノ樹ノ周圍ハ三丈八尺五寸アリト知ラ  
ル高サハ見積モリ三十間アリ其ノ幹ハ十間計リ  
ナリ枝ノ張り三十四五間ハアルベシ若者云フ近  
年迄々老衰ス来リ者ルモノガ頷ニスルトカ置物

上林村

ニストカニテ厚皮ヲ剥キ取り又ハ膚皮ヲ削リテ  
耒觀ノ年月日時地名人名ヲ記載スルアリ云々殆  
ト完膚ナカラシムルノ悲惨嗚呼此ノ老木ヲ如何  
ン冀クハ柵ヲ環ラシ保護ヲ厚フシテ天壽ヲ全フ  
セシムルモノナキ乎深谷ノ一名物ヲ矢フハ寒心  
ノ極ニコソ若者又云フ實ハ五六石多キハ八石モ  
アル年アリ團子ニシテ喰フベシ先年是レヲ伐採  
セシトスル者アリシガ鋸ヲ用レバ鋸折レ斧ヲ加  
フレバ斧碎ケタルニ驚キ爾後復タ伐採ヲ云フモ  
ノ無シ神トシテ崇メおとちさんト呼ビ神酒神饌  
ヲ供シ福ヲ祈ルモノサヘアリト熟視スレバ穴ノ  
處ニ神酒德利アリキ

母波志









大榎 柱圍(中丈) 三十六尺  
 高 九世間  
 千五百年 物 幹 九十間  
 枝張 九世吉間  
 一、枝回 五丈三寸八分  
 二、枝回 六尺八寸  
 三、枝回 二尺三寸五分

トナリ  
葉

京都府立総合資料館所蔵



君玉山寺ノ登路



上林村

奥上林ノ深山窮谷中五泉ノ谷ト上林本谷トヲ別  
 テル處ノ公尾山ニ光明寺ノ存スルアリ君尾山ヲ  
 以テ山號トシ一千二百九十年ノ歴史ヲ有セル古  
 刹ナルモ剝蝕壞破ソノ傾ヲ失フ傳ニ曰ハク二千  
 二百三十年<sup>明治初</sup>前<sup>年</sup>天武天皇ノ御宇ニ役小角末住  
 シ理源太師之ヲ中興シタルナリト其ノ草創ニ至  
 リテハ聖徳太子トシテ崇敬セラレ遠近ノ賽者絶  
 エザリシニ今ハ住持ノ僧サハ無ク山下ノ老僕香  
 華燈火ヲ献スルノミ老僕古記ヲ示シツ、曰フ此  
 所本寺ヨリ八津合ノ寺所ニ至ルノ間峰トナク谷  
 トナク七十二個寺ノ堂塔伽藍ヲ以テ充タサレ寺  
 領モアリ密附モアリテ太夕盛シナル事ニテ此ノ

丹波志



山ノ下ナル真野ニハ真野ノ大修行場アリ四方ヨリ群集スル僧侶夥シク佛道弘道ノ根源地ト申シマタ應仁ノ乱ニモ天正ノ乱ニモ傷害セラレ衰運ニ逢ヘルヲ上羽出羽守カ領主トナリテ之ヲ見兼ネテ修繕ヲ加ヘ寄附數多進メタルハ今明治三十年ヨリ三百年前デス室所將軍ノ時代ニ當ルテス其ノ後高田豊後守カ上林ノ城主トナリ亦奇領ヲ附ケ幕府徳川ノ時ニ至リ藤懸永勝百方盡カレ以テ舊容ヲ維持セリ維新後ハ又之ヲ顧ミルモノ無ク無檀寺ノ衰レサハ何處モ同シ幸ナル哉山林ニ里四方ノ所有アリテ保護方ヲ得タル故是レテ持テマス云々今、本堂ハ七十年前ノ建造ト云フ

表坂ハ故屋岡ノ小字山内ニアリテ登路十八町裏坂ハ五津合ノ小字大町ニアリテ三十町表坂ハ路一條ニシテ行クニ易シ裏坂ハ細逕ニシテ樵蹊相交ハリ歩ニ送フ山内ヨリ登ルテ四町ニシテ制札ヲ着ル

定

一竹木ヲ伐ルテ 一銃獵ヲ爲ス 一建物近傍ニテ用ルテ  
 右條々山内ニ於テ固ク禁止ス 明治三十五年五月  
 急坂盡クル所ニ仁王門アリ天下ノ逸品ト評セラ  
 ル、建造彫刻ニテ國寶トナル制札アリ  
 定  
 一建物ヲ汚瀆又ハ毀損スルテ 一喫烟ヲ爲ス

上林村

上林村  
 表坂  
 志



一 根ニ火ヲ用ル<sub>一</sub> 一 土足又ハ履物ノ儘上ル<sub>一</sub>  
 一 建物ニ樂書スル<sub>一</sub> 一 廣告等ノ類ヲ帖付又ハ打付クル<sub>一</sub>  
 右條々 樓門ニ於テ禁止ス 明治三十七年五月 京都府  
 門ヨリ一町ニシテ寺 寺ヨリ二町ニシテ本堂  
 コノ間石燈數百級 拾フテ登ル夏日ノ往來頗窘  
 ム 本堂七間四面尾ヲ以テ葺ク 龍獅柱楹ニ活  
 躍佛龕極メテ古貴 兩邊ニ聯アリ 聖徳太子ニ  
 所草創 子々親言以爲本寺 何ゾ文句ノ通俗ナ  
 ル  
 堂ノ兩側ニ二株ノ老杉アリ直幹空ヲ衝ク二間四  
 面ノ堂又將ニ崩レシトス新築ノ書院崖上ニ在リ  
 南丹ノ群峰屏巖ヲ運ビ上林ノ連山蜿蜒トシテ朝

上林村

宗ス 夏夜一宿氣秋ナリ 寺ノ附近ニ二三ノ民  
 家アリ木挽木出炭燒等ノ業ニ従ヒ又山ヲ拓キ柴  
 園ヲ作り生計ニ資ス此ノ邊ノ深山幽谷ナルニモ  
 閑セズ往々菜樹豆苗ノ栽植ヲ見ル其ノ開拓ノ仕  
 方ハ火ヲ放ツテ榛莽ヲ燒燬シ畝ヲ入レ土ヲ反ヘ  
 シ適宜ニ播種シ肥料ヲ施サズ耕耘セズ自然ニ任  
 セテ收穫ス斯クシテ五六年ヲ経過スレバ其ノ地  
 瘠セラ植物實ノラズ便棄テ、又他ニ之ヲ開拓ス  
 ル<sub>一</sub> 右ニ同ジ恰農業太古史ヲ讀ムガ如シ 獵師  
 ハ眞上林ノミニテ三十名ヲ下ラズ年々一久冬獵  
 ノ獲トシテ猪鹿五六十頭ニ上ル熊ニ至リテハ僅  
 タノミ市ノ瀬山中ニテ一冬一頭ノ平均率トス



君尾山ヨリ若狹堀マデニ里強ノ距離ナルガ其間  
ニモ住民アリテ山稼モテ衣食ス 深山幽谷ノ大  
岩石下ニハ往々石薜ヲ産ス頗大ナルモノアリ細  
ヲ吊シ之ニ縁リテ下リ採ル夏蛇冬雪至リ易カラ  
ス春秋ニ期稀ニ到リ採ルモノアリ 猿類モ亦往  
々至ル其ノ住處ハ和知境大栗嶺ノ林中ナリ 雪  
ハ山麓ニテニ尺乃五六尺山上ノ積ハ之ニ陪スル  
モノト知ラル春初ノ旅行ハ注意セヨ雪崩ノ爲ニ  
生命ノ危殆アリ 大山崩所謂洞ノ出タト云フ  
モ古来数次アリタリ 四十年度ノ洪水モ大シタ  
モノト見ハ所々ノ瘡痕未愈エズ 熊モ子持ニ非  
レバ柔順ニシテ根リニ乱妨スルモノニ非ズ 古

上林村

時一旅客雪崩ニ逢ニ此ノ山中ノ深谷ニ陥リ洞穴  
ヲ見テ之ニ入りタルニ熊アリ駭キ逃レントスル  
ニ道ナシ則合掌シテ身ヲ委シタルニ熊之ニ害ヲ  
加ハズ數日經ル内ニ飢ウ熊コレヲ察スルモノハ  
如ク其ノ掌ヲ出シ之ヲ甜メ其ノ人ニ甜メシムル  
モノハ如シ試ニ之ヲ甜アルニ日キテ蜜ノ如シ自  
後食ヲ之ニ賣リ十數日ヲ過キ雪ノ降り息ムヲ持  
チ家ニ歸リタル話ヲ傳フ近來博物學中動物學中  
御伽話中ノ話ニ逢著ス其ノ出處ハ是ノ君尾山  
ニテノ出来トトカヤ  
養老山頂海拔六百六十五米突  
光明寺ニハ上羽丹波守及ニ藤懸家累世ノ位牌ヲ

丹波志



安置ス  
睦寄ヨリ奥ハ谷間狭斜ニシテ畑ヲシキ畑トテハ  
無シ半里ニシテ故屋岡ノ八代ニ至ラバ谷又岐レ  
右ハ古和木ノ谷ニシテ左ハ老富ノ谷ナリ古和木  
ノ方ハ一里行ケバ庄畑ニ至ル是レ古和木ノ内ニ  
シテ人家十數テアリ是レヨリ數町ニシテ逢マ夕  
ニ岐ス右ハ頭中山ニ詣ルベク頂上權現社マデ一  
里強 古和木ノ人々此ノ社神ヲ崇敬スルコト於  
與岐ノ人々ノ彌仙山ニ於ケルカ如シ西山ノ神靈  
相互ニ其ノ山高ヲ競フト云フ 岐路ノ左ナルモ  
ノハ一里半ニシテ界標ニ違ス若狹國大飯郡左分  
利村ニ下ルベシ

工林村

老富ノ谷ハ八代ヨリ一里半餘ニシテ橋ニ至リ道  
左右ニ別ル左ハ大唐内ヲ經テ國界胡麻峠ニ至ル  
頂上マデ半里餘彼方ハ丹後加佐郡與保呂村トス  
右ハ數町ニシテ又北ト東トニ分ル 北ハ小唐内  
ヲ經テ國界ナル坪峠ノ巔マデ九十町アリ三國峠  
其ノ左ニ續キテ峙ツ峠ノ彼方ハ大飯郡ナリ若狹  
ノ高濱ヨリ上林ニ來往スルモノハ之ニ是レ由ル  
東道ハ山坡崎嶇ナラズシテ左分利村トノ界ニ至  
ル  
草賀部ニ新宮神社アリ草壁親王ヲ齋キ祭レリ古  
塚アリ土人ノ口碑トシテ傳アル所ニ由レバ親王  
ノ御墓ナリト草壁ハ天武天皇ノ皇子草壁ヲ言フ

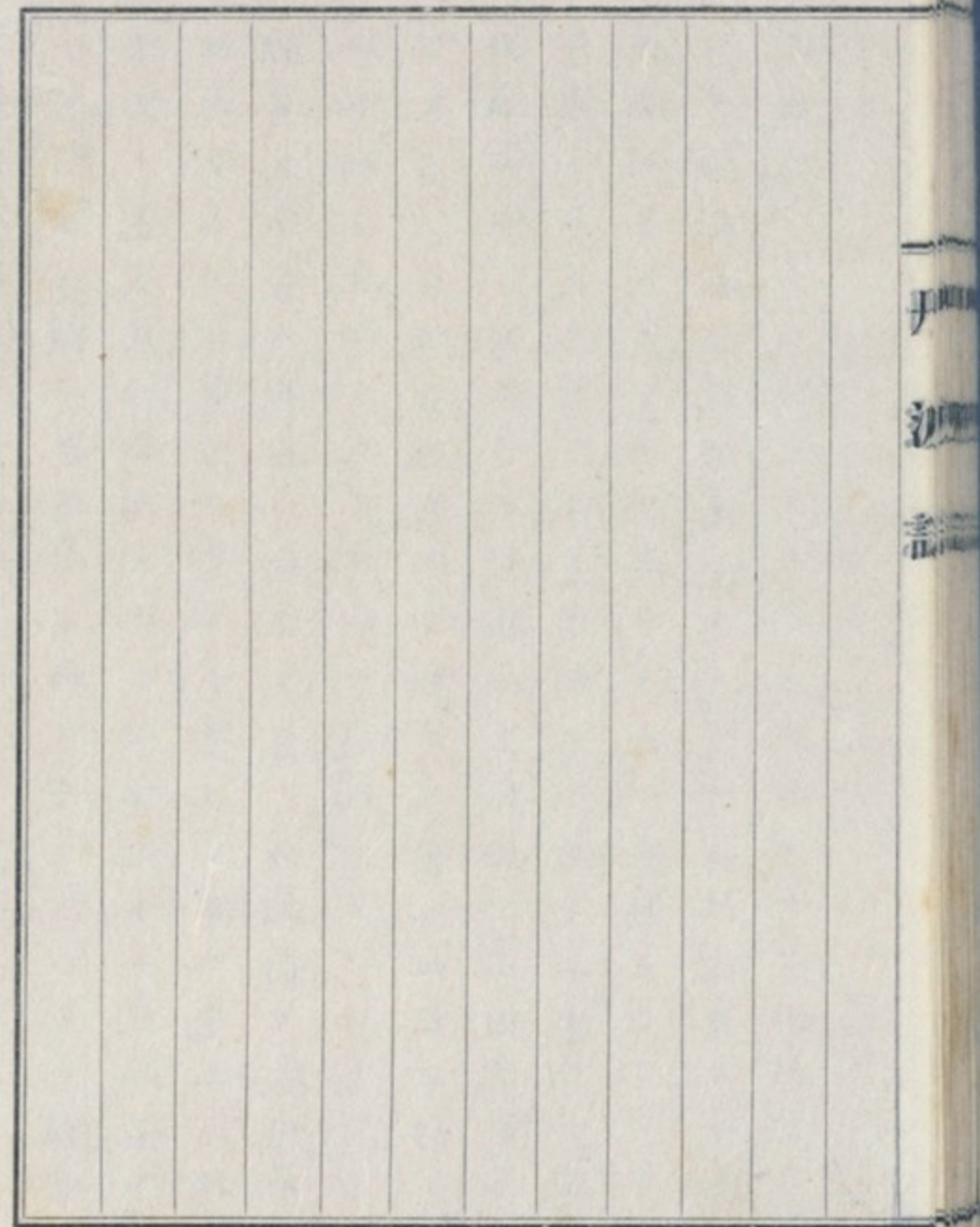
丹波志



ニヤ  
 天狗相ハ名ヲ聞クダニ深山幽谷ナルヲ推想セシ  
 ム而ルニ其ノ實ハ畑地ナラデ樹木樸楸生ニ茂レ  
 ル高地ナリハ字小屋ト呼ブ所ニ人家十戸カ離群  
 索居ノ區處タリ此所ヲ通ズル一蹊アリ一凸一凹  
 左屈右回シツ、北來田郡鶴ヶ岡村ニ達ス路程半  
 里アリ 此ノ邊ヨリ満庵ヲ出ダス  
 頭中山ハ高峻ナルヲ三山ニ頡頏シテ相讓ラズ山  
 ノ名ハ天狗ニ縁ミテ命ケタルモカ頭中乎堯中歟  
 鬼面隆鼻尖爪翼羽ノ客アリ常ニ君尾山寺ノ開山  
 和尚ト問答シテ窮詰セラレ外道トシテ喝破セラ  
 レ從前世ヲ誤リ人ヲ惑ハセタル罰ヲ科セラレ其

ノ過代ニ光明寺建築ノ用材ヲ伐リ出シテハ搬運  
 シ其ノ迹自然ト開拓セラレ平地トナリ畑地ト  
 ナリタルヲ以テ名附ケラレタリトカヤ現山ニ神  
 祠アリ詣者ハ小石ヲ祠前ニ置ク故祠前ニ磔堆ア  
 リ賽絆ノ紀念ト云フ  
 強木谷ノ庄畑ニ人家アリ椎茸ヲ製ス北來田郡ノ  
 知井山中ヲ第一トシ同郡ノ上知知ト庄畑トヲ第  
 ニ位トス天然製ニテハ六割ナルモ人工製ニテハ  
 九割八分ナルヲ以テ府ヨリ之ヲ獎勵セリ  
 支那輸出百九十萬圓 全國ヨリノ分 内丹波産三十萬  
 圓 明治三十九年





京都府立総合資料館所蔵

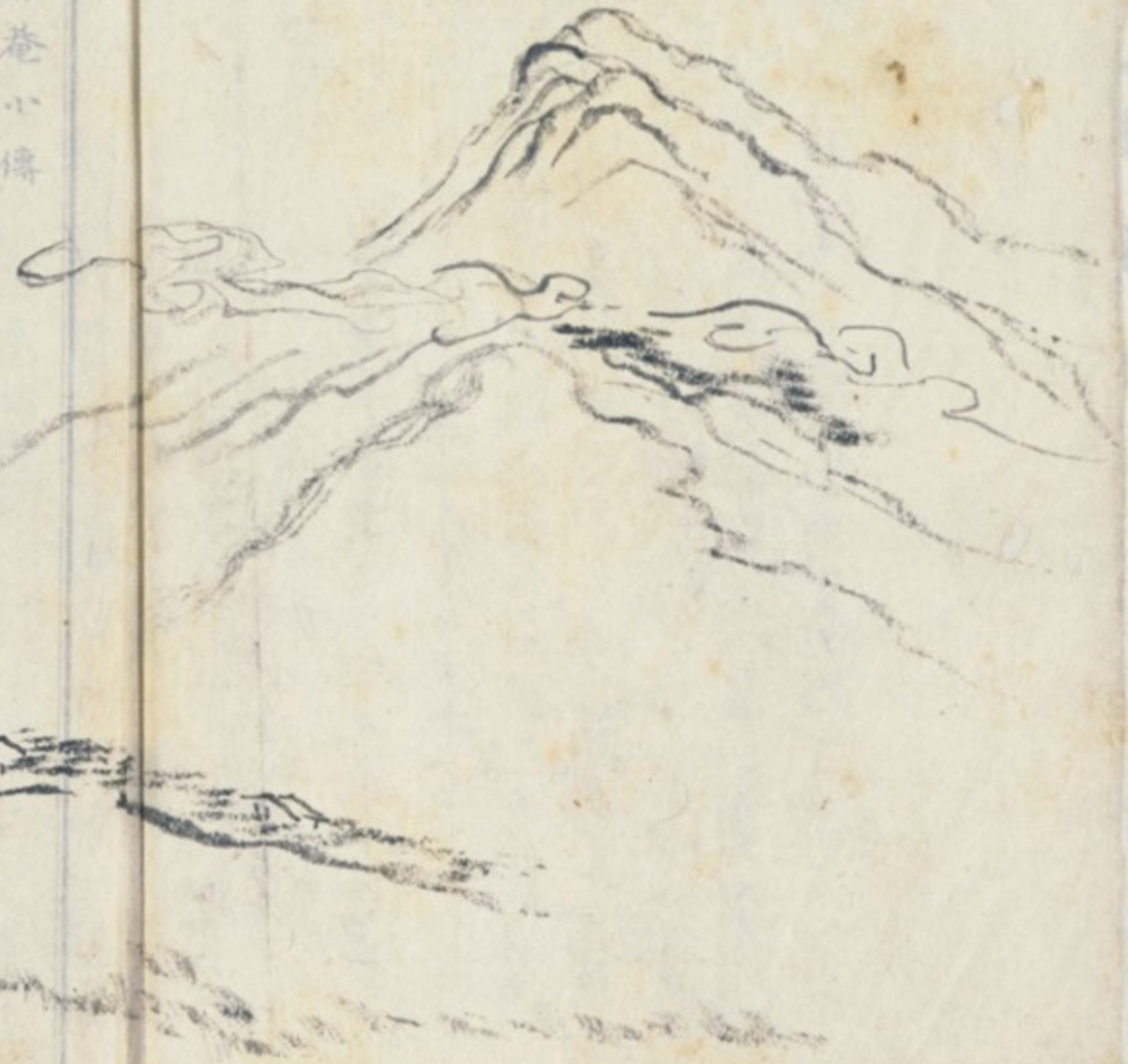


上林村

上林竹菴心傳  
 上林又市ハ近江佐々木氏ノ裔ニシ  
 心名ハ政堂中頃越前ト呼ブ竹菴  
 福ナリ山城宇治ニ棲リ元龜二年  
 氏ニ臣タリ土呂御百石ノ地ヲ賜ヒ  
 ナリ長湫ノ役ニ從軍シテ敵首ニ殺  
 賜ハリ槍一本ヲ法ハテハ用射  
 上國ニ縁アルヲ以テヤ宇治ニ還リ住マシム徳川  
 氏ノ機敏ナル役ヲシテ後年ノ用ニ供セシナリ天  
 正四年剃髮シテ竹菴ト改名ス宇治ニ植ウ宇治ノ  
 茶園古采橋東ニアリテ森祝朝日等有名ナリ竹菴  
 ハ宇治橋ノ西ニ於テ拓開栽培ス地久世郡ニ屬シ

上林村志

天狗畑





上林村

上林竹菴小傳

上林又市ハ近江佐々木氏ノ裔ニシテ上林村ニ生  
 ル名ハ政重中頃越前ト呼ブ竹菴ハ入道シラノ名  
 稱ナリ山城宇治ニ移リ元龜二年參河ニ到リ徳川  
 氏ニ臣タリ土呂郷百石ノ地ヲ賜ヒ岡崎ノ街吏ト  
 ナリ長湫ノ役ニ從軍シテ敵首ニ級ヲ得テ感狀ヲ  
 賜ハリ槍一本ヲ添ヘテ岡崎ノ町吏トナル其ノ  
 上國ニ縁アルヲ以テ宇治ニ還リ住マシム徳川  
 氏ノ機敏ナル役ヲシテ後年ノ用ニ供ヒシナリ天  
 正四年剃髮シテ竹菴ト改名ス宇治ニ植ウ宇治ノ  
 茶園古采橋東ニアリテ森祝朝日等有名ナリ竹菴  
 ハ宇治橋ノ西ニ於テ拓開栽培ス地久世郡ニ属シ

上林村志

上林竹菴





宇治ニ非ルモ猶宇治名産トシテ天下ノ絶品トナ  
シリ竹菴ノ明能ク開ケタリト謂フベシ自後髪ヲ  
剃落シテ茶師ト称シ天下ノ事ニ関セザルモノ、  
如シ明智光秀ノ乱ニ徳川家康公和泉ノ堺ヨリ京  
ニ還ラントシ途中織田右府ノ薨ヲ聞キ其ノ路塞  
ガリ通セザルヲ慮リ如何ハセント兎角セラレ、  
時本多正信ノ計ヲヒニテ竹菴ヲ語ラヒニ竹菴  
直ニ百人計従ヒ水津川ノ邊ニ迎ヒトシテ来リ茶  
内ニテ多羅尾ガ館ニ入レ申レ又走セ歸リ徳川殿  
ハ此處ニ来リ給フベシト言ヒ觸ラセ川ノ上下ニ  
篝火許多焚キ守リレカバ明智方ハ誰カサレテ徳  
川殿逃ヌナトテ亦来リ守リシ程ニ其ノ計ニテ事

上林村

ナク伊賀ヲ廻リ参河國ニ歸ラセラレケリ正信ハ  
此ノ時宇治ニ寧タリシナリ秀吉薨シ畿内乱ル伊  
井直政有候ヲ爲ス竹菴隨フ榊原康政ニ遭ヒ宇治  
ヨリ伏見ニ還ル家康公之ヲ稱譽シ慰メテ手カラ  
熨斗ト息命丹ヲ賜フ慶長庚子ノ秋東西ノ軍起ル  
ト聞クヤ十三騎百三十二卒ヲ引キ連レ伏見ニ躡  
リ曰ハク我内府家康公時ノ内大臣タリノ恩ヲ受クル久シ請伍符  
ヲ得テ城ニ入り節ヲ效サシ將々鳥居元忠辞シテ  
曰ハク予ハ茶屋ナリ去ツテ生命ヲ全フセヨ竹菴  
曰ハク否我嘗テ意ヲ決ス危ニ臨ニテ去ルハ人倫  
ニ非ズ請フ茶ヲ黄泉ニ點セント百方慰諭スレド  
モ去ラズ且自盡セントス元忠其ノ志ヲ觀テ城ニ



入レ共ニ守ル竹庵大茶筧ヲ製シテ徵拜トシ菑布  
 ラ以テ帕トシ西軍ノ来リ伐ツヲ待ツテ奮闘力戰  
 終ニ大鼓廓ニ死ス鈴木善八郎之ヲ誡ス年五十一  
 三子アリ長子某ハ林藤四郎ノ養子トナリ元和元  
 年高木正次ニ隸シ大坂ニ戰死ス次ハ某家康公ノ  
 子秀康ニ從テ戰死ス林伊賀ト呼ブ次ハ政信父  
 死スルノ年逃レテ高野山ニ入り中性院ニ住セシ  
 カ徵ニ應ジテ出デ板倉勝重ニ隸シ又兵衛ト呼ブ  
 大坂ニ役ニ前將軍ノ賄方トナリ切ヲ以テ邑三百  
 石ヲ賜ヒ一萬三千石ヲ支配ス峰頂ト云フ茶師十  
 三名ノ頭役トナル維新前マデ茶ヲ徳川家ニ上ル  
 上林家ヨリ上ル所ノ御茶壺ナルモノ道中警蹕シ

上林村

大名タリトモ逢ハバ下乗セガルヲ得ズ餘談ナル  
 ヲ以テ畧ス 寛文六年朱印ヲ賜ヒ十二月三日老  
 中ニ茶ヲ賜フ  
 上林川沿岸ノ田畑ニハ蕎麥ノ産アリ 米ハ大凡  
 平年一千石ヲ糶ス繭生絲綿ヲモ産ス且ツ薪炭木  
 材ノ産モアルニ猶具土人ノ副産業トシテ造酒業  
 ニ搗米業ニ從事シ勞役ヲ京阪地方及ヒ播州具ノ  
 他醸酒業ノアル地方ニ嚮ルモノ夥多ナリ其ノ業  
 ニ鍊熟シタルモノハ一冬奉間ニシテ百餘圓ヲ懐  
 ニシテ歸ル者ナルモノ不煉熟ノモノサハ數十圓  
 ラ家苞ニス蓋男兒ハ乳臭ノ時ヨリ見慣レ聞キ慣  
 レ筭ニノ天性トナリテ勉ト儉トヲ相伴ハセ恰鴻

母  
 皮  
 志



雇ノ時期ヲ差ハズ雲路ヲ未往スルガ如ク又云鳥ノ舊巢ヲ尋ネテ就クガ如ク各自常主アリテ之ニ赴クアリ之ヲ百日稼ト云フ

明治二十九年ノ水害ニハ近年希有ノ事ニテ四百六十町歩ノ田圃ヲ荒蕪ニレ砂礫ニシタリ家屋ノ流失物品ノ損壞等ヲ積算スレバ十萬八千七百餘圓ト注セラル復舊工事費金九萬七千百餘圓ト簿上セラル猶四萬七千四百餘圓ノ地方稅補助ヲ仰ゲリ此ノ損害ノ上ニ負擔ノ巨額ナルアリ三十年四月以後ハ食物ノ供給ヲ如何ニセント苦慮セシカ勤儉ノ風俗ハ此ノ天災ニ折テ勝テ三十年夏期ニ至リ植ヘラルモノハ田業ニ就キ植ウル能ハ

上林村

ナルモノハ田ヲ舎テ山ニ樵シ他郷ニ出稼シテ各自生計ノ途ニ上レリ案ヅルヨリハ産ミノ昂サトハ此ノ事テストハ土人ノ著者ニ答フル同一辭ナリシ



物部村

物部村 大字 物部 白道路 新庄 西坂  
 東ハ西八田村吉美村ニ界シ西ハ山脈ヲ間テ、丹  
 後加佐郡ニ接シ南ハ小畑村以久田村ニ連リ北ハ  
 志賀郷村ニ通ズ  
 和名抄ニ出デタル物部郷ニシテ今ヤ四大字ヨリ  
 成ル地ハ郡ノ西北端ニ位シ山地多ク一山嶺ヲ隔  
 テ、丹後ニ接シ平野ヲ以福知山ニ接ス古来稱呼  
 一ナラズミのベト云ヒも人ベト云ヒ迄未ミの、  
 ベナド唱フ郵便局高等尋常小學アリ産物ハ米穀  
 漆櫃桑相錯ハル位田ノ平野ト相連ナリテ膏腴ノ  
 名アリ戸數ハ六百九十三 人口一千六百七十三男  
 一千一百九十四女 合計三千三百十四人 明治

物部村志



九年ニ於テ三百少餘ヲ有セリ

京都府廳二十二里十四町 郡役所(綾部)二里十六

町 面積九千三百六方里 耕地田三百五十八町

八段 畑百二十四町 山林二百五十一町九段

宅地二十八町 其他九町

高二千五百四十六石二斗七升二合四勺

内 八百二十石二升三合 柴田河内守知行

七百三十二石三斗五升二合五勺 安部攝津守知行

二百八十石六斗八升六合八勺 綾部領

七百十二石六斗五升五合 柏原領

五斗六升五合一勺 同新田高

大字 白道路 元祿算高七百四十一石 文久年度

改七百五十石五斗六升

内 六百五十四石四斗五升 藤懸監物知行

九十六石四斗一升 園部領

大字 古名赤目坂 西坂 寛政度五百五石二斗二升

改九百〇七石九斗五升八合 赤目坂

内 五石二斗二升 藤懸監物知行

五百石 藤懸千之助知行

二十七石八斗九升四合 安部攝津守知行

大字 新庄 古高五百五十一石 文久度五百六石五斗八合

内 十五石八斗六升 新田高 合五十石 綾部領

五百石 織田攝津守知行

小字 小田 奥新庄

母 皮 志



式内、高倉神社、高倉今ハ高藏トナル齋神武内  
宿禰、箕掃山鎮因テ箕掃明神トモ云フ貞觀十一  
年授物部箕掃神從五位ヲトアルハ是レナリ須波  
伎ト書ケルモ亦同シ

祭日舊曆三月十八日 標的ニ鬼ノ字ヤ馬ノ字ヲ  
書キ七八歳ノ童ヲシテ射シム鬼退治ノ式ト云フ  
賴光鬼退治ノ祈願アリ退治ノ後凱旋式ヲ此所ニ  
行ヘリ石清水八幡宮モアリ共ニ賴光ノ再建ニ成  
リ爾後衰頹シテ今ノ社トナリタリトカヤ  
高藏寺高屋寺ノ古刹アリ曾我五郎ノ墓ト呼ブモ  
ノ路傍サレ入りタル處ニアリ外ニ一基天平式ト  
モ認ムベキモノアリ



櫛實

櫛葉

櫛樹

漆樹科落葉喬木  
雌雄異株  
雌雄混花モアリ  
黄櫛染ハセリ  
夏衣料

くさしり紅糸 古歌アリ



漆ノ木モ樞ノ木モ有益有利ノ木ナリ山中溪間ニ  
 能ク繁茂ス昨二十九年ヨリ今三十年ノ相場トシ  
 テハ樞十貫目金九十五銭乃至壹圓漆ハ小一本三  
 銭大一本五銭之ヲ製出スルニハ小刀ニテ樹身ニ  
 刻ミヲ入レ刀痕ヨリ流レ出ヅル汁液ヲ取ル故ニ  
 實價ハ此ノ液ニアルナリ樞ハ漆ニ似テ葉幅狭ク  
 實ヲ産ス此ノ實ニテ蠟ヲ製スベシ實價ハ即チ此  
 ノ實ノ價ナリ製造人ハ他所ヨリ来ル毎年五月  
 ヲリ十月ニ至ルノ間ニ刻ミヲ入レ耳搔キノ如キ  
 器ニテ搔キ採ル毎年其ノ期ニ至先ガ子樹ノ在ル  
 所ニ就キテ檢定シ相場ヲ以テ預買ス漆樹ハ田間  
 ニ散栽スル多シ極樹ヲモ栽培ス是レハ漆ノ

甲  
 乙  
 丙  
 丁  
 戊  
 己  
 庚  
 辛  
 壬  
 癸  
 子  
 丑  
 寅  
 卯  
 辰  
 巳  
 午  
 未  
 申  
 酉  
 戌  
 亥  
 十一  
 十二  
 十三  
 十四  
 十五  
 十六  
 十七  
 十八  
 十九  
 二十  
 二十一  
 二十二  
 二十三  
 二十四  
 二十五  
 二十六  
 二十七  
 二十八  
 二十九  
 三十  
 三十一  
 三十二  
 三十三  
 三十四  
 三十五  
 三十六  
 三十七  
 三十八  
 三十九  
 四十  
 四十一  
 四十二  
 四十三  
 四十四  
 四十五  
 四十六  
 四十七  
 四十八  
 四十九  
 五十  
 五十一  
 五十二  
 五十三  
 五十四  
 五十五  
 五十六  
 五十七  
 五十八  
 五十九  
 六十  
 六十一  
 六十二  
 六十三  
 六十四  
 六十五  
 六十六  
 六十七  
 六十八  
 六十九  
 七十  
 七十一  
 七十二  
 七十三  
 七十四  
 七十五  
 七十六  
 七十七  
 七十八  
 七十九  
 八十  
 八十一  
 八十二  
 八十三  
 八十四  
 八十五  
 八十六  
 八十七  
 八十八  
 八十九  
 九十  
 九十一  
 九十二  
 九十三  
 九十四  
 九十五  
 九十六  
 九十七  
 九十八  
 九十九  
 一百



不作ナル年ノ補充トス極ノ不作ナルトキハ極ニ  
テ補フ此ノ輪回ノ獲利法ハ古来老農ノ經驗ヨリ  
来リタル副産經濟トス左ニ示スモノハ櫛作ノ根  
源地トモ稱スベキ所ニシテ其ノ農家ヲ救済スル  
ノ效アルトニ係カル

豊後ノ國日田郡川内村ノ庄屋半藏ナルモノ櫛ノ  
利多キヲ知り村内ノ戸毎ニ説キ木數ヲ小作人家  
別ニ割り附ケ空地ノ野山或ハ山柵井路ノ兩端等  
ニ植エシメ自身コレヲ看督巡視セシニ其ノ效著  
レ十年ニシテ村費ヲコレヨリ支給シ十八年ニシ  
テ終年貢ノ半額ヲ補充スルトナレリ同郡ノ山  
田村モ同規モテ立計シ享保十七年山陽南海西海

ノ諸道蟲害ニテ飢饉ノ患ニ罹リシモ右ノ二村ハ  
資ヲ櫛實ニ取りテ米麦ニ代ヘ以テ慘禍ヲ免レ餓  
芋トナルモノ無カリキ此ニ於テ他村他國コレヲ  
羨ミ後年逐次コレガ栽培ヲ爲スモノアルニ至レ  
リ昔年ニ於テハ大化ノ法トシテ上戸ハ桑三百  
本漆百本以上中戸ハ桑二百本漆七十本下戸ハ桑  
百本漆五十本以上ヲ植ヘシメタリ此ノ村々ノ爲  
ス所ハ此ノ遺法ニ適合スト云フベシ  
櫛ヲ仕立ツルニハ接木ト實蒔トノ二法アリ而シ  
テ接木ヲ佳良トス又木ニ雌雄性アリ雄木ハ結實  
セズ雌木ハ能ク實ノル終テ植立テシヨリ四年位  
ヲ経テ木ノ廻リ八九寸ニ至ルヨリ實ヲ結ビ初メ

京都府立総合資料館所蔵



十年ニ至リ盛シニナル初ノニハ肥料ケ許ヲ施シ  
除草スル等ノ煩累ハ免レザルモ成木ノ上ハ山野  
ニ捨置キ日光ト雨露ノ恩ニ浴ビシムル而已ニテ  
自然ノ收穫アリ植栽法ヤ接枝方法ニ種類アレド  
モ畧ス

蠶ノ實ヨリ製出スル所ノ蠶ハ蠶燭用トナリ髪油  
用トナル石鹼又ハ蠶型等ノ用トモナル石油ノ用  
ヒラル、ト散髪束髪等ノ行ハル、ヨリ蠶ノ需要  
ハ大ニ減スル様ナレドモ開明ノ風ハ田舎ヲ吹キ  
廻ハリ都會ニ減ジタル蠶燭ノ需要ハ地方々々ニ  
増シ昔時之ヲ用ヒガリシ片田舎ニ具ノ供給ヲ促  
サレ不景氣トカ恐慌トカ云フヲ無シ殊ニ石鹼ヲ

加ヘテ蠶型ヲ造ルナド文明世界ノ必要品トナル  
ノ傾向アリ又海外ノ輸出モアルヲ以テ蠶樹増  
植ノ必要ヲ感シ大坂ノ蠶問屋ト直取引ヲ爲スモ  
ノサハ之アリ  
蠶ハ本邦固有樹ニシテ木蠶モ亦本邦ノ特産タリ  
今明治四十年ノ産出高三百萬圓ニシテ海外輸出  
一百万圓内外ナリ享保年間ニハ諸藩競フテ之ヲ  
製出シ之ヲ以テ年貢ニ換フルヲ百姓ニ許ス等  
特勸ノ效顯ハレ産出巨額ニ昇リシニ維新以後工  
賃ノ騰貴及ビ石蠶ノ輸入ノ爲ニ漸次其ノ産額ヲ  
減ジ目下主産地ト稱スベキ九州四國中國ニ限局  
スルトハナレリ殊ニ中國ニ於テハ丹波ノ他

京都府立総合資料館所蔵



小部分ニ止マリ其ノ用途ハ蠟燭髪附油等ニ製ス  
 ル材料タルニ過ギザリシガ木蠟カ艶出シ使料ト  
 ナリ清淨蠟燭擬造使料トシテ唯一ノ商品タルヲ  
 発見セラレ之ヲ歐米ニ輸出スルニ至レリ故ヲ以  
 テ仕向ヶ地ニ於テ聲價ヲ博シ前途頗有望ナリ  
 木蠟價格 百斤ニ付金拾五圓 三十四年 金四拾圓  
 三十六年 金貳拾五圓 今四十年前年  
ヨリ居坐リ  
 海外輸出價格平均相庭金貳拾五圓  
 製造法ハ舊時ノ楔式ナルヲ以テ壓カ十分ナラズ  
 産額ノ多料ヲ期シ難シ故ヲ以テ水壓式搾取法ヲ  
 採用セシメント弊勵ス是レ農商務省ノ方針ト云  
 フ

漆製造人ハ福知山ノ西ナル宇小田ノ漆製造ヨリ  
 来ル

塩見爲藏

塩見爲藏孝養之儀取調具狀書

一弘化三年午二月天然瘡ニ罹リ一眼トナリ成  
 長スルニ從ヒ農業ニ從事シニ十二歳ニシテ  
 眼病ヲ煩ヒ終ニ盲目トナレリ然ルニ生家元  
 来貧窮ニシテ他ノ藝ヲ學ブ不能依テ晝ノ間  
 ハ他ノ被雇米或ハ麦搗等ヲ業トシ夜ハ又被  
 雇トナリ肩ヲ打子足ヲ撫テ内ニ在ルトキハ  
 繩ヲナヒ平素酒ヲ好ムト雖極メテ多量ヲ不  
 用日夜無懈怠様ギ兄幸助ノ貧苦ヲ助ケ加之

明  
 成  
 志



慶應三年ノ秋ヨリ一人ノ老母ヲ引負ク分家  
 ヲ爲シ之ニ孝養ヲ爲スコト尋常ノ不及處ナ  
 リ中孰幸助ハ貧苦ノ上病ニ罹リ明治三年六  
 月ニ没ス爲メニ聊ノ所有地モ他ハ賃入トナ  
 リ己ニ餘人ニ不屬慶第宇兵衛ナルモノ兄幸  
 助ノ死蹟ヲ續キ家名相續スルニ際ニ爲藏ガ  
 夜稼ヲ得ル所ノ貯金ヲ以テ該地ヲ受戻シ第  
 宇兵衛ニ與ヘ平日兄弟睦敷ク且ツ老母ニ事  
 ハ志操不慶事十有七年客十六年十二月ニ至  
 リ母病死スモ病臥中篤ク看護致シ且死後ハ  
 至リ尚吊祭不怠ニテ業ヲ勉ムルト如前日右  
 之通候褒賞條例第二項相當者ト相見込候間

此段具狀候也

明治十七年十月十日 何鹿郡柳部村父村聯合長 平和善左衛門

人と生れてハ親ニ孝行を尽すことよき道なれ  
 ど古より其道を尽す人乃世にまれぬこと  
 と嘆ハしられぬ何鹿郡柳部村表境足爲村と  
 人少人ありたるありし四十五六とせありし  
 家回より貧しくして不意に母ハひ乃身を病ど  
 結く親ニ孝行乃通をつとめて足身ニ愛敬ヲ誠  
 を好ぶなど世に稀なるありし一昨明治十七年乃  
 冬の次朝廷ニきあしめしめてある一昨明治十七年乃  
 おくも縁乃緩の白浪の褒賞を賜うて為存乃徳行を旌  
 表せられ又世に人ヲ模範とふるまで賞賜せられけること

京都府立総合資料館所蔵







ラシヤ儀山威ヲ振フテ一喝シ攝住レテ曰ハク這  
 箇我慢ノ小僧ト之ヲ斥出ス滴水亦出セテ頭  
 柱角ニ觸レ肉破レ血流ル儀山顧ミズ滴水涙ヲ拭  
 ヒツ、禪堂ニ歸リ門扉ヲ推スニ曼然トシテ聲ア  
 リ滴水忽チ醒悟シ直ニ躍ヲ回ラシテ入室ス儀山  
 微笑シテ頷スコレヨリ數段ノ因縁話頭ヲ以テ朝  
 參暮請幾多ノ鈿匙ヲ受ケテ遂ニ宗旨ノ蓋奥ノ究  
 盡スルコトヲ得タリ  
 文久二年 京ニ入り天然ノ西堂ニ神シ法兄義堂  
 ニ代リテ僧林ヲ領シ日夕四末ノ雲衲ヲ接ス 元  
 治元年七月二十日薩州ノ兵大舉シテ嵯峨ニ迫リ  
 遂ニ天龍ヲ燒ク 滴水便ケ祖堂ニ入り開山國師

ノ靈像ヲ負フテ林中ニ遁逃シ端ナク大隨奴火洞  
 然ノ話頭ヲ透得ス 開山ハ夢窓ナリ 天龍兵燹ニ罹ルノ  
 翌日薩軍ノ將村田新八露又ヲ提ケ兵士二十餘人  
 ヲ率ヒ金剛院ニ来リテ使者滴水ヲ召ス滴水到ル  
 新八傲然トシテ長番士ガ天龍寺滞在中ノ事情ヲ  
 詰問ス 滴水曰ハク伽藍燒却ノ事必竟朝家ノ命  
 ニ出ルヤハ夕子等ガ意ニ出ルカ新八曰ハク然リ  
 朝命ヲ奉ジテ賊巢ヲ燒蕩シタルノミ 既ニシテ  
 又曰ハク天龍ノ鳥有ニ歸セシハ賊徒ニ宿ヲ貸シ  
 タルノ謝禮ナリ笑止テ萬 滴水曰ハク王事ノ爲  
 トテ寺門ヲ借ラレ却テ朝命ヲ以テ燒却セテ又  
 何ノ是非カアラン 後十年ノ役新八飛彈ニ當リ

京都府立総合資料館所蔵



テトル 滴水コレヲ聞キ人ニ語リテ曰ハク彼嘗  
 テ山僧ヲ欺キ得タリト云ヘドモ因果ノ理專ゾ能  
 ク欺クコトヲ得ンヤ  
 明治四年滴水天龍寺ニ管長タリ偈アリ曰ハク天  
 龍寺住無堂宇不恥揚岐屋壁疎吾徒專一修斯道附  
 屬國王其舍諸コ、ニ於テ士衆瞻拜シテ市ヲ爲シ  
 龍洲峨山龍水東是年及ビ山岡鐵舟島尾得菴ノ如  
 キ皆具ノ鏈下ヨリ出ヅ  
 滴水常ニ門人ニ示シテ曰ハク鵠林老師曰フ論語  
 ハ儒家第一ノ好書ナリ若シ論語一部ヲ見徹著セ  
 スンバ未ダ禪門ノ作家タルヲ許サズ汝等コレヲ  
 思ヘ又曰ハク汝等假令祖師教段ノ因縁ヲ穿鑿シ

テ禪ヲ會シ道ヲ解スト云フト云ヘドモ親シク世  
 尊雪山六年枯坐底ノ境涯ニ入得シテ昆蘆法身ニ  
 撞着スルニ非ンバ徒ニ我見妄想ヲ增長スルノミ  
 又何ノ用ヲカ爲スニ堪ヘンヤ  
 明治十二年春二月滴水龍洲ヲ從ヘテ東上シ湯嶋  
 ノ天澤山ニ寓シテ祖録ヲ提唱ス一日鐵舟來リ參  
 ス滴水スナハチ洞山五位ノ頌ヲ書シテ之ニ與フ  
 鐵舟コレヨリエ夫スルコト三年殆ンド寢食ヲ廢  
 レ遂ニ見徹シ來リテ見解ヲ呈ス滴水コ、ニ於テ  
 之ヲ可ス  
 滴水一日得庵ヲ訪フ對坐午餐ヲ喫シ了リテ共ニ  
 後園ヲ歩ス滴水偈一粟子ヲ拾フ得庵脚ヲ上ゲテ

京都府立総合資料館所蔵



地ヲ踏ムコト而三回シテ曰ハク是レ什麼ゾ滴水  
 粟子ヲ示レテ曰ハク這箇拾ヒ得タリト因テ共ニ  
 大笑ス 又歩ヲ移シテ水車ノ聲ヲ聞ク 滴水聞  
 フ是レ何ノ聲ゾ 得庵曰ハク近傍ニ水車アリ日  
 ニ轟々トシテ鳴ルソノ煩ニ堪ヘズ 滴水曰ハク  
 衆生顛倒己レニ迷フテ物ヲ逐フ 得庵斷テ一柳  
 ス 己ニ坐ニ還リ茶ヲ喫スルノ頃 滴水南泉一  
 株花ノ因縁ヲ舉シテ問フテ曰ハク陸直大夫底ハ  
 姑ク措ク什麼生カ是レ南泉底 得庵滴水ヲ搦住  
 レテ曰ハク且共ニ寢ントテ因テ臥セントス 滴  
 水驀ニ一拳ニ拳倒ス 又得庵ニ示ス偈アリ曰ハク  
 英雄氣宇吞乾坤何會宗風別路存白雪陽春休漫說

渙歌一曲過江村滴水又東京ニ在リ日本郷ノ神泉  
 亭ニ寓ス一日得庵錢心ノ二人相携ヘテ之ヲ訪フ  
 坐ニ一如意アリ是ハ曾テ得庵ガ滴水ニ贈ル所ナ  
 リ 得庵乃チ拈起シテ曰ハク誰カコノ如意ヲ把  
 ルモノゾ滴水曰ハク我把ルヲ解ス又亦ツヲ解ス  
 ト二人肅然タリ  
 明治十七年 滴水官命ヲ以テ林丘寺ニ兼任ス  
 林丘ハ後水尾天皇第一ノ皇女元瑤内親王ノ草創  
 ニ係リ尼御所ト稱ス明治維新ノ後ニ至リテ坊城  
 氏ノ女入りテ之ニ住シ寺中ニ蚕ヲ養ヒテ失敗シ  
 寺門大ニ頽廢ス此ニ於テ朝廷特ニ滴水ニ命ジ寺  
 ヲ舉ゲテ天龍ニ録シ之ガ修理ヲ爲サシム滴水便

丹波誌



寺境ノ一半ヲ割キ三條大政大臣ニヨリテ之ヲ  
 官ニ歎ズ今ノ修學院中ノ離宮是レナリ朝廷是ヲ  
 嘉シ金數百圓ヲ下賜セラル滴水コレヲ以テ基礎  
 トシ更ニ淨財ヲ集メテ大ニ修理ヲ加ヘ再ビ舊觀  
 ヲ呈スルヲ得タリ  
 明治二十六年春一月滴水天龍ノ任職及ビ管長職  
 ヲ舉ゲテ之ヲ辭謝ニ讓リ林丘寺ニ退隱ス退山ノ  
 侶アリ曰ハク無眼瞎禿は何緣チ任天龍二十年今  
 ヤ烏藤下山去林丘叢程要閑眠 林丘偶成ニ曰ハ  
 ク胸中有物乾坤窄腸裏無塵天地寬千嶂雨過林  
 下暮淡蘭一疏倚闌干  
 滴水曾テ林丘ノ園ヲ治メ飛泉ヲ作リソノ源々ト

シテ落ツルヲ見テ喜ブコト甚シ一日緣端ニ坐レ  
 晚饗ヲ喫シ錢眼侍坐ス 滴水飛泉ヲ眺メテ曰ハ  
 ク源泉混々不舍晝夜ト錢眼者セズ 滴水又曰ハ  
 ク源泉混々不舍晝夜 錢眼猶ホ者ナレ滴水忽チ  
 錢眼ノ胸ヲ穿シ推倒シテ曰ハク這ノ瞎禿奴ト錢  
 眼漸ク省シ起ツテ禮拜ス滴水斷チ喜ブ  
 滴水又林丘ノ園ニ蓮池ヲ穿チ自テ樂ム一夕錢心  
 ヲ隨ヘテ池畔ヲ徘徊シ誤テ池中ニ落ク 錢心大  
 ニ驚キ急ニ身ヲ投シテ之ヲ救フコトヲ得タリ然  
 ルニ滴水石角ニ觸レテ眉ヲ折チ肉裂ケ血流ル衆  
 益々驚キ醫ヲ迎ヘントスルモ地僻ニシテ良醫ナ  
 シ漸クニシテ一乘寺村ノ老醫某ヲ請ヒ來ル醫診

京都府立総合資料館所蔵



シテ曰ハク縫ハザル可ラズト此ノ醫年已ニ高ク  
 針モ又久シク用ヒザルガ爲ニ鏹ヲ生ズ醫乃チ眼  
 鏡ヲ掛ケテ針ヲ弄シ幾度カ刺シテ幾度カ遠ラズ  
 左右滴水ノ爲ニ具ノ痛苦ヲ思フ 滴水笑フテ曰  
 ハク恰モ惠山ガ破衣ヲ縫フガ如シト益シ惠山ハ  
 林丘寺ノ老尼ナリ  
 滴水相國寺ノ獨園ト交リ互ニ往來シ三十年一日  
 ノ如シ獨園ノ病篤キヤ滴水行キテ之ヲ訪フ時ニ  
 獨園竹陰ノ一室ニ ンテ白日ナホ蚊帳ヲ垂ル滴  
 水直ニ蚊帳ノ中ニ入り獨園ノ躰上ニ跨ガリ面ニ  
 相觸レントス曰ハク病篤シト聞ク如何獨園云フ  
 然リ滴水更ニ曰フ到底治ス可ラザルカ獨園曰ハ

ク然リ滴水乃チ出デ去ル

其ノ病ムヤ男爵北垣國道來リ訪ヒ牡丹ノ芽ヲ庭  
 前ニ栽ヘ且曰ハク明春ニハ花ヲ開カン滴水笑フ  
 テ曰ハク好シ衲ガ靈前ニ捧ケヨ  
 滴水遷化ノ前三日我山ソノ側ニ侍ス滴水問フテ  
 曰ハク汝天託ヲ建テ什麼ヲカ爲サント欲スル哉  
 山云フ老師ノ病瘥ユルヲ待テ大法ヲ舉揚センコ  
 トヲ請ハンノミ滴水曰ハク其次ハ如何我山云フ  
 高德ノ人ヲ舉ゲテ之ヲ管セシメシ滴水曰ハク其  
 次ハ我山一喝シテ曰ハク御心配御無用ト滴水大  
 ニ喜ンデ首肯ス 此ノ日門人等筆硯ヲ捧ゲテ遺  
 偈ヲ請フ 滴水呵シテ曰ハク這箇ノ閑葛藤何ノ

京都府立総合資料館所蔵



用ヲカ爲サン門人コレヲ請フコト再三 滴水乃  
 ナ書シテ曰ハク曹源一滴七十餘年受用不盡蓋地  
 蓋天 吐 勉旗勉旗 二十日ニ至リ遂ニ寂ス  
 滴水 家風森嚴綿密ニシテ細事ト云ハトモ之ヲ  
 苟モセズモ福德ヲ謹ミテ一紙一飯モ太夕之ヲ  
 重シク 其ノ布種ノ如キモ身ヲ終ルマデ自コレ  
 ヲ洗ヒ曾テコレヲ人ニ委セズ雜僧ノ知ラザル間  
 ニ之ヲ濯ヒ了リタリキト云フ其ノ一代ノ行履悉  
 ク後人ノ典型トナスベキナリ三十二年一月廿日  
 寂ス年七十八  
 幕府陸軍歩兵ノ名残  
 赤目坂ハ著者ガ姻戚ナル旗士藤懸永成氏ノ領地

ナリ此ノ藤懸ハ上林ノ藤懸ヨリ分地シテ一家ヲ  
 立テタルモノナルガ五百石高ノ地トシテ分封シ  
 タルニ五百五石高ナリシカバ五石文ハ年々上林  
 ノ本家ニ納メ五石文ノ民家ハ上林領民ナリキ此  
 處ニ幕府ノ陸軍編製ノ際ニ出身ミタル百姓萬助  
 ナルモノ今ハ年齢モ耆耄ナルガ壯年ノ時ハ操鎌  
 ニ従事シ筑波山ノ彼其他幕末多事ノ日東西ニ奔  
 走シ頭ニ銃丸ノ跡ヲモ留メタリ是レガ今日ノ官  
 軍ニテ勞動受創ミタルモノナリセバ社會ヨリ敬  
 意ヲモ承受スルデアロシモノヲ憐ムベシ朝敵ヲ  
 相ケタルモノ、如ク看做サル、ゾ是非ナケレ左  
 ニ幕府ノ陸軍ト其ノ事情ヲ紹クセシ

京都府立総合資料館所蔵



頃ハ嘉永三年浦賀ニ黒船見テ海内ニ警ヲ傳ハ  
 太平ノ暗眠破レテ人心洶々タル内ニ安政元年ト  
 ナリ六月二日阿蘭陀ヨリ蒸氣船ニ隻ケベル小銃  
 五百挺ヲ幕府ニ獻納シタリ是ニ於テ初メテ雷管  
 ノ銃アリ其ノ用法ヲ長崎ニテ傳習セシメタリ  
 今汝少軍制少軍役人数字可差出与改メテ可  
 以趣之ニ基テ少軍役人数字可差出与改メテ可  
 以作出与處昇平ニ底弊ニ今至生ニ以費少少  
 常ニ應行初句ニ有ニ以ニ新里辰ハニ付以後  
 凡弟ノ市ハ幕府改メテ人致割大凡半減ニ積リニ  
 亦ハ石人致之由リ別裁ニ通少軍役ノ兵賦  
 下差出与以作出与委細ニ依ニ海防新ニ行少軍

別裁  
 制抑リニ時目付ハ可差出

知行取イ分ハ五百石ニ付人千石ニ人三千石  
 十人ノ割を以テ兵賦可差出ハ 市飛取取取ニ  
 以是ノ言イ分ハ兵賦差出ハニ不及委細ニ可差  
 出五石石以下端言ハ委細ニ積リニハ  
 言石依より五石依以下ニ有ハ石依ニ付委細  
 言五石依より千石依迄委細兩ニ分言子依以上委  
 細兩差出ニハ  
 兵賦ハ兵隊ニ似テテ時常ニ差出ニハ  
 兵賦ハ年齢十七歳より四十五歳迄所用ニハ年  
 々名仕健ノ名ハ兵隊ニ可差出ニハ五ヶ年期

京都府立総合資料館所蔵



と定め右年限おまはる者交代し若くは差出の併之  
人し之は又ハ商人に存案ニ任セテ経年申立  
し候ハお苦なる  
治ノ可成又知り計より大旨く強情し若くは選ニ  
差出さるし主人ニ、ラ旅テ無頼者選ゆ候ハ年  
耳し申息傳、取ひしおとあつた所實ニお勤  
中多旨と申論し経年し弊者取可か  
兵糧し各目ハ歩兵御と可お唱し身分し候ハ勤  
取中ハ揚あし取たるべく(少揚者トハ油針兼原ニ  
て求儀し出し入をを取扱しとのを多ふ)む既隊  
一向しお用ゆ者ニ付正生服若お帯しつ孫申付  
し

佐料し候ハ其主人ニ、ニ於テ強情し取らせり  
てしむと一ヶ月を控支取りと段し若くは多  
ハ不あふゆ但勤役才官料ハ下ゆ  
是、於テ領主ハ役人ヲ領地ニ下シ代官ト協議シ  
丁壯者ヲ集メ抽籤シタルモノヲ東上セシメたり  
中ニハ志願者ヲ内々募集シタルモアリテ道中柱  
束ノ入費ヲ省キタリ萬助ハ當籤兵デアツタ  
此ノ徴兵ハ文久四年正月ニ始マリ七月ニ至リテ  
一ト先ツ終リテ告ゲ其兵壹萬人餘ヲ得タレバ之  
ヲ四分シテ一番ニ番三番四番隊トシ四十人ヲ小  
隊トシ三小隊ヲ中隊トシ五中隊ヲ大隊トシ六大  
隊ノ編制成レリ 小隊司令官ヲ歩兵指圖役ト云



二 半隊司令官ヲ 歩兵指圖役并ト云ヒ 嚮導  
 ヲ 歩兵差圖役下役ト云ヒ 押伍ヲ歩兵小頭ト  
 云フ 大隊長ハ歩兵頭ト云フヲ甲比丹教頭ニ  
 副ス甲比丹トハ蘭語ノマ、ニ用ヒ歩兵頭並或ハ  
 指圖役ニ任シ大隊長ヲ助ケテ隊ヲ監督ス  
 歩兵ノ扮装ハ紺木綿ノ筒袖襦袢ニ紺木綿ノ袴ヲ  
 着ケ真鍮造リノ脇差ヲ帶シ草鞋ヲ穿テ毎朝觸大  
 鼓ノ音ヲ聞クト均シク練兵場ニ出テ差圖役ノ命  
 令ノ下ニ集マリ階級札ノ點檢ヲ受テ體操稽古ノ  
 者ハ右ニ操銃稽古ノモノハ左ニ分レ小隊入り即  
 チ卒業ノモノハ廣場ノ中央ニ列ヲ正シテ練習セ  
 リ

飲食 各小隊ニ四個ツ、盃ノ如キ飯櫃ヲ配ル朝  
 ハ一汁香ノ物 正午ト夕飯ニハ野菜ノ類アリ  
 三日即チ朔日十五日廿八日ニハ鮮魚乾魚アリ  
 炊事掛リハ歩兵順次ニ之ヲ爲ス  
 歩兵一日ノ作業ハ朝五ツ時ヨリ夕七ツ時迄操練  
 シ夜ニ入りテ點檢セラレ而シテ寢ニ入ルヲ例ト  
 シ一六ノ日ヲドンタシ即チ休日トシ外出ヲ許ス  
 七ツ時ニ至レバ指圖役室毎ニ點檢ス彼ハ先ツ室  
 前ニ来リ何番小隊ノ改メト呼ブ此ノ令ニテ其ノ  
 室ノ小隊ハ一列ニ居並ブ次ニ指圖役番席ト云フ  
 ヲ相圖ニ歩兵一番ニ番ト順次ニ番拜ヲ名乗リツ  
 、其ノ中ニ未夕歸營セザルモノアル時ハ已ニ番



辨ヲ呼ビ終リタル兵竊ニ列後ヲ匍匐ニ行キ關席  
 兵ノ場所ニ出テ具ノ兵ノ番群ヲ名乗ルナリ指圍  
 役ハ之ヲ知ルヤ知ラズヤ是ニテ點檢滯リ無ク終  
 ルナリ  
 屋敷門内ニ番所アリテ歩兵十人許リツ、板羽目  
 ニ釵付銃ヲ立テ掛ケテ交番シタレドモ門限ニ後  
 レタルモノガ煎餅袋大福餅竹ノ皮包ナド手輕ナ  
 賄賂ヲ以テ容易ニ通行ノ點許ヲ得タルノミナラ  
 ズ夜中ノ點呼モ無キトテ初夜ノ點檢後鍊堀ヲ  
 越エテ外出スルモノ引キモ切ラズ萬助モ具ノ一  
 人ナリキ宿直ノ役人之ヲ知リ制止スレドモ甲斐  
 ナカリシ

歩兵各一具ノ主人ナル旗本ヨリ給金ヲ受ケシ者  
 ナレド旗本ニモ貧富ノ差アリ義俠アリ吝嗇アリ  
 故ニ主人ニヨリテハ一個年御定メ通り給スルア  
 リ六兩七兩ヲレブ一幾度ニカ割リ渡スアリ左レ  
 バ數一小使錢ニ窮レテ主人ノ屋敷ニ推參シテハ  
 強請レ後ニハドンタク毎ニ請求シテ主人ヲ困却  
 セシメタリ萬助モ用人部屋ニテ毎々用人ノ説諭  
 ラ受テタリ主人等相談ノ上實地ノ事情ヲ其筋ニ  
 察許レタレバ左ノ布達出デタリ  
 冬ニ方より差出ル兵賦ニ或ハ付南西月内筋出  
 シト通り石姓共ニ難儀ニ不承成極世話可成  
 ハ勿論ニル共此後右ノ者ハ中地領居及ハ底



越前定給をい外強請ケる友俊申出ル者も有之  
我々も生節より申開之趣も有之 一件歩兵多行  
ハ引引候止ハ右年季中々節之進退ニ任セ  
候、付向後右様之候中々節之進退ニ任セ  
モ歩兵多行ハ内届ラシ成ルハ致申上  
以上

五月

所軍割掛申上

然レ此歩兵モ亦人ナリ如何テ永ノ月日ヲ一文無  
シニ暮サレシヤ是ニ於テ彼等ガ從來公然タリシ  
給金請求ハ今ハ衰ジテ内容ノ哀請トナリタルガ  
義侠ナル主人ハ具ノ乞ヲ容レ吝嗇若クハ貧窮ノ  
主人ハ此ノ違書ヲ楮ニシテ峻拒シタリケレバ峻

拒セラレタル歩兵ハ幸フテ具ノ主人ヲ怨望セリ  
是ニ因リ幕府ハ一六ノ日毎ニ一人青銅一貫文充  
ヲ給スルヲ定メケルガ尚ホ小遣銭ノ引足ラズ  
シテ市中ノ湯屋寄席諸興行物小料理店ノ押借リ  
無銭飲食ノ慶目見シモ、具數ヲ知ラズ此ノ事遂  
ニ暴發シテ兩國見セ物小屋襲撃ノ大事サハアリ  
タリ萬助ハ無事ニ年限ヲ勤メ了リ藤懸邸ニ居住  
スルヲ乞ヒ維新ノ際領主本領安堵ノ時ニ供ヲ  
シテ本籍地ニ歸住セリ  
大槻姓中舊家アリ其ノ本宗ナルモノ今ニ存ス屋  
側ノ古松ヲ見テ古ヲ偲ブニ足ル所藏ノ感状ニ云  
ハク

京都府立総合資料館所蔵



當山篠村ハ幡陣馳奔處忠節有之今淑本以  
家人職可為者也仍執達此件

延元二年丁丑八月

尊氏

大槻一族中へ

談同家ノモノ曰ハク是レガ楠公カ又ハ新田氏ノ  
モノナラバ如何バカリノ品格ガアラウモノヲト  
篠村ニテ旌揚ケタル時ハ足利高氏ニテ御諱ノ  
尊ノ字ヲ拜戴ヒザル以前ナルニ斯ク署名シタル  
ハ如何ニト思ハル紙質モ墨色モ古雅ニシテ贋作  
トモ想ハレヌモノヲ  
大槻ハ高倉宮舊臣ノ一ニシテ今ニ高倉ト云フ字  
ノ地モアリ高倉ト名乗ル家モアリ

古戰場ハ西坂ノ東端ニアリ一二町四方ノ小丘ナ  
リ城山ヲ距ル五町餘乾位ニアリ城主上原石衛門  
尉カ赤井悪右衛門ニ亡ボサレタル所ソノ首ヲ祭  
ツテ荒神トシ首荒神ト唱ハタル所今ハ畑トナレ  
リ赤井ト上原トノ子孫今ハ一村ニ共住婚嫁ス  
以テ世ノ衰遷ヲ見ル



以久田村

以久田村 大字 佐田 栗 長沙 福垣 三宅

小崎新田 館 大畠 今田

此ノ村ハ和知川ヲ間テ、綾部ト相對シ其ノ北方  
 ニ位シテ南方ノ中筋村ト呼バハ鷹ハントス東方  
 ニ西八田村ヲ以テ界シ西方ニ佐賀雀部ニ村ノ地  
 ニ接ス郡中平野ノ巨擘タリ 山家藩領古史ノ徵ス  
 バキ無ク人口ノ贈灸モ亦寥々タルヲ以テ昔ヲ語  
 ルニ由ナシ僅ニ延徳永祿以後ノ事ヲ語ルベキノ  
 三 佐田栗館ナル舊三個村ノ頭字ヲ取リ萬葉假  
 字モテ村名トス

大字位田 舊高八百四十石 現今地價三萬三千  
 三百五十五圓三十五錢



赤國神社 小字館ニアリ往昔丹國神社ト呼ビ丹波  
一國ノ鎮座明神トス慶長五年福知山城主小野木  
方ノ軍來リ當地ノ城主ナル石川備後守ヲ攻メ兵  
火社殿ニ及ビ一朝ニシテ社實社記ト共ニ鳥有ニ  
歸ス遺品トシテ傳フル物ニ文ノ鳥アリ神輿ノ飾  
品ナリ文ノ鳥ハ鳳凰ノ形ヲ爲ス正和三年九月八  
日ト刻ス頌珍品ナリ一以テ往時ノ文物壯麗ヲ想  
殺スベシ 又銅製燕形ノモノアリ亦前同様ノ飾  
品ナリ 正和三年九月八日ノ銘アリ  
城址 延徳年中ニ守護代上原豊前守ノ據ル所ニテ  
元祿ノ頃ニハ萩野彦六コ、ニ居リ明智光秀ノ攻  
畧ニ遇ヒ没落スト云フ

慶長四年以後山家藩公谷氏ノ所領トナリ谷氏ノ  
支家其ノ一半ヲ領スルトナリ一宗ニ支ニ分領  
セラル明治二年ニ至リ久美濱縣ニ入り同五年更  
ニ京都府ニ管治セララル  
古墳 高臺上ニアリ圓形軌容百十個累々乎トシ  
テ相連ナリ一見シテ日向西都ヶ原ヲ想起セシム  
只其ノ形式ノ小ナルノミ往古由良川流域ニ住ミ  
シ一族ガ此ノ廣瀾ニシテ而モ農耕ニ妨ナク且朝  
曦夕日ヲ瞻望シ得ベキ形勝地ニ死者ヲ埋葬シタ  
ル大古人ノ心ヲ窺ヒ得ベシ其ノ前方後圓ノ五墳  
ハ築造ノ廣壯ナルヲ覺テ發掘品中漢式鏡ニ面ト  
赤國神社附近ヨリ出タセル平安朝初期ノ和鏡ア

以久田村

丹波志



リテ小學校ニ保存ス和鏡ノ作殊ニ優秀ナリ是レハ古墳ト相関セザルモノトス老人アリ云フ吾ガ幼時ニ是等ノモノ、土上ニ露出セシモノ少カラザリシト

楞嚴寺 真言宗塩藏山吉祥院楞嚴寺ト云フ古来

有名ニシテ且巨大ナル寺ナリ本尊ハ藥師如来聖

武天皇ノ天平年中林聖上人ノ開基ニテ国内ニ冠

絶セル伽藍ナルヲ舊記ニ見ユ幾許ノ變遷ヲ經テ

寛永五年領主九鬼氏ノ再造スル所トナル

十六善神ノ古畫一幅 真如法親王筆ノ愛染明王一

幅 弘法大師筆ノ不動明王一幅アリタルガ不動尊ハ

盜難ニ罹カリ今ヤ亡シ 大般若經二百卷ハ紙虫

ノ痕ノ多キヲ恨ム十六善神ト共ニ藤原時代ノ末

葉ヲ鎌倉時代ノモノト云フ應永年間ニ修理シタ

ルヲ經匣ニ歴然タリ此ノ經ハ天正年間ニ時ノ住

僧ガ云米ニ石ヲ以テ換ヘ得タルモノト云フ

大字 栗古ノ東栗村ニテ長沙三宅福垣館大畠今田

及ビ現今佐賀村ノ内ナル大字石原小字小貝ノニ

村ヲ合セラ西栗村ト云ハリ寛永年間九鬼隆季綾

部領主トナリテ其ノ封地トナル維新ノ際東西ノ

名稱ヲ廢ス 高一千六百九十石 維新地價六萬

四千四百六十四圓三十錢 長沙高一百零七石

地價三千八百三十八圓二十錢 三宅一百四十一

石五千二百三十六圓零六錢 福垣一百零九石三

以久田村

丹波 誌



千六百六十九圓九十錢 小崎新田十六石九百五十四圓三十六錢 大島三百十七石九千六百七十二圓四十六錢 今田百六十九石五千百二十一圓四十錢 元々綾部藩領

城址 永祿初年以來大槻佐渡守居住ス同三年若狹高濱城主逸見駿河守来り攻ム之レテ邀撃セラ

大ニ勝テ威名ヲ四隣ニ揮フ  
大川神社 城址ノ北ニアリ

高臺寺 曹洞宗 栗ニアリ  
大守館 舊高四百四十四石 明治地價一萬七千八百零一圓九十三錢 舊綾部藩領

寨址 永祿以後石川備後守ノ一族居守ニ威ヲ近

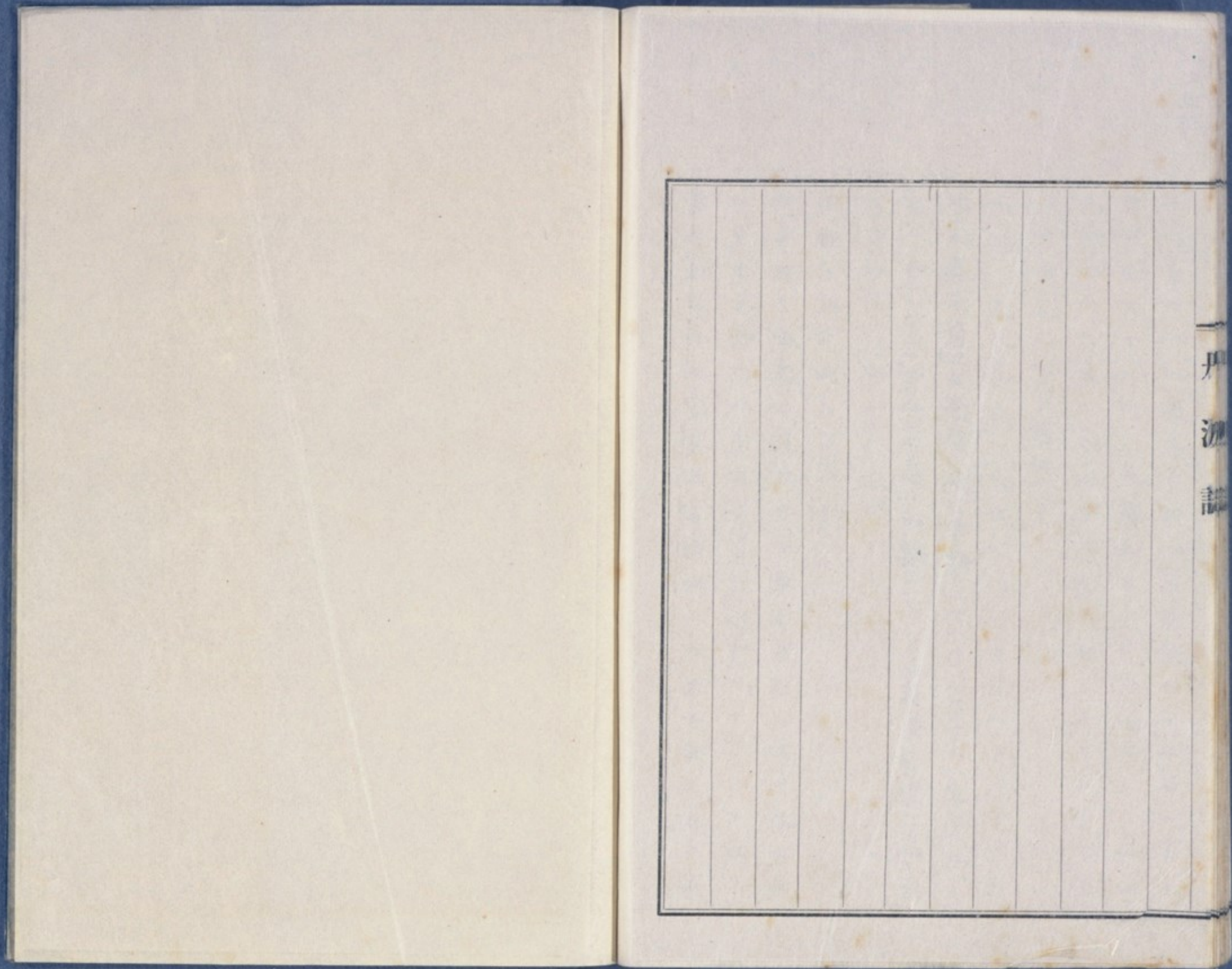
傍ニ振ヒシガ慶長五年福知山城主小野木氏ニ亡ホサル當時ノ外濠存シテ竹林中ニアリシガ明治初年ヨリ開墾シ盡クシテ桑園菜園トナル尚ホ一小祠ノ僅ニ存スルアリ

出火 大正十年六月八日午後九時塩見馬ノ助俵勉年齡六歳ノ兒マナヲ弄シテ發火シ強風ノ為ニ全燒三十六戸ニ及ブ

以久田村

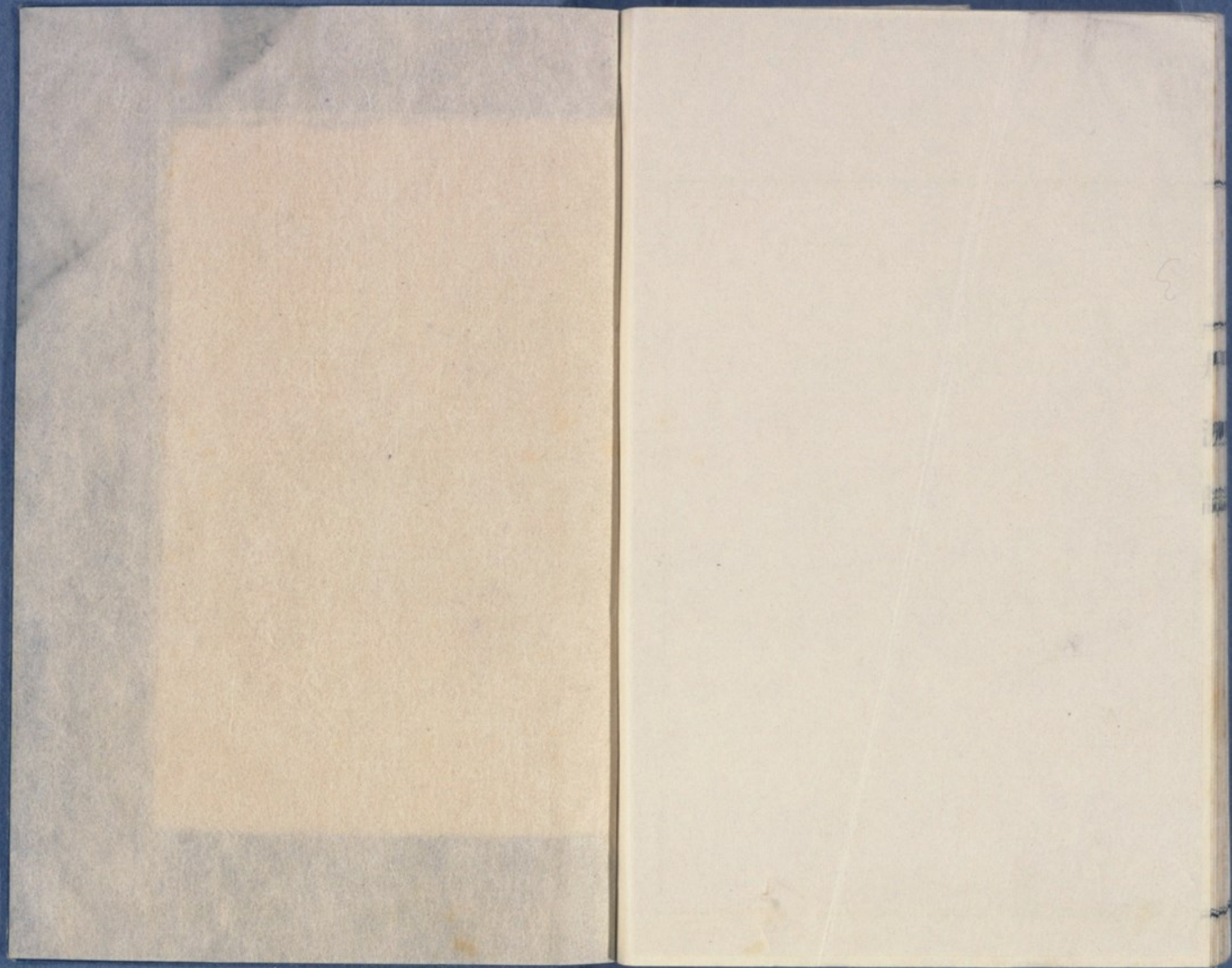
丹波誌





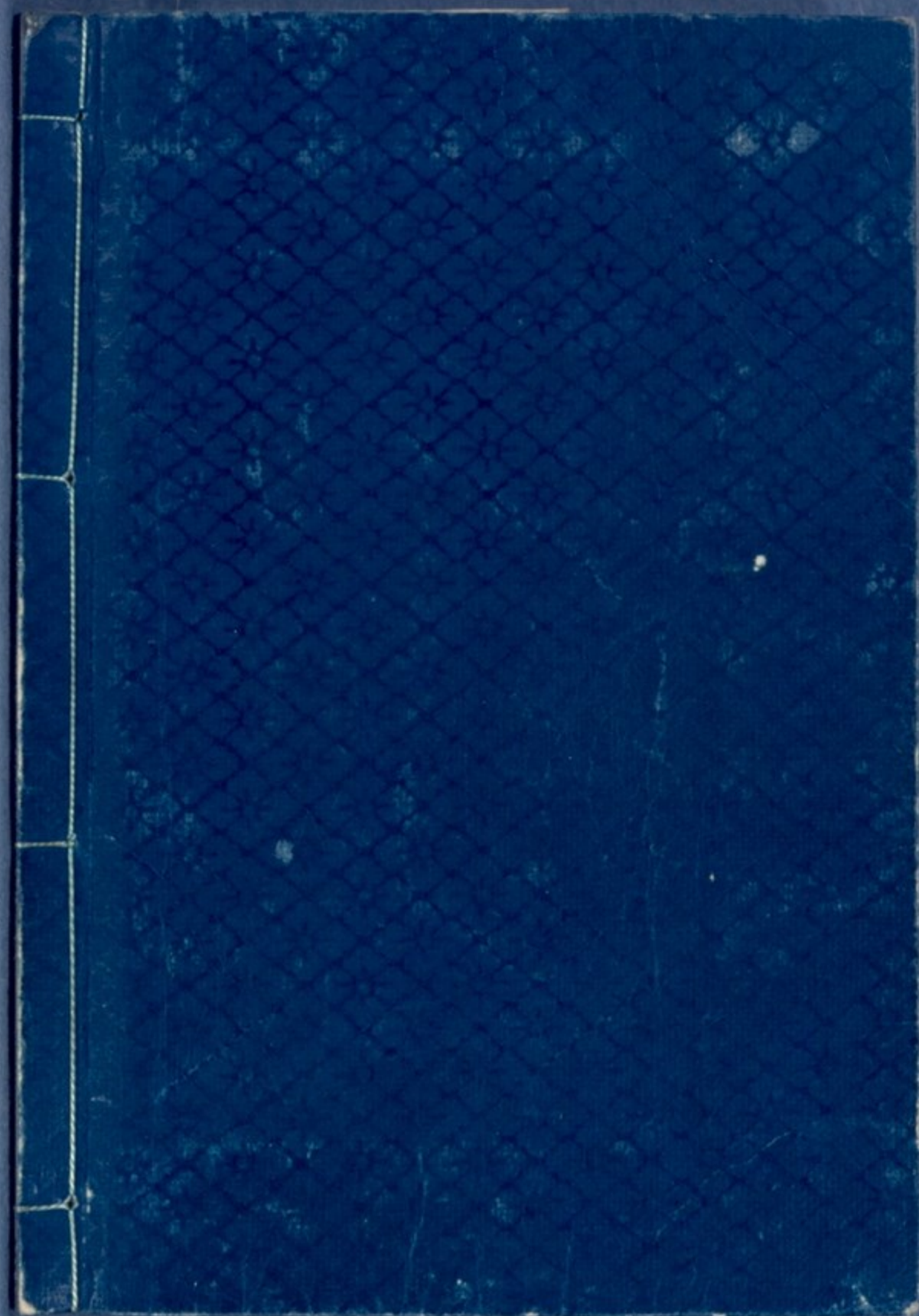
京都府立総合資料館所蔵





京都府立総合資料館所蔵





京都府立総合資料館所蔵